

看護実践研究センター一年報 第1巻



Annual Report
No.1 , 2022

Nursing Practice and
Research Center

目次

| | | |
|---|--------|----|
| 巻頭言 | 田中 京子 | |
| I. 看護実践研究センタープロジェクト研究・活動助成事業 | | |
| センターの目的と事業内容 | 三輪 恭子 | 1 |
| 1. 看護生涯学習支援部門 | | |
| 1) 研究報告 | | |
| (1) 在留外国人への産褥保健指導に関わる助産師のストレスと その関連要因の検討-尿中バイオピリンによる評価- | 高 知恵 | 4 |
| (2) うつ病入院患者への排便ケアによる患者の変化-事例研究- | 富川 順子 | 12 |
| 2) 活動報告 | | |
| (1) 地域包括支援センター看護職のネットワークの構築 | 岡野 明美 | 18 |
| (2) 同期型オンライン形式による 集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座 | 佐竹 陽子 | 25 |
| (3) がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護 師養成コース (がん看護インテンシブコース) | 林田 裕美 | 32 |
| (4) 家族への看護を考える会 家族看護オンラインフォーラム | 井上 敦子 | 38 |
| (5) 看護職のための継続教育実践講座 | 紙野 雪香 | 44 |
| (6) 看護職・介護職のための腰痛予防推進リーダー研修会 | 杉本 吉恵 | 51 |
| (7) 看護職を対象とした実践に活かす看護研究セミナー | 細名 水生 | 57 |
| 2. 府民健康支援部門 | | |
| 1) 研究報告 | | |
| (1) 心身障がい児の性行動の実態と養育者が認知する当人の セルフマネジメントに関するニーズ | 古山 美穂 | 64 |
| 2) 活動報告 | | |
| (1) 健康的に日常を生きることを応援する「ホッと&ハートの会」 | 南村 二美代 | 73 |
| (2) 地域における出前健康講座 | 根来 佐由美 | 79 |
| (3) 暮らしの保健室における住民育成活動 | 深山 華織 | 85 |
| 3. 国際学術研究推進部門 | | |
| 1) 研究報告 | | |
| (1) タイ王国マヒドン大学ラマティボディ校との研究プロジェクト COVID-19 ワクチンリテラシーとワクチン接種行動との関連 | 志田 京子 | 92 |

| | | |
|------------------------------------|--------|-----|
| II. 運営委員会活動 | | 98 |
| 1. 闘病記文庫 | 畠山 典子 | 99 |
| | 井上 敦子 | |
| 2. 広報活動 | 河野 あゆみ | 102 |
| 3. 看護実践研究センター運営委員会活動報告 | 三輪 恭子 | 103 |
| 4. 会計報告 | | 114 |
| III. CNS ネットワーク活動 | 富川 順子 | 116 |
| 資料：大阪公立大学大学院看護学研究科 | | |
| 看護実践研究センター規定（令和4年4月1日 規定第116号） | | 121 |
| 看護実践研究センター運営委員会規定（令和4年4月1日 規定第23号） | | 123 |
| 編集後記 | | 125 |

巻 頭 言

※ただいま準備中です

大阪公立大学大学院看護学研究科
看護実践研究センター
センター長 田中 京子

I. 看護実践研究センター プロジェクト研究・活動助成事業

センターの目的と事業内容

看護実践研究センター（以下、センター）は、本学設立の重点目標である高度研究型大学、高度人材育成、都市問題の解決による大阪府発展への貢献を鑑み、地元創成を目指す看護の研究・教育・実践を推進し、地元の看護の発展及び人びとの健康と生活の質向上に寄与するとともに、国際的学術拠点として国際的な学術研究活動を促進するため設立されました。センターでは、研究支援、地域貢献、人材育成、国際学術研究に関する様々な事業を行います。

プロジェクト研究・活動助成事業では、大阪府の看護の発展および地域住民の健康と生活の質向上に寄与し、保健医療福祉における看護・ケアの未来を見据えた国際的学術拠点としての基盤を創るための研究・活動を支援します。

本事業で助成を行う研究・活動課題には、以下の3つの部門があります。

1. 看護生涯学習支援部門

- ・看護職及び保健医療福祉関係者の人材育成（教育的取り組み）
- ・看護職及び関連職種との協働連携拠点となるネットワーク構築
- ・関係機関・実習施設等との共同研究

2. 府民健康支援部門

- ・地域住民や保健医療福祉の従事者とのネットワーク構築
- ・地域住民の健康増進、疾病・介護予防、療養管理に関わるヘルスリテラシーを醸成するための活動
- ・関係機関等との共同研究

3. 国際学術研究推進部門

- ・国際的学術研究の推進

2022年度は、選定基準として、公益性、地域における必要性（課題解決性）、先駆性・創造性・将来性、実現性を鑑み、看護生涯学習支援部門は研究支援が2件、活動支援が7件、府民健康支援部門は研究支援が1件、活動支援が3件、国際学術研究推進部門は研究支援が2件の計15件が採択され、活発な研究・活動が行われました。（表1）

表1

| 部門 | 種別 | 件数 | 課題 | 代表者 | 共同研究・活動者 |
|------------|----------|----|---|---|--|
| 看護生涯学習支援部門 | 研究 | 1 | 在留外国人への産褥保健指導に関わる助産師のストレスとその関連要因の検討 - 尿中バイオピリンによる評価 - | 高 知恵 | 千葉 貴子 中根 祥子 谷口 朱子 渡邊 香織 中嶋 有加里 古山 美穂 山田 加奈子 |
| | | 2 | うつ病入院患者への排便ケアによる患者の変化―事例研究― | 富川 順子 | 村上 嶺 大谷 智子 山川 みやえ |
| | 活動 | 1 | 地域包括支援センター看護職のネットワークの構築 | 岡野 明美 | 藤本 公恵 西嶋 智加 |
| | | 2 | 同期型オンライン形式による 集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座 | 佐竹 陽子 | 北村 愛子 井上 奈々 |
| | | 3 | がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した 看護師養成コース (がん看護インテンシブコース) | 林田 裕美 | 田中 京子 徳岡 良恵 |
| | | 4 | 家族への看護を考える会 家族看護オンラインフォーラム | 井上 敦子 | 中山 美由紀 |
| | | 5 | 看護職のための継続教育実践講座 | 紙野 雪香 | 細田 泰子 勝山 愛 |
| | | 6 | 看護職・介護職のための腰痛予防推進リーダー研修会 | 杉本 吉恵 | 相原 ひろみ 山口 舞子 細名 水生 富澤 理恵 |
| | | 7 | 看護職を対象とした実践に活かす看護研究セミナー | 細名 水生 | 森木 ゆう子 富澤 理恵 重見 雅子 溪 恵実子 |
| | 府民健康支援部門 | 研究 | 1 | 心身障がい児の性行動の実態と養育者が認知する当人のセルフマネジメントに関するニーズ | 古山 美穂 |
| 活動 | | 1 | 健康的に日常を生きることを応援する「ホッと&ハートの会」 | 南村 二美代 | 旗持 知恵子 中村 雅美 西 初子 福岡 綾 上村 里沙 門前 結 小西 利佳 太田 佳織 |
| | | 2 | 地域における出前健康講座 | 根来 佐由美 | 田中 健太郎 安本 理抄 大野 志保 都筑 千景 |
| | | 3 | 暮らしの保健室における住民育成活動 | 深山 華織 | 三輪 恭子 中川 智恵 山本 初美 |
| 国際学術研究推進部門 | 研究 | 1 | 日本語版ワクチンリテラシー尺度の開発 | 中山 祐一 | 志田 京子 益 加代子 相原 ひろみ 喜田 雅彦 WantanaManeesriwongul |
| | | 2 | 子どもへのCOVID-19 ワクチン接種の動向とワクチンリテラシー、態度、意図およびCOVID-19 ワクチン接種に関連する因子の検討 | 志田 京子 | 益 加代子 相原 ひろみ 喜田 雅彦 中山 祐一 WantanaManeesriwongul |

I. 看護実践研究センタープロジェクト研究・活動助成事業

1. 看護生涯学習支援部門

1) 研究報告

- (1) 在留外国人への産褥保健指導に関わる助産師のストレスとその関連要因の検討-尿中バイオピリンによる評価-
- (2) うつ病入院患者への排便ケアによる患者の変化-事例研究-

在留外国人への産褥保健指導に関わる助産師のストレスとその関連要因の検討

－尿中バイオピリンによる評価－

高知恵 渡邊香織 中嶋有加里 古山美穂 山田加奈子

(実践看護科学領域 家族支援看護科学母性看護・助産学)

千葉貴子 中根祥子 谷口朱子 (社会福祉法人石井記念愛染園附属愛染橋病院 助産師)

北條渉 (セルスペクト株式会社 COVID19 技術開発部 部長: CTO)

1. 研究背景

日本の国際化や外国人労働者の受け入れ拡大施策に伴い、近年の在留外国人数は増加傾向にある(政府統計の総合窓口、2022)。特に若い世代の在留外国人は結婚、妊娠、出産、育児という大きなライフイベントを経験する者も多い。日本の保健医療水準は最高水準にあるが、在留外国人は言語、文化・風習、経済的問題から、日本の医療における課題があることが明らかとなっている(森ら、2019; 齋藤ら、2019; 別府ら、2020; 金子ら、2020)。一方、在留外国人へ医療や看護を提供する助産師・看護師にも文化や風習の違いから指導が伝わりにくい困難(Maeno et al., 2011; 二見ら、2015; 佐藤ら、2022)、説明不足や誤解から安全な医療が提供できない不安(井上ら、2006; 濱井ら、2017)、必要な保健指導を行えない無力感(佐藤ら、2022)があり、外国人対象者に苦手意識をもって看護を提供することから、助産師・看護師のストレス因子となっていることが予測される。

ストレス評価には主観的及び客観的指標がある。質問票などの主観的評価指標は、測定が簡易である一方、対象者が点数をコントロールでき、真実を語らず正確性に乏しい可能性がある。そのため主観的評価だけでは適切なストレス評価とは言えず、客観的指標の測定も必要である。客観的評価指標としては唾液や尿、血液などの生理学的物質測定がある。身体侵襲が低い唾液中のストレスマーカーは、サーカディアンリズムの影響が大きく(堀ら、2018)、唾液分泌量や粘度、組成の変動や個人差の補正が確立されていない(田中ら、2011)。さらに運動や飲食等の生活行動の考慮が必要で対象者の生活リズムに合わせた採取や評価に注意が必要である(堀ら、2018)。一方、尿は非侵襲的採取が可能であり、随時尿であってもクレアチニンによる尿量濃度補正からバイオピリン濃度を補正できるなどのメリットがある。尿中バイオピリンによるストレス評価に関する先行研究では、妊婦の尿中バイオピリン値と精神的ストレスの関連(松崎ら、2006; Matsuzaki et al., 2014)、人前スピーチストレス(Yamaguchi et al., 1994)や手術ストレス(Shimoharada et al., 1998)によるバイオピリンの上昇、マウスにおいて社会的ストレスによるバイオピリン上昇(Miyashita et al., 2006)が報告されており、尿中バイオピリンは心理的ストレスのバイオマーカーとして有用であり、非侵襲的な採取が可能なことからも酸化ストレスマーカーとして注目されている。

2. 目的と意義

1) 目的

在留外国人対象者の多い総合周産期母子医療センターで勤務する助産師を対象に、質問票および尿中バイオピリン値から、以下について明らかにする。

- (1) 在留外国人褥婦及び日本人褥婦への産褥保健指導時の助産師の思いとストレス
- (2) ストレスに関連する要因

2) 意義

助産師の保健指導時の思いとストレス傾向、およびストレスに関連する要因が明らかとなることで、外国人支援に関わる助産師の負担軽減、医療安全の確保など、看護職への支援の示唆を得る。

3. 研究方法

1) 研究デザイン

相関関係的研究デザイン

2) データ収集期間

2022年10月5日～12月31日

3) 研究対象施設および研究対象者

- (1) 研究対象施設：在留外国人が多く居住する地域の中でも、在留外国人を多く受け入れている総合周産期母子医療センター1施設
- (2) 研究対象者：研究対象施設の産科病棟で勤務し、在留外国人褥婦および日本人褥婦への保健指導を担当する助産師、25名程度
日本語を第一言語としない者、疾患があり内服している者、妊娠中の者、は除外した

4) データ収集方法

(1) 共同研究契約の締結

本研究は大阪公立大学、愛染橋病院、セルスペクト株式会社の3者で個人情報取扱特記事項を含む共同研究契約書を締結し実施した。共同研究契約書の内容は、大阪公立大学、愛染橋病院、セルスペクト株式会社の3者で確認し、覚書締結の手続きは大阪公立大学研究推進課によって実施された。

(2) 研究対象施設の同意

研究対象施設の看護部長に研究協力依頼書と研究協力同意書を用いて、本研究の課題名、研究目的、研究期間、研究対象施設および研究対象者、研究方法、研究内容、倫理的配慮、研究の資金源等や研究に係る利益相反、研究組織、研究同意の撤回について口頭および書

面で説明し、文書による同意書をもって研究実施の同意を得た。

(3) 研究参加者のリクルート

研究代表者又は共同研究者が、産科病棟の助産師全員に本研究の概要についての研究協力依頼書を病棟内の対象助産師個人のメールボックスに配布した。研究に参加しても良いと考えている対象助産師は直接大阪公立大学の研究代表者宛にメールを送信いただくよう依頼書に記載した。研究に参加しても良いとのメール送信があった対象者には、大阪公立大学の研究代表者が個別で日時を調整し、本研究の課題名、研究目的、研究期間、研究方法、研究内容、倫理的配慮、研究の資金源等や研究に係る利益相反、研究組織、研究同意の撤回について口頭および書面で説明した。研究への参加は、研究協力同意書を用いて、文書による同意を得た。

(4) データ収集

文書による研究同意の得られた研究参加者に、在留外国人褥婦指導時と日本人褥婦のみ指導時の質問票と尿中バイオピリン採取用検体容器を一つのセットにし ID を付与したものを手渡した。全てのデータ収集後に、研究参加者個人のストレス値を参加者自身ができるように、対照表を作成し、大阪公立大学の研究代表者のみが把握できるようにした。

研究参加者には、日勤帯で産褥保健指導を担当した日に各質問票への回答および、検体の自己採取を依頼した。保健指導は1日に複数回あることが想定されるが、保健指導の回数に関わらず調査日の思いを回答するように依頼した。

尿検体の自己採取は、日勤帯での保健指導担当後～勤務当日退勤までの間での採取を依頼した。質問票は日勤帯での保健指導担当後～勤務当日中に回答するように依頼した。

研究期間内に外国人褥婦を含めて担当した1日と、日本人褥婦のみを担当した1日について、それぞれ①質問票の回答、と②尿検体の自己採取、調査ごとの間隔は最低1週間以上あけるように依頼した。

回答した質問票は郵送法で回収し、採取した尿検体は遮光袋に入れ、産科病棟詰所奥の研究検体保管用冷凍庫で冷凍保存した。保管された検体は、1～2週間毎に研究者が回収し大阪公立大学へ移送、研究用冷凍庫で保管した。全ての検体回収後、セルスペクト株式会社に送付、測定を実施した。

5) 調査内容

(1) 質問票

(a) 基本属性(年代、助産師経験年数)

(b) 調査日の担当受け持ち褥婦数(日本人、外国人別での受け持ち人数)

- ・受け持ち外国人褥婦の言語レベル(日本語が全く不可、片言の日本語が可、支障ない日本語会話が可)
- ・調査日に受け持ち褥婦に生じた緊急対応が必要な事項の有無とその時感じたストレス、

調査日に生じた受け持ち褥婦以外の緊急対応が必要な事項のうち自身に関わる事項の有無とその時感じたストレス（Visual Analogue Scale：VAS で評価）

(c) 日本語以外の言語能力

- ・在留外国人人口の多い国の言語として、英語、中国語、韓国語、ベトナム語、タガログ語、その他、を選択肢とした。
- ・選択した言語のコミュニケーションレベルについて、ジェスチャーや簡単な単語での片言の会話、支障ない日常会話、医療用語を用いた会話、を選択肢とした。

(d) 生活習慣

- ・飲酒（1：習慣的に飲む、0：機会飲酒・ほとんど飲まない・飲めない）
- ・喫煙（1：吸う、0：吸わない）
- ・運動（1：週に150分以上の中強度の有酸素運動をしている、0：週に150分以上の中強度の有酸素運動をしていない）
- ・睡眠・休息（1：睡眠で休息が十分にとれている、0：睡眠で休息が十分にとれていない）を選択肢とした。

(e) 産褥保健指導時の思い

「時間がかかる」「手間がかかる」「苦手である」「負担である」「不安である」「やりがいがある」「褥婦が理解できたか不安である」の7項目に対して（全くそうは思わない～非常にそう思う）について Visual Analogue Scale：VAS で評価した。

調査日に保健指導が複数回あった場合も回数に関わらず調査日の思いとして回答を求めた。

(f) Stress Response Scale：SRS-18（鈴木ら，1997）

本尺度は、18項目3つの下位尺度「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」で構成される。調査日の感情や行動の状態にどのくらい当てはまるのかについて、1 怒りっぽくなる、2 悲しい気分だ、3 何となく心配だ、4 怒りを感じる、5 泣きたい気持ちだ、6 感情を抑えられない、7 くやしい思いがする、8 不愉快だ、9 気持ちが沈んでいる、10 いらいらする、11 いろいろなことに自信がない、12 何もかもいやだと思う、13 よくないことを考える、14 話や行動がまとまらない、15 なぐさめて欲しい、16 根気がない、17 ひとりでいたい気分だ、18 何かに集中できない、の18項目について、0：全くちがう、1：いくらかさうだ、2：まあさうだ、3：その通りだ、の4件法で回答を求め、合計がストレス得点（0～54点）となる。

(g) ストレスへの対処

自身のストレスへの対処（全く対処できない～非常に対処できる）について VAS で評価した。

(h) 外国人褥婦への看護体験や思いについての自由記述

(2) 酸化ストレスマーカー（尿中バイオピリン値）

- ・調査日の保健指導担当後のストレス値を評価するために、保健指導終了後から調査日退勤までの間に採尿した尿で評価した。
- ・採尿検体から尿中バイオピリン値 ($\mu\text{mol/gCr}$) を、バイオピリン ELISA キット（セルスペクト株式会社）マニュアルに準じて測定した。検体の希釈倍率は4倍、1検体につき2回分測定し、その吸光度平均からバイオピリン (BP) 濃度を算出した。クレアチニン (Cre) は、イアトロ LQA CRE II（栄研化学株式会社）を使用し、用手法で実施した。Cre も1検体につき2回分測定し、その吸光度平均から濃度を算出した。最終的に、各検体の BP 濃度を Cre 濃度で除算 (BP/Cre) して尿中バイオピリン値を算出した。

6) 分析方法

- (1) 質問票から得られた情報の割合および代表値を記述した。
- (2) 保健指導時の思い、ストレス尺度 (SRS-18) および尿中バイオピリン値は正規性を確認し、平均値 (標準偏差) または中央値 (四分位範囲) で示し、外国人褥婦担当時と日本人褥婦のみ担当時の2群間で相違を検討した。

7) 倫理的配慮

研究対象施設の倫理委員会および大阪公立大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会での承認を得て実施した (承認番号 ; 04-10、2022-16)。

4. 結果

1) 分析対象者の属性

研究対象の助産師 17 人から研究協力の同意を得た。そのうち、2 人からは 1 回 (外国人褥婦または日本人褥婦)、12 人からは 2 回 (外国人褥婦と日本人褥婦) のデータを収集した。本研究では、外国人褥婦と日本人褥婦への保健指導実施時の思いおよびストレス値の比較を行うため、2 回のデータ収集ができた 12 人を分析対象とした。

分析対象の助産師 12 人の年齢は、20 歳代前半 8 人 (66.7%)、20 歳代後半 4 人 (33.3%) であった。助産師経験年数は 12 人全員 (100%) が 3 年目以下であった。

日本語以外の言語能力については、英語は「ジェスチャーや簡単な単語での片言の会話ができる」9 人 (75.0%)、「支障ない日常会話ができる」1 人 (8.3%) であった。韓国語は「ジェスチャーや簡単な単語での片言の会話ができる」1 人 (8.3%)、中国語、ベトナム語、タガログ語、その他の言語に「できる」と回答した者はいなかった。

生活習慣について全員 12 人が、飲酒は「機会飲酒・ほとんど飲まない・飲めない」、喫煙は「吸わない」と回答した。運動は、「週に 150 分以上の中強度の有酸素運動をしている」1 人 (8.3%)、睡眠・休息は、「睡眠で休息が十分にとれている」9 人 (75.0%) であった。

2) 外国人褥婦と日本人褥婦への産褥保健指導時の思いとストレス

受け持ち褥婦への保健指導実施において、外国人褥婦担当時と日本人担当時を2群間で比較したところ、外国人褥婦担当時の思いとしては「時間がかかる」、「手間がかかる」、「苦手である」、「負担である」、「理解できたか気になる」の項目が有意に高かった。

外国人褥婦担当時のストレスとしては、ストレス尺度 (SRS-18) は、下位尺度である「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」および合計得点の全てにおいて有意差はなかった。酸化ストレスマーカーである尿中バイオピリン値 (BP/Cre) も有意差はなかった。

3) 外国人褥婦への看護体験や思い

研究対象者に外国人褥婦への看護、助産の経験で楽しかったこと、やりがいを感じたこと、困ったこと、辛かったことなどの体験談や思いについて自由に記入していただいた。12人中9人から回答を得た。以下、抜粋し、原文のまま示す。

- ・「わかったわかった」と聞き流されていることもあったり、「わかった」と言っても理解していないこともありどれだけ理解しているかわからず困った。
- ・日本語が全くできない人で、夫と指導することとなるが、夫が時間に遅れることで一人の人に時間がかかり、他の人のケアを十分にできなかったことが困った。
- ・外国人の患者さんと関わるのは言葉の壁があって大変ですが、一度受け持っただけでも別の日に廊下ですれちがうと毎回手を振ってくれることが多くて嬉しいです。全員がそうではありませんが日本人の方よりも明らかにそうしてくれる人数が多いです。

5. 研究の進捗状況と今後の予定

現在、データ収集を終了し、分析途中である。今後さらなる分析を追加する。

研究成果公表としては、2023年11月24～26日に開催されるグローバルヘルス合同大会2023での発表を予定する。また、国際臨床医学会雑誌への論文投稿予定である。

6. 研究の限界と今後の課題

本研究は横断的研究であること、研究対象者が大阪府下の1施設の助産師のみを対象としており対象施設および対象者数が少ないこと、加えてストレスに関連する他の要因がある可能性があるなどの限界がある。そのため、今後は対象施設および対象者数を増やし、研究を継続していく必要がある。

謝辞

多忙な勤務の中、本研究にご協力いただきました、助産師の皆様に感謝申し上げます。また、共同研究契約締結にあたり多大なるご協力をいただきました大阪公立大学研究推進課、井上忠弘様、森村純子様にも感謝申し上げます。

本研究は、大阪公立大学と愛染橋病院、セルスペクト株式会社の共同研究で実施した。

本研究は、2022年度大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター研究助成を得て実施した。

COIに関して、阿倍野地区利益相反マネジメント委員会に申請した。本研究は、利益相反状態にあるが管理下にある。

文献

- ・別府佳代子、木内恵、萬弘子、小山内泰代：救急搬送され緊急入院となった外国人患者が抱える困難、日本渡航医学会誌 14(1):6-11、2020.
- ・二見茜、堀成美：外国人患者受け入れ環境整備事業拠点病院で働く看護師の外国人患者対応経験と課題の検討、日本渡航医学会誌 9(1):12-15、2015.
- ・濱井妙子、永田文子、西川浩昭：全国自治体病院対象の医療通訳者ニーズ調査、日本公衆衛生誌 64(11):672-683、2017.
- ・堀輝、香月あすか、菅健太郎、吉村玲児：シンポジウム 客観的なストレス評価方法について、日本職業・災害医学会会誌 66 (5)、2018.
- ・井上千尋、松井三明、李節子、中村安秀、箕浦茂樹、牛島廣治：日本語によるコミュニケーションが困難な外国人妊産婦の周産期医療上の問題点と支援に関する研究——医療機関における12年間の分娩事例の分析より——、国際保健医療 21(1):25-32、2006.
- ・金子志保、小野一郎、池田哲哉、丸山陽介、三浦恵莉、郡詩織、大野晴、山本晃子、立花由理、他：当院の外国人妊婦の検討、東京産科婦人科学会会誌 69(4):593-596、2020.
- ・Kondo A, Kambayashi C, Koizumi M, Futami A: Factors related to difficulty in caring for foreign patients among nurses in Japanese hospitals, Journal of International Health 36(2):39-47, 2021.
- ・Maeno M, Sakuyama M, Motoyama S, Matsuo H: Japanese Nurses' Views of Perioperative Management of Foreign Patients in Osaka, Journal of International Health 26(4):273-280, 2011.
- ・松崎政代、春名めぐみ、大田えりか、渡辺悦子、村山陵子、塚本浩子：妊娠中の酸化ストレスマーカーとしての尿中バイオピリン、日本助産学会誌 20(2):40-49、2006.
- ・Matsuzaki M, Haruna M, Ota E, Murayama R, Yamaguchi T, Shioji I, Sasaki S, Yamaguchi T, Murashima S: Effects of lifestyle factors on urinary oxidative stress and serum antioxidant markers in pregnant Japanese women: A cohort study, BioScience Trends 8(3):176-184, 2014.
- ・Miyashita T, Yamaguchi T, Motoyama K, Unno K, Nakano Y, Shimoi K :Social stress increases biopyrrins, oxidative metabolites of bilirubin, in mouse urine. Biochemical and biophysical research communications 349(2):775-780, 2006.
- ・森礼子、柳澤理子、永田容子：地域 DOTS フィリピン人結核患者の服薬中断リスク要因、日本

- 公衆衛生看護学会誌 8(3):135-144, 2019.
- 齋藤恵子、萱場一則、鈴木幸子、延原弘章、金野倫子、浅川泰宏：在日ラオス人女性の母国における産後の伝統的プラクティスに対する認識と実践、日本健康学会誌 85(4):129-140, 2019.
 - 佐藤沙紀、杉本敬子：外国人妊産婦とのコミュニケーションにおける助産師の経験、国際保健医療 37(1):11-24, 2022.
 - 政府統計の総合窓口 e-Stat、国籍・地域別 在留資格（在留目的）別 在留外国人 2022年6月 [Web page] Available at <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20220&month=12040606&tclass1=000001060399> Accessed Feb 18, 2023.
 - Shimoharada K, Inoue S, Nakahara M, Kanzaki N, Shimizu S, Kang D, Hamasaki N, Kinoshita S: Urine Concentration of Biopyrrins: A New Marker for Oxidative Stress in Vivo, *Clinical Chemistry* 44(12):2554-2555, 1998.
 - 鈴木伸一、嶋田洋徳、三浦正江、片柳弘司、右馬埜力也、坂野雄二：新しい心理的ストレス反応尺度（SRS-18）の開発と信頼性・妥当性の検討、行動医学研究 4(1):22-29, 1997.
 - 田中喜秀、脇田慎一：ストレスと疲労のバイオマーカー、日本薬理学雑誌 137(4):185-188, 2011.
 - Yamaguchi T, Shioji I, Sugimoto A, Komoda Y, Nakajima H: Chemical structure of a new family of bile pigments from human urine, *J Biochem* 116:298-303, 1994.

うつ病入院患者への排便ケアによる患者の変化 —腸内細菌叢調整を中心にした排便ケア：事例研究—

実践看護科学領域 生活支援看護科学 精神看護学分野 富川順子

共同研究者：公益財団法人浅香山病院 村上 嶺 大谷智子

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 山川みやえ

2022年度看護実践研究センターの助成を受けて行った研究について、報告する。

1. 研究計画

大阪公立大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会の承認を得るための研究計画の修正と、2事例のデータ収集を行った。ここでは研究計画を中心に報告する。

1) 研究の背景・目的・意義

うつ病患者の半数が便秘などの身体的症状を示すこと（山家ら, 2004）、うつ病による食欲低下や活動量の低下、抗うつ薬の副作用で便秘が起こりやすいことから、うつ病の人への看護では抑うつ症状のケアだけではなく、食事摂取を促し排便コントロールの支援をするケアが重要である。さらにうつ病患者の回復過程において便秘などの身体症状と精神症状には有意な相関がある（福田, 2011）。便秘の改善は抑うつ改善の目安にできることから、排便ケアを行って患者の便秘が改善すれば、うつ病患者の回復を促進できる可能性にもなると考えられる。

入院中のうつ病患者の排便ケアについて、うつ病と双極性障害の患者を対象にオリゴ糖摂取を促し腹部マッサージをする（高野ら, 2008）、あるいはうつ病と統合失調症の患者を対象に乳酸菌飲料の摂取を促して腸内環境の改善を図るケアを実施したという事例報告（五十嵐, 2004）がある。しかしうつ病患者のみを対象にして排便ケアを検討した研究や、排便ケアを行って患者の腸内環境や精神症状、セルフケアに起こる変化について検討した研究は日本において見当たらなかった。日本においてうつ病患者に合った排便ケアについてはまだ明らかになっていないと考えたことから、入院中のうつ病患者への排便ケアについて明らかにする研究を行うことにした。

本研究結果は入院中のうつ病患者への排便ケア開発のための基礎資料にできるとともに、退院後のうつ病患者の地域生活における排便コントロールにも役立てることができると考える。

2) 研究目的

- (1) 精神科急性期病棟に入院するうつ病の患者に排便ケアを行い、患者の腸内細菌叢、精神状態、排便コントロールを含むセルフケアの入院中の変化について明らかにする。
- (2) これまでの研究結果と合わせてうつ病の患者への排便コントロールを支援する看護ケアとして必要な看護ケアについて考察する。

3) 研究期間

2022年10月4日～2023年3月31日（予定）

4) 研究期間

(1) 研究デザイン 事例研究・介入研究

事例を対象に2)の介入を行い、その結果を測定する。

(2) 介入方法

現在の日本においては乳酸菌飲料を用いた研究は臨床研究法による研究デザインが必要となることから、今回の研究ではその方法は除外した。うつ病患者に対するものではないが、排便ケアとしては、在宅高齢者に座薬使用と同時に温罨法を行うことで排便状況が改善したとする報告(谷垣ら, 2005.)、女子大学生において積極的な身体活動の日数と排便状況の関連が見られたとする報告(庄司ら, 2016.)がある。従って、今回はうつ病患者に、温罨法あるいは運動を中心にした排便ケアを行って、患者に起こる変化を検討することにした。

患者が自宅で継続でき、精神的な負荷が少なく、リラクゼーション効果もあると考えられる1日15分程度の取り組みを対象となる患者に相談して決めてもらい実施する。研究実施予定病棟では排便ケアとして、排便状態の観察、食事内容の見直し、温罨法と腹部マッサージ、散歩などの運動を勧めるケアを行っている。これらのケアの中から、例えば10分程度の温罨法をしながら患者が自分で実施する腹部マッサージを取り入れる、1日1回10分ほど腹式呼吸を行ったあとに立位の腹筋を使う運動を行うなど、対象者のできそうな取り組みを1日1回程度、可能な範囲で行ってもらう。

介入はすべて、浅香山病院研究者が患者と話し合いながら行う。

(3) 調査内容と収集方法 図1

患者に起こる変化としては排便状態の測定に加えて、排便に影響するものとして身体状態と精神症状の他に、食事時間と内容・運動・日中の活動・生活リズム(Yamada, 2017)、腸内細菌叢(三澤ら, 2022)の報告があることから、本研究では患者の生活状態と腸内細菌叢の変化についても測定することにした。

a. から c. のデータ収集について、入院時に1回、2週間後に2回目を行い、介入を開始する。介入開始2週間後から退院までに3回目のデータ収集を行う。退院時に e. のデータ収集も行う。

基本データとしては、研究開始前に診療録から年齢、性別、診断、服用している薬剤、身体的な治療の既往歴について収集する。介入前に2回検査結果を測定する理由は、介入前の一定期間の変化と介入後の一定期間の変化を比較するためである。データ収集は、浅香山病院研究者が担当する。

a. 腸内フローラ解析

通常検査の検便と同様の検査キットを用いて、対象者に便検体の採取を行ってもらおう。検体は株式会社サイキンソー検査キットマイキンソーにて、ビフィズス菌、乳酸菌、酪酸菌、クロストリジウム属細菌、アリスディペス属細菌、フーカリバクテリウム属細菌、ストレプトコッカス属細菌の検体における%について分析が行われるので、その結果を使用する。便検体を郵送すると、データ解析の結果がHPを通じて病院に通知される。この結果通知は診療で行う検査の外部委託時と同様である。

b. 精神状態

うつ病の指標である抑うつ状態と不安について、HAM-D 構造化面接日本語版にしたがって研究者が面接を実施する。

精神科診察、研究で用いられるうつ状態を測定する尺度で、この1週間のうつ気分、罪業感、自殺願望、活動、欲求、不安、身体症状、精神症状等計21項目について、3～5段階の程度でたずねる質問紙である。所用時間は10分程度であり、うつ状態の程度が得点として表される。この尺度は出版されており（中根, 2004）、商業用の使用でなければ出版社の許諾は不要である。

c. 日本語版便秘評価尺度（CAS）MT版による便秘状態の調査

深井らによって開発された日本語版便秘評価尺度（深井ら, 1995）で、ここ1週間のお腹がはった感じ、排ガス量、排便回数、便の量、形状などを8つの質問から3段階でたずねる。看護師が毎日の看護ケアで患者の状態を聞く時にたずね記載する。各質問の得点を計算して変化を表す。使用許諾は作者より得た。

d. 排便と日常生活についての調査

看護師が独自に作成した質問紙であり、1日に1枚とし、研究者の出勤日に患者にたずねながら、睡眠、日中の活動、食事、入浴、腹部状態、排便状況（cで聞くことができない分）、患者が行った排便ケアの取り組みについても記載する。日常的な看護ケアで患者に聞いている内容であるので、日常のケアの中で実施する。

e. 退院時の患者への半構造化面接：15分程度で排便ケアの感想、あれば良かったと思う排便ケア、入院前の生活と変わったこと、うつ病の経過に影響があったと思うか、自宅で継続できそうかについて自由に語ってもらう。

インタビューは研究実施病棟内の診察室あるいは面談室で、病棟共同研究者が行う。

（4）分析方法

腸内細菌叢についてはサイキンソーに解析を依頼し、PHと細菌の種類ごとの細菌数を

示す。HAM-D については測定用紙の集計方法に従って得点を計算する。そのほかのデータについては項目ごとに記述内容を質的にまとめる。数値のものは数値で変化を示す。

(5) 研究対象者の選定方針および除外基準

精神科急性期治療病棟に入院するうつ病と診断された 60 歳未満の患者 2 人。重度の抑うつ状態ではない任意入院の患者。可能な限り抑うつ状態の変化が大きくないと考えられる患者で、主治医から研究参加による害はないと判断された患者。また入院時、便秘（3 日以上排便がない状態、または毎日排便があっても残便感がある状態）傾向の主訴がある患者。

患者の選定は病共同研究者らが条件に合う患者について、治療への影響がないことを主治医に確認して行った。

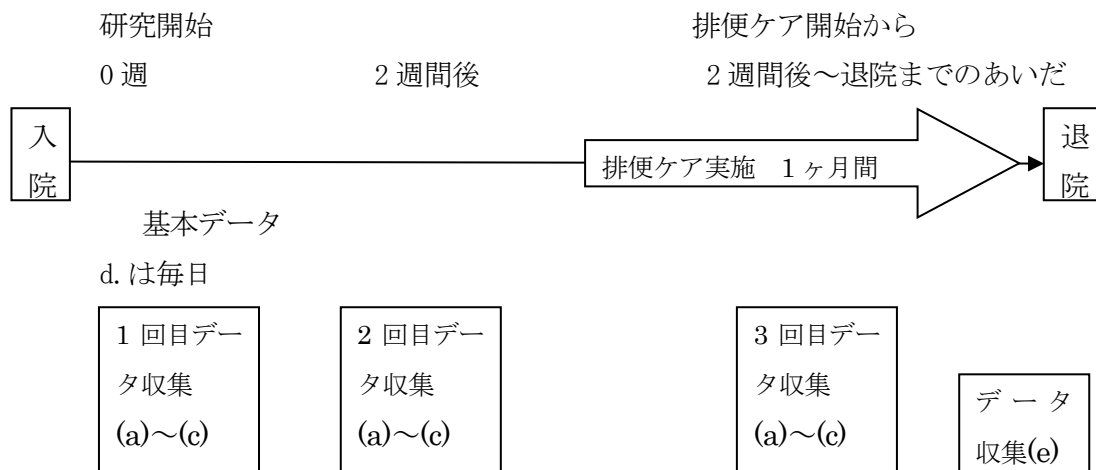


図 1 本研究における介入とデータ収集

5) 倫理的配慮

介入方法の安全性について、これらの委員会の承認を受けられるように修正を行い、浅香山病院倫理委員会、大阪公立大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。研究は、自由意思による参加、不参加でも不利益は一切発生しないこと、中断の自由を含む倫理的配慮についての説明を紙面を用いて口頭で説明を行い、紙面に同意の得られた患者を対象にした。研究結果は UMIN-CTR 登録予定である。

2. 2023 年 2 月までに実施した内容

上記倫理委員会の承認を得たが、新型コロナウイルス感染症流行のため、2023 年 1 月からのデータ収集開始となった。研究協力者は、30 代女性患者（診断 うつ病）と 50 代 男性患者（診断うつ病）である。現在、データ収集を行っており、2023 年 3 月末日までには終了予定である。

3. 今後の予定

2023年度6月頃までにはデータ分析を終えて、2023年8月頃までの論文化を目指している。

文献

深井喜代子ら(1995)：日本語版便秘評価尺度の検討、看護研究、28(3)、p. 201-208.

福田大祐(2011)：うつ病性障害の身体症状を回復の指標とした看護判断の検討、日本精神保健看護学会誌, 19(2), 1-9.

五十嵐浩(2004)：向精神薬服用者の便秘対策としての乳酸菌の利用、日本看護学会論文集, 精神看護, 35, 197-199.

三澤昇他：消化器疾患と腸内細菌叢の関わり—臨床的意義と治療への影響—慢性便秘症と腸内細菌叢、Progress in Medicine, 42(3), 2022.

中根允文編(2004)：HAM-D 構造化面接 SIGH-D, 星和書店.

庄司吏香他(2016)：女子大学生における食事バランスガイドを用いた食事摂取調査および身体活動と排便習慣との関係、Nagoya Journal of Nutritional Science, 2, 83-91.

高野千佳他(2008)：便秘と精神症状の関係 腸活への取り組み、筑水会神経情報研究所, 筑水会病院年報, 36, 17-20.

谷垣静子他：在宅高齢者の排便ケア 坐薬・温湿布マッサージの併用、訪問看護と介護, 10(12), 2005.

Yamada Masaaki et al : Life Style and Bowel Movements in School Children: Results from the Toyama Birth Cohort Study, pediatrics international, 59(5), 604-613, 2017.

山家邦章他(2004)：うつ病患者の心気症状の臨床検討、精神神経学雑誌, 106(7), 867-876.

I. 看護実践研究センタープロジェクト研究・活動助成事業

1. 看護生涯学習支援部門

2) 活動報告

- (1) 地域包括支援センター看護職のネットワークの構築
- (2) 同期型オンライン形式による
集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座
- (3) がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース（がん看護インテンシブコース）
- (4) 家族への看護を考える会 家族看護オンラインフォーラム
- (5) 看護職のための継続教育実践講座
- (6) 看護職・介護職のための腰痛予防推進リーダー研修会
- (7) 看護職を対象とした実践に活かす看護研究セミナー

地域包括支援センター看護職のネットワークの構築 ～交流会の開催～

岡野明美

1. 活動の背景と目的

地域包括支援センター（以下、包括）は、2006年4月に創設された高齢者の総合相談、権利擁護、介護予防ケアマネジメント等を担う地域包括ケアシステムの中核機関である。2021年4月末で全国5,351箇所¹⁾に設置され、設置体制は、市町村が運営する直営型と民間法人に業務委託する委託型がある。その割合は、直営型20%、委託型80%¹⁾で年々委託型が増えている。職員は、保健師等（保健師と看護師）、社会福祉士等、主任介護支援専門員等の3職種の配置が義務づけられている。1施設における平均配置人数は、保健師等1.7人、社会福祉士1.9人、主任介護支援専門員1.5人²⁾である。保健師等は介護予防ケアマネジメント業務において、他の職員に適切な助言が行えるよう常に専門性を高める³⁾と創設当時は述べられていたが、2011年以降は、3職種がそれぞれの専門性を活かしたチームアプローチによって業務を効果的に行う⁴⁾とチームアプローチが強調されるようになった。

全体の課題には、業務量過大、人材不足、力量不足²⁾があり、保健師の困難感としては、業務の偏りによって本来の保健師活動に支障がある⁵⁾、保健師1名配置が多く実践力が向上できない⁵⁾、求められる役割が認識しづらい⁶⁾、委託型包括であることでの活動のやりにくさ⁷⁾等が報告されている。また、包括所属保健師を対象とした研究活動を行う中で「他の保健師はどのような活動をしているのか」「保健師とは何だろう」⁸⁾「支援が解決につながらない葛藤」「在宅継続か施設入所の見極めへの迷い」「ケアマネジメントや権利擁護等業務は公衆衛生看護学の学問基盤だけでは太刀打ちできない」等の語り⁹⁾もある。包括所属保健師の実態は、保健師歴10年未満が5割を超し、多くは一人配置¹⁰⁾で、市町村単位の創設のため市町村を越えたつながりを持ちにくい。また委託型包括の保健師は行政保健師のようにキャリアラダーが示されておらず¹¹⁾、研修体制等人材育成の状況が異なる。これらから委託型包括の保健師は行政保健師と異なる環境にあることがわかった。

そこで、地域包括支援センター看護職のネットワークの構築を目指して、包括所属保健師らが集い横のつながりをもつこと、互いの状況を理解し合い、エンパワメントできることを第一段階の目的として交流会を企画し活動を開始した。

2. 活動方法

1) 参加者

地域包括支援センターに所属する保健師、看護師、その他活動の関係者

2) 活動運営

本学大学院看護学研究科教員の他、本学大学院看護学研究科 CNS コース修了者および大学院生が運営に携わった。また、地域包括支援センター実務者および地域包括支援センターについて研究している教育・研究者等学外者も運営や発表に携わった。本学大学院看護学研究科

CNS コース修了者および大学院生は活動報告にも貢献した。

3) 募集方法

主に近畿内の地域包括支援センター1,000 施設にチラシを郵送するとともに、本学看護実践研究センターホームページに日程を掲載した。また運営スタッフからも積極的に関係者に参加を呼びかけた。

4) 活動方法と内容

活動方法は、関連学会への参加とオンライン交流会であった。

活動内容は、毎回テーマを設定し、テーマに関連した活動報告、研究報告、グループワークを実施した。所要時間は 60～90 分であった。

3. 活動結果

1) 活動内容と参加者数

関連学会 1 回、zoom 交流会 3 回を実施した。時系列で内容・参加者数を示す。

| 日時 | 内容 | 参加者数 |
|---|---|------|
| 2022 年 6 月 18 日 10:00～11:00 zoom 交流会 | テーマ：居宅介護支援事業所との関係 活動報告「ケアマネジャーからみる、地域包括支援との連携」 グループワーク「他機関との連携」 | 9 名 |
| 2022 年 8 月 28 日 日本地域看護学会 第 25 回学術集会 | テーマ：つながろう！ 地域包括支援センター保健師職 コロナに負けない地域における工夫を通して 研究報告「地域包括支援センター保健師におけるコーピングと自己効力感の実態」 活動報告「包括駆け出し保健師の経験談 コロナ禍の工夫を通して」 グループワーク 「コロナ禍における課題と地域での工夫」 | 12 名 |
| 2022 年 11 月 19 日 10:00～11:00 zoom 交流会 | テーマ：コロナ禍のフレイル予防～介護予防の地域資源をつくるには 活動報告「コロナ禍の介護予防活動」 グループワーク 「コロナ禍の介護予防活動の工夫や課題」 | 60 名 |
| 2023 年 1 月 21 日 10:00～11:30 zoom 交流会 | テーマ：介護予防事業を個別支援から地域支援へ展開するための手法 研究報告「3 職種で介護予防事業を地域資源に育て、つなげる～地域づくりに対する 3 職種の認識から～地域支援へ展開するための手法」 活動報告「個別支援をヒントに地域支援活動に展開した事例」 グループワーク「介護予防事業を個別支援から地域支援へ展開するためにやっていること」 | 67 名 |

2) アンケート結果

アンケート回答協力者 104 名（述べ数）

(1) 参加者の概要

| 所属先 | 回答割合 (%) |
|---------------|----------|
| 直営型地域包括支援センター | 7 |
| 委託型地域包括支援センター | 84 |

| | |
|------|---|
| 教育機関 | 6 |
| その他 | 3 |

(2) 参加目的 (重複回答)

| 質問項目 | 回答割合 (%) |
|--------------------|----------|
| テーマに興味があった | 75 |
| 交流をもちたかった | 69 |
| 情報を得たかった | 43 |
| 過去に参加してまた参加したいと思った | 11 |

(3) 地域包括支援センターの保健師として働く上で感じていること (自由記載)

| 分類 | 記載内容 |
|---------|--|
| 保健師の専門性 | 保健師の専門性について自身でも説明に困る部分がある |
| | 包括保健師だからできることが確立できたら良いのと感じている |
| | 社会福祉士、主任 CM で業務の内容が違わず、専門性が見えない |
| | 医療について知識はあるが包括ではあまり役立たっていない |
| | 保健師の役割を発揮できていないなど日々感じている |
| | 保健師としての役割が明確ではなく、悩むことがある |
| | 保健師として何をすべきか、包括職員として何をすべきかがまだ模索中 |
| 専門外への対応 | 保健師として学んだこと以外 (CM 業務や権利擁護等) のことに関してわからずに手探りで対応しないといけないことが多い |
| | 権利擁護は分野ではないなどは思わずに包括全体の業務をまんべんなくできるようになることが必要だと思う |
| ジレンマ | 総合相談が複雑、多様化しており介護予防啓発までできない |
| | 内容が底なしのように思え、自分の力量のなさに嘆き、逃げ場もないことも承知の上、毎日を過ごしている |
| | 3 職種で事業を行う包括では、予防活動は保健師・看護師の仕事である認識が強く、包括全体でうまく動けない |
| | 予防ケアマネジメント業務、相談業務、要支援認定者への連絡、申請代行など業務が多忙で看護師本来の予防に関わる時間が少ない |
| | 日々のプラン業務に追われ、保健師としての介護予防教室等を落ち着いて考察する時間が持ちにくい |
| | 専門性を生かしていない業務が煩雑で、仕事へのモチベーションを維持する事が難しいと感じている |
| | 職種としての発展 |
| | 地域性が違えば介護予防活動の課題や工夫も変わるので、自分の圏域地域ではどのような活動がいいのか、効果があるのか、ということを探る |
| | 自治体の中でも 1 か所であり自身のスキルも上がらないと感じる |

| | |
|----------------------|--|
| | 保健師の視点からのアプローチについて事例検討会をしたい |
| | 法律や相談支援に特化した段階的な研修の必要性がある |
| 一人配置・包括経験の短さからの悩みや不安 | 所属に保健師が1人で、前任者とも接点がなく、手探り状態でしてきた |
| | 包括に保健師職が一人なので相談する人がいない |
| | 専門性をどう地域に活かしていくか、一人配置のためセンター内での相談は難しい |
| | 包括の保健師業務について、結果的に教えてもらう事もなく手探りの状況で経過している |
| | 包括看護師職が一人配置の場合、他地域の包括の保健師看護師の方たちの包括での取り組み内容や姿勢、モチベーションの持ち方はどうされているのかと感じている |
| 交流・相談の場へのニーズ | 包括保健師が支援についての相談を同じ目線で相談できる場があったらいいなあと思う |
| | 経験ある皆さんからの意見などを聞く勉強の場として参加したい |
| | 保健師が自分一人しかおらず、これでいいのか？と業務について不安があり、他の保健師はどんなことをしているのか興味がある |
| | 包括内の保健師職が1名のため、相談体制があると安心 |

(4) 参加の感想 (自由記載)

| 分類 | 記載内容 |
|-----------------|---|
| 地域での活動を知ることができた | 普段聞けない他市の活動がきけてとても楽しかった |
| | 様々な地域の取り組みのお話が聞けてよかった |
| | 他のいろんな取り組みを教えていただき参考にさせてもらいたい |
| | 非常に面白く興味深く各グループのまとめの発表も興味深かった |
| | 市町村規模や環境によって、取り組み方や行政との連携などに違いが大きいと感じた |
| 交流が持ててよかった | 他自治体保健師の方々と交流できる機会がないので参加してよかった |
| | 経験1年未満であり、交流の機会は貴重だった |
| | 保健師同士で話すことが少ないので、包括で働く保健師さんたちと話すことができ、みんな同じように悩んでいる、悩んで来たのだと感じた |
| | 同じ課題をお持ちの包括が多く、もう少し深く課題解決の意見交換をしたいと思った |
| | あっという間に時間が過ぎてしまったので今後意見交換の時間を増やしてもらえたらと思う |
| 今後の活動に役立つ | 一人職場のところも多いのでその人の人柄・キャリア・スキルに活用されると思っている |
| | このような交流会があることで、原点に帰ることができてよかった |
| | あたためている企画を通すための勉強の必要性を痛感した |
| | パワーポイントでの報告内容が勉強になった |
| | たくさんの情報が今後の予防支援の糧になればと思う 包括内で共有し当センターでの具体策を検討したいと思う |

(5) 今後取り上げてほしいテーマ

- ・ 地区診断
- ・ 認知症や精神疾患のある方への支援
- ・ 介護予防
- ・ 包括保健師看護師職の日々の悩み
- ・ 地域活動の具体的な取り組みについて
- ・ 地域とのつながり方や地域住民との協働について
- ・ 行政との連携

4. 活動の振り返りと今後の活動に向けて

1) 活動の振り返り

交流会の方法は、オンラインを用いたことで自宅あるいは職場から数人での参加など、参加の利便性はよかったが、土曜日開催であったため直営型は参加しにくかったと思われる。参加者数が11月以降急激に増えている要因は、郵送で各包括にチラシを配付したためであり、周知の効果であった。

交流会の成果は2点あったと考える。1つ目は、参加者は悩みを共有できる同職種や包括に理解がある人達との交流に喜びやつながりの大切さを感じていた。日々の活動には、社会福祉士や主任介護支援専門員らと協働が求められる。多職種協働における保健師等の特徴には、自分の専門性よりも協働性を優先して業務にあたる姿勢¹²⁾ ¹³⁾があり、専門性を発揮していてもその自覚やプライドが高められない¹²⁾と報告される。本交流会の参加は、同職種との交流によって保健師である自覚と認識が引き出された場であったと推測される。2つ目は、参加者は、各報告やグループで情報を得て、これまでの活動を振り返る機会となり、活動へのヒントや活力につなげていた。これらの成果は、一人配置や包括経験が短い保健師にとっては大きな体験であったと考える。交流会のわずかな時間での横断的な成果であるが、交流会で研究や実践報告を聞き、同職種や包括に理解や関心を持つ関係者とディスカッションすることによって、包括の現状が共有され、参加者の自己肯定感を高める糸口になったのではないかと考える。

課題は交流会が一時的なつながりで終わっていることである。参加者は包括保健師の役割や専門性に疑問やジレンマを抱えていた。Zoomではその場限りになりやすい傾向にあり、参加者がそれらの解決につながるきっかけとするには、つながりを継続し、ネットワーク化していくことが必要と考える。そのためには、本交流会を継続開催して、継続参加者や協力者を増やすことが求められる。

以上から、第一段階の交流会開催目的である、保健師等の横のつながりをもつこと、互いの状況を理解し合い、エンパワメントできるに関して、一時的ではあるが一定の成果はあったと考え、活動を継続していく必要性を確認できた。

2) 今後の活動に向けて

活動の振り返りから、交流会へのニーズと成果が確認できた。今後は、新規参加者の拡大と継続参加者を増やすことを目指して活動を継続していく。そのためには、周知の他、希望のテーマごとのグループ分けなど交流会の持ち方を検討していく必要がある。またネットワーク化していくためには、交流の場の運営だけでなく、活動が定着していくよう仕組みを検討していくことが求められる。さらには、交流会だけではなく、希望による個別のコンサルテーション機能も加えていきたい。

また、本学看護学研究科の学生および修了生の活動の幅を広げる場としても活動を継続していきたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省：地域包括支援センターについて。
<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000756893.pdf> (2022年9月9日)
- 2) 三菱 UFJ&コンサルティング：地域包括支援センターが行う包括的支援事業における効果的な運営に関する調査研究事業報告書, https://www.murc.jp/uploads/2018/04/koukai_180418_c5, 2018 (検索日：2021年4月29日)
- 3) 長寿社会開発センター：地域包括支援センター業務マニュアル. <https://iryo.kk-mic.jp/Information/file/ETC-191206.pdf>, 2007 (検索日：2022年9月21日)
- 4) 長寿社会開発センター：地域包括支援センター運営マニュアル.
<https://iryo.kk-mic.jp/Information/file/ETC-191206.pdf>, 2011 (検索日：2022年9月21日)
- 5) 川原瑞代, 杉田加代子, 児玉智恵子, 小野美奈子, : 地域包括支援センターの機能強化に関わる保健師の活動実態と課題. 宮崎県立看護大学看護研究・研修センター事業年報, 3 : 33-42, 2014.
- 6) 若杉里実：新任保健師1年目の体験—保健センターと地域包括支援センター保健師の比較—. 岐阜看護研究会誌, 4 : 13-19, 2012.
- 7) 富田恵, 大沼由香, 小池妙子, 工藤雄行, 寺田富二子, 中村直樹：委託型の地域包括支援センター保健師のネットワーク構築に関する認識. 弘前医療福祉大学紀要, 6(1) : 91-98, 2015.
- 8) 岡野明美, 古賀佳代子, 曾我智子, 小林奈緒子：地域包括支援センター保健師の役割と葛藤. 第6回日本公衆衛生看護学会学術集会抄録 : 92, 2018.
- 9) 岡野明美, 古賀佳代子, 曾我智子, 小林奈緒子, 保母恵, 永井潤子：地域包括支援センター保健師の役割～他組織との連携から～. 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会抄録 : 97, 2020.
- 10) 日本看護協会：地域包括支援センター及び市区町村主管部門における保健師活動実態調査報告書. <https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/senkuteki/2014/25-chiikisien> (2014). (2022年4月30日).
- 11) 田中裕子, 工藤禎子：地域包括支援センターの保健師の人材育成に関する研究・報告の動向. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 28 : 21-30, 2021.
- 12) 小山道子：地域包括支援センター看護職の社会福祉士、主任介護支援専門員との職種間協働のプロセス. 日本地域看護学会誌, 19(3) : 60-69, 2016.
- 13) 大沼由香, 小池妙子, 富田恵, 工藤雄行, 中村直樹, 寺田富二子：地域包括支援センターのネットワーク構築に関する課題— 運営主体別三職種の認識の比較 —. 弘前医療福祉大学紀要, 8 (1) : 47-57, 2017.

同期型オンライン形式による 集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座

北村愛子 佐竹陽子 井上奈々

1. 活動目的

昨今のクリティカルケア領域は、急性疾患による重症患者だけでなく、感染症や一般病棟からの重症患者を対象とすることも多く、臨床看護師は様々な倫理的課題に直面する。倫理的課題について、高い倫理観のもと包括的に捉え解決に導くことは看護の重要な役割であり、臨床看護師への十分な教育が必要である。

今回は、クリティカルケア領域における倫理的課題と看護実践について、臨床看護師参加型のオンライン講座を企画した。終末期ケアや家族ケアなど、これまでの活動実績から得た参加者のニーズをもとに講座の内容を充実させ、昨今のより複雑化したクリティカルケア領域の倫理的課題に対応できる看護実践能力をもつ看護師育成に貢献することを活動目的とした。

2. プロジェクト活動概要

1) 対象者

集中治療専門医研修施設 150 床以上の
内科系 外科系 DPC 対象病院（西日本）
に案内（右）を送付し、クリティカル
ケア部門および病棟部門で重症患者の
看護実践にかかわる看護師経験 3 年以上
の看護師を募集した（各コース 100 名）。

2) 講座形式

同期型オンライン 参加型

3) 講師

北村愛子 佐竹陽子 井上奈々
急性・重症患者看護専門看護師
(CCNS 16 名)

4) 資料

本学教員が作成したテキスト
(全 45 ページ) を事前に送付し、当日の
学習教材として使用した。



第5回 クリティカルケア看護実践講座 ～集中治療に携わる看護師のための クリティカルケア看護実践講座～

第1回 9月24日(土)

9:30～11:45 (9:15～受付開始)

**A:クリティカルケア領域における
倫理的課題と看護実践**

- ・ベットのサイドにおける看護倫理
- ・倫理的課題とチームカンファレンス
- ・意思決定支援と終末期ケア
- ・事例検討

「集中治療期から終末期に移行する
患者・家族への倫理的配慮」

大阪公立大学大学院
看護学研究科 急性看護学分野
北村愛子 佐竹陽子 井上奈々

第2回 10月2日(日)

9:30～11:45 (9:15～受付開始)

**B:集中治療を受ける
患者・家族への精神的支援**

- ・トータルペインとコンフォートケア
- ・急性疾患を呈する患者の家族へのかわり
- ・事例検討

「生命危機状態で集中治療室に
入室した患者の家族へのかわり」

大阪公立大学大学院
看護学研究科 急性看護学分野
北村愛子 佐竹陽子 井上奈々

| 参加費 | 申込締切 | 1回参加・2回参加 同料金 |
|-----|----------|---------------|
| | 8/21 (日) | 1,000円 |

*1回のみ参加の方も、2回参加の方も一律1,000円

定 員: 各コース100名(先着) *定員になり次第終了いたします。

場 所: Zoomオンライン

対 象: 看護師経験3年以上

申込URL: <https://forms.office.com/r/ndjntJPtkq> 申込QRコード→ 

振込口座 *申込後、1週間以内にお振込み下さい

銀行名:三井住友銀行(009) 支店名:大阪公務部 (045)

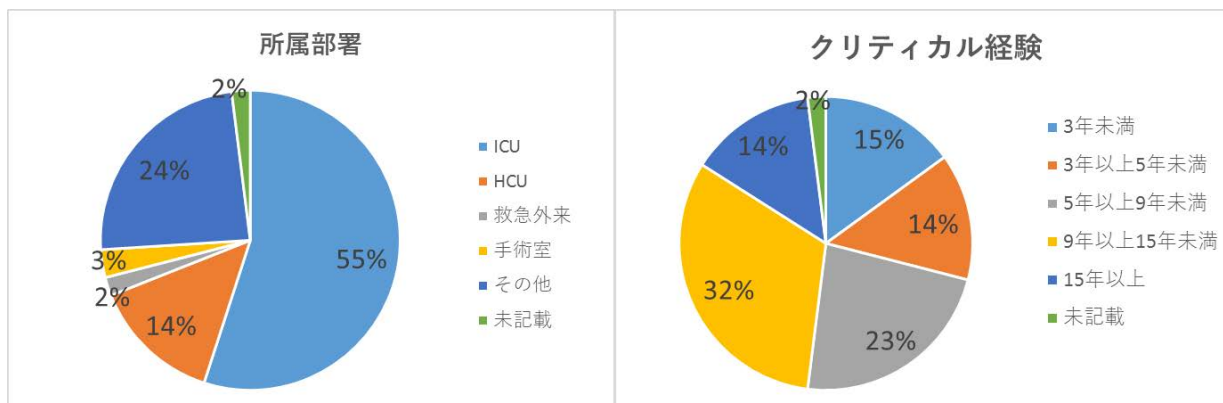
預金種別:普通 口座番号:213920 口座名義人:公立大学法人大阪

*講座の案内につきましては、登録いただきましたメールアドレスにご連絡いたしますので、下記メールアドレスの受信設定をお願いいたします。
*本講座は、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センターの活動助成を受けています。

お問い合わせ
大阪公立大学大学院 看護学研究科 療養支援看護学分野 急性看護学
クリティカルケア看護実践講座 事務局 Email: gr-nurs-ccn@omu.ac.jp

第5回クリティカルケア看護実践講座 案内

5) 活動内容



参加者の概要

(1) 第1回 2022年9月24日(土) 9:30~11:45

「クリティカルケア領域における倫理的課題と看護実践」

| 時間 | 内容 | 講師 |
|-------------|---|----------------------------|
| 9:30~10:30 | 第1部 ベッドサイドにおける看護倫理 ～チームカンファレンスと終末期ケア～ | 北村愛子 |
| 10:40~11:45 | 第2部 事例検討 集中治療期から終末期に移行する 患者・家族への倫理的配慮 | 佐竹陽子 CCNS (ファシリテーター) |

<参加者>

参加人数：88名（申し込み100名）

<内容>

○第1部 ベッドサイドにおける看護倫理～チームカンファレンスと終末期ケア～

「ベッドサイドにおける看護倫理」では、患者の人権や倫理的課題に対する関心をもつことから始め、倫理原則と看護実践について解説した。「倫理的課題とチームカンファレンス」では、倫理カンファレンスにおける課題の明確化、看護師の役割について解説した。「意思決定支援と終末期ケア」では、終末期の意思決定のプロセスと看護実践について、チーム医療の観点からも解説した。

○第2部 事例検討 集中治療期から終末期に移行する患者・家族への倫理的配慮

作成した仮想事例（手術後、状態悪化により集中治療期から終末期に移行した患者）をもとにグループワークを行った。急性・重症患者看護専門看護師のファシリテートのもと「終末期の意思決定支援のために、倫理カンファレンスを開催する」をテーマに討議した。討議は、患者とその家族の思いを捉えること、思いを引き出すために必

要なコミュニケーションを考えること、さらに患者とその家族に対する具体的な意思決定支援を検討することと段階的に進め、グループごとの討議の後、全体での共有を行った。

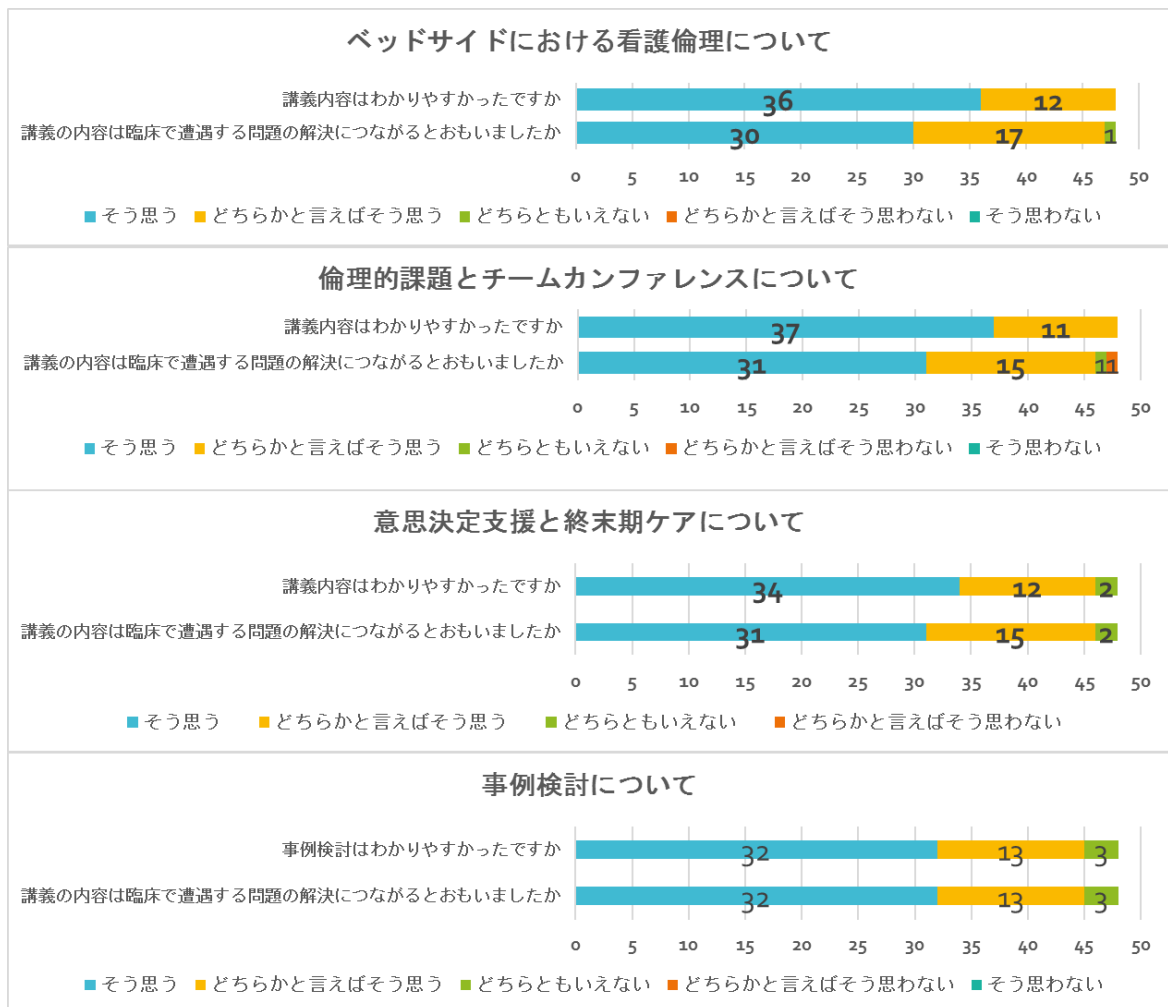
<アンケート結果> 回答数：48名

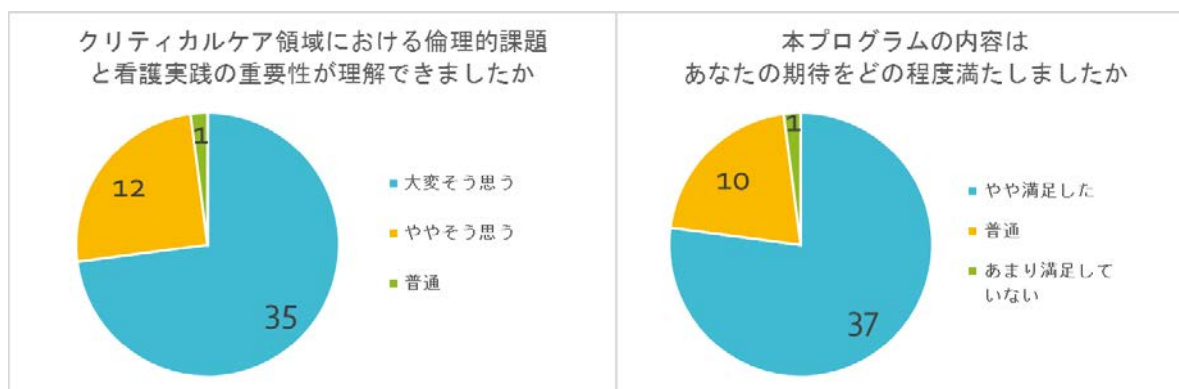
“ご講義をきいて、患者様の倫理をたくさん語れる職場を作っていきたいと思っています。”

“現在現場で倫理カンファレンスの進め方に困っていたので、今回の講義内容をもとにポイントをしぼり、実施していこうと思いました。事例検討ではたくさんの意見を聞いて参考になりました。”

“現場で倫理委員として関わっているが、意思決定支援内容、話すべきポイントなどファシリテーターとして勉強したり、能力を磨く術を学ぶ場が少ないため、病院の垣根を越えてこうした研修に参加できてよかったです。”

(アンケート自由記載 一部抜粋)





第1回「クリティカルケア領域における倫理的課題と看護実践」 アンケート集計結果

(2) 第2回 2022年10月2日(日) 9:30~11:45

「集中治療を受ける患者・家族への精神的支援」

| 時間 | 内容 | 講師 |
|-------------|--|----------------------------|
| 9:30~9:50 | 第1部 トータルペインとコンフォートケア | 北村愛子 |
| 9:50~10:30 | 第2部 急性疾患を呈する患者の家族へのかかわり | 井上奈々 |
| 10:40~11:45 | 第3部 事例検討 生命危機状態で集中治療室に入室した 患者の家族へのかかわり | 佐竹陽子 CCNS (ファシリテーター) |

<参加者>

参加人数：87人(申し込み93人)

<内容>

○第1部 トータルペインとコンフォートケア

トータルペインの考え方をクリティカルケア領域の特徴をふまえながら解説した。さらに身体的苦痛、精神的苦痛・社会的苦痛・スピリチュアルペインそれぞれの苦痛のアセスメントと看護の必要性の診断、看護介入についても具体的に解説した。

集中治療とコンフォートケアでは、関連する理論についても概説しながら苦痛を緩和するためのケアについて解説した。

○第2部 急性疾患を呈する患者の家族へのかかわり

クリティカルケア領域における家族の捉え方と看護の必要性について解説した。またクリティカルケア領域での家族システムの特性について具体例を示しながら説明し、家族をシステムとして捉える重要性を解説した。家族へのかかわりの実際では、家族危

機モデルや家族ニーズのアセスメントツールをどのように活用し看護介入につなげるかを解説した。

さらに、家族に対する理解を深め、看護介入する際に必要なコミュニケーションについても具体的な技法を解説した。

○第3部 事例検討 集中治療期から終末期に移行する患者・家族への倫理的配慮

作成した仮想事例（生命危機状態で救急搬送され、集中治療室に入室した患者）をもとにグループワークを行った。討議は、急性・重症患者看護専門看護師のファシリテートのもと、受け持ち看護師として、家族に焦点をあて、家族のニーズをアセスメントすること、また家族に対して具体的にどのようなかわりが必要かを検討することと段階的に進め、グループごとの討議の後、全体での共有を行った。

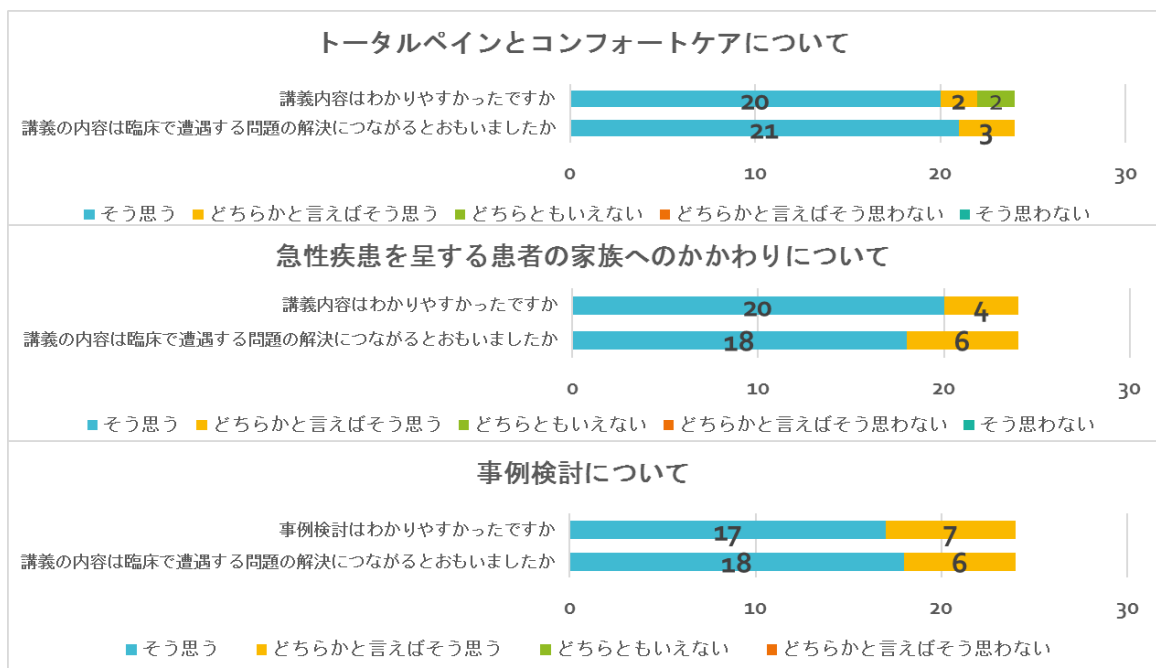
<アンケート結果> 回答数：24名

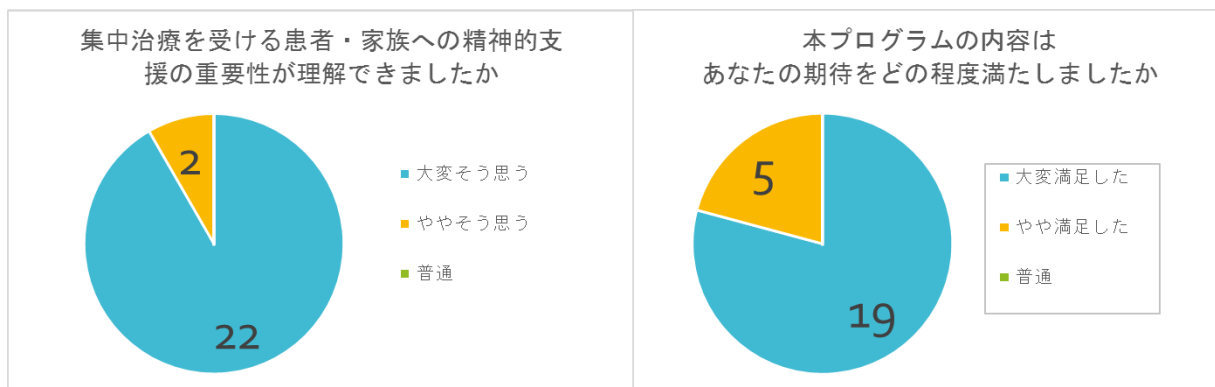
“アセスメントモデルを用いて、不足している情報やニーズを丁寧に確認していくことが、よりよい家族ケアに欠かせないということが再確認出来て良かった。”

“普段行なっているカンファレンスやケアですが、いざ言語化するとすごく難しく感じたり、そのケア、関わりが本当に良かったのか考えることがあります。今回の講座を通じてその情報の整理の仕方や言語化のためのツール、考え方を知ることができ大変勉強になりました。”

“講義を聞いて、普段スタッフが行っている家族ケアだなと思い返すことができ、スタッフが意味づけできるように、フィードバックしていきたいと思いました。”

(アンケート自由記載 一部抜粋)





第2回「集中治療を受ける患者・家族への精神的支援」 アンケート集計結果

3. 総括

クリティカルケア領域では、急性疾患による重症患者だけでなく、一般病棟からの重症患者を対象とすることも多く、臨床看護師は、ベッドサイドで様々な倫理的課題に直面する。クリティカルケア領域に特徴的な倫理的課題に関心を持ち、高い倫理観と倫理原則のもと解決に導くことの重要性とその看護実践について解説したことは、参加者の学習ニーズにも合致しており、臨床現場での取り組みの一助となったと考えられる。

また、クリティカルケア領域の重症患者は、その重症度や緊急性から患者本人とコミュニケーションをとることが困難な状況も多い。本講座で、患者のトータルペインに対する理解を深め、苦痛緩和のためのケアについて解説したことは、臨床で遭遇する問題の解決につながるという意見が多くあったことから、臨床看護師が重症患者へのケアの在り方を検討する際の有益な内容であったと評価できる。クリティカルケア領域の家族ケアは、患者の生命の危機により家族が心理的危機状況にあることから、看護実践には困難が伴うとされる。本講座で、家族の捉え方の具体的方策や、コミュニケーション技法にも触れながら家族へのかかわりを解説したことは、これまでの家族ケアの振り返りを促し、実践しているケアの意味づけを通してさらなる看護実践能力の向上に働きかけることができたと思う。

各回の事例検討では、仮想事例をもとに、「カンファレンスを開催する」「受け持ち看護師としてケアを考える」という臨床での看護実践に適応させながらグループワークを行うこととした。面識のない参加者同士でのオンラインで行うディスカッションではあったが、急性・重症患者看護専門看護師のファシリテートを活用することで、各グループで活発な意見交換ができた。参加者からも“たくさんの意見がきけてよかった”という感想が多く、ディスカッションを通して参加者の交流を図ることも、本講座の重要な役割であることを再確認した。

今回は、救急・ICU・HCUだけでなく病棟からの参加者も多かった。今後は、PCPSなど高度侵襲を伴う集中治療期のほか、病棟で周術期にある患者にかかわる看護師にも、より倫理的課題に関心をよせてもらえるように進めていきたいと考えている。

活動後記

今年で5回目となるクリティカルケア看護実践講座ですが、講座を通してクリティカルケアに携わる看護師の皆さまの明日からの臨床実践に活用できる基礎的な知識と看護の技術を提供することができたと考えております。コロナ禍で日々、患者様やそのご家族へのケアに尽力されながら、本講座にご参加いただきましたことに心より感謝申し上げます。参加者の皆様を通じて、患者様とご家族によりよいクリティカルケア看護を届けることができますよう、今後も活動を続けていきたいと思っております。(北村愛子、佐竹陽子、井上奈々)

がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した 看護師養成コース (がん看護インテンシブコース)

林田裕美 田中京子 徳岡良恵

1. 背景

がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース（以下、がん看護インテンシブコース）は、2017年～2021年度に大阪府立大学大学院看護学研究科が取り組んできた7大学連携個別化がん医療実践者養成プランの継続事業の一つである。7大学連携個別化がん医療実践者養成プランは、文部科学省の大学教育再生戦略推進費 多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プランで採択されたプロジェクトであり、近畿圏の国公立大学の医学・看護学・薬学・理工学系の大学院研究科が相互連携し、多様化する新ニーズに対応した個別化医療を実践できるがん専門医療人を養成することを目的としたものである。看護学研究科では、ゲノム医療や様々なライフステージにあるがん患者に生じる課題に対応できるよう専門看護師養成コースにおいて地域のがん患者および家族に携わる看護師の養成も手掛け、カリキュラムの充実を図っている。2021年度に7大学連携個別化がん医療実践者養成プランは終了したが、がんの臨床現場において、近年、がん患者の抱える課題に関して、地域の看護師に対する教育の継続が必要と考えられた。そのため、2022年度からは、看護実践研究センターの看護生涯学習支援部門の活動として実施している。

2. がん看護インテンシブコースの目的

がん看護インテンシブコースは、がん看護に携わる看護職者が、様々なライフステージにあるがん患者の抱える課題（遺伝性がん、認知症を持つ高齢がん患者の支援）について理解し、がん患者が抱える課題を克服できるような支援を考案し、実践できるようになることを目指している。

3. 活動内容

1) 広報活動：

2022年6月初め チラシをがん診療連携拠点病院（180施設）や訪問看護ステーション（119施設）など計319施設に配布した。

6月10～20日 申込受付（定員を超えたため、〆切期日を待たず受付終了）

- ### 2) 対象者：
- がん看護に携わる看護職者、看護系大学院生で、2日とも受講可能な者
参加予定者は63名であったが、当日までに1名の参加辞退があった。
参加者は延べ112名（9/1：55名、9/2：57名、両日：54名）だった。

3) 方法

Zoom によるオンライン
開催

大阪公立大学大学院看護学研究科「近畿「がんプロ」コンソーシアム」
(「7大学個別化がん医療実践者養成プラン」継承事業)

がん患者のライフステージにおける 課題対応を志向した看護師養成コース 2022 (がん看護インテンシブコース)

様々なライフステージにあるがん患者の抱える課題について理解し、がん患者が課題を克服できるような支援を考察できるようにすることを目的としたコース（全2回）です。講義とディスカッションを組み合わせで行います。

対象 がん看護経験のある看護師・
看護系大学院生

- 2回とも受講できる方
- アンケート回答にご協力いただける方

定員 30名程度

WEB開催
参加費無料

| 第1回 | 第2回 |
|---|--|
| 9/1 (木) | 9/2 (金) |
| 14:00~16:30 | 14:00~16:30 |
| 「遺伝性腫瘍を有する患者と家族についての支援」 | 「認知症のある高齢がん患者への支援」 |
| 講師 細田 志衣 先生 (聖路加国際病院看護部がん看護専門看護師) | 講師 宇野 さつき 先生 (ファミリー・ホスピス株式会社 ファミリー・ホスピス神戸魚水/ウオーム長 がん看護専門看護師) |

全講義終了後～9.10 (土)
「インテンシブコースでの学び」について ミニレポート提出
※レポート用紙は後日ダウンロード方法をご案内いたします。

申込み方法 申込締切▶2022年7月10日 (金) ※定員に限り次第となります

下記URL (またはQRコード) にアクセスし、専用申込フォームに必要事項をご入力の上、お申し込みください。
<https://forms.gle/7G71UsTsENgmSNH9A>

※お申し込みいただく際、申込フォームに記載されている注意事項をよくお読みください。本コースを過去に受講された方は応募人数によってはご遠慮いただく場合がございますので、予めご了承ください。
※tokuokay@omu.ac.jp からのメールが受信できるよう、設定をお願いいたします。
※お申し込みいただいた個人情報は、近畿がんコンソーシアム関連のみに使用させていただきます。

- 同一アドレスで複数名のお申込みは出来ませんので、各自で参加申込みをお願いいたします。
- 受講の可否および当日の参加方法については別途ご連絡いたします。

お問い合わせ
大阪公立大学がん看護インテンシブコース事務局 583-8555 大阪府羽曳野市はびき 7-30 e-mail: tokuokay@omu.ac.jp

資料 配布したチラシ

4) 開催日時と内容

(1) 講義・グループワーク

● 「遺伝性腫瘍を有する患者と家族への支援」

日時：2022年9月1日(木) 14時～16時30分

講師：細田志衣 先生

(聖路加国際病院 看護部 がん看護専門看護師)

内容：遺伝子変異とその情報の特性、ゲノム医療で活用される遺伝子検査、遺伝性腫瘍の特徴や種類、看護の役割などについて講義があった。中でも乳がん卵巣がん症候群 (Hereditary Breast Ovarian Cancer: HBOC、以下 HBOC) の事例を取り上げ、受講者が患者と家族の看護支援について理解を深め、知識を活用できるようグループワークでディスカッションを行った。また、遺伝性腫瘍は患者だけの問題ではないことから、家族支援やサーベイランスの必要性などについても講義さ

れた。

● 「認知症のある高齢がん患者への支援」

日時：2022年9月2日（金）14時～16時30分

講師：宇野さつき 先生

（ファミリー・ホスピス株式会社 ファミリー・ホスピス神戸垂水
ホーム長 がん看護専門看護師）

内容：認知症やそのタイプ、症状、認知症ケア、認知症のあるがん患者の課題と対応、看護師の役割について講義があった。認知症患者とのコミュニケーション方法として、ユマニチュードやバリデーションの技法についてなどが説明された。アイコンタクトやスキンシップの必要性、傾聴、繰り返し、開かれた質問などをグループで行い、ディスカッションを行った。

（2）事後レポート提出

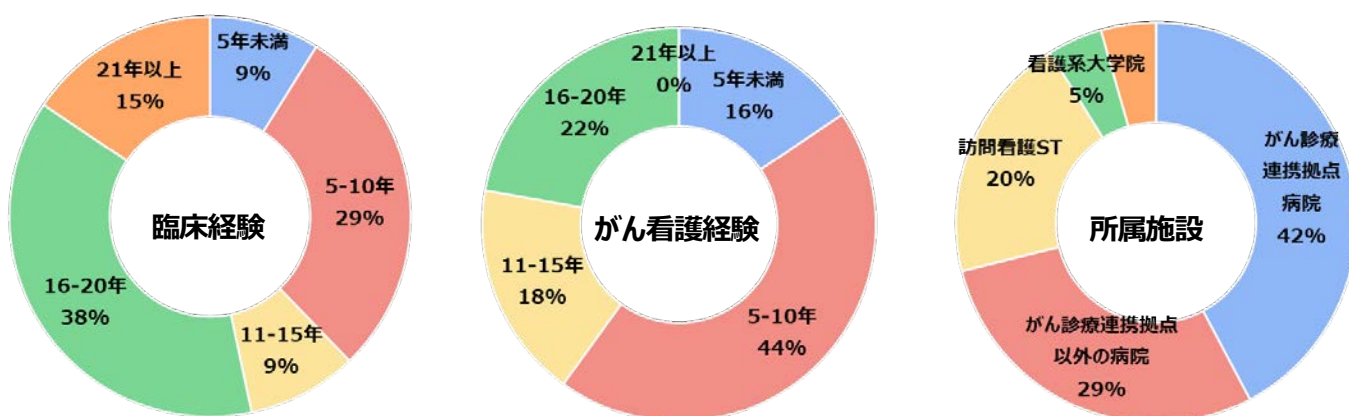
「遺伝性腫瘍を有する患者と家族への支援」「認知症のある高齢がん患者への支援」の講義・グループワーク終了後、学びについてそれぞれ記載し、コース終了後に提出してもらった。

事後レポートを提出した者は53名だった。

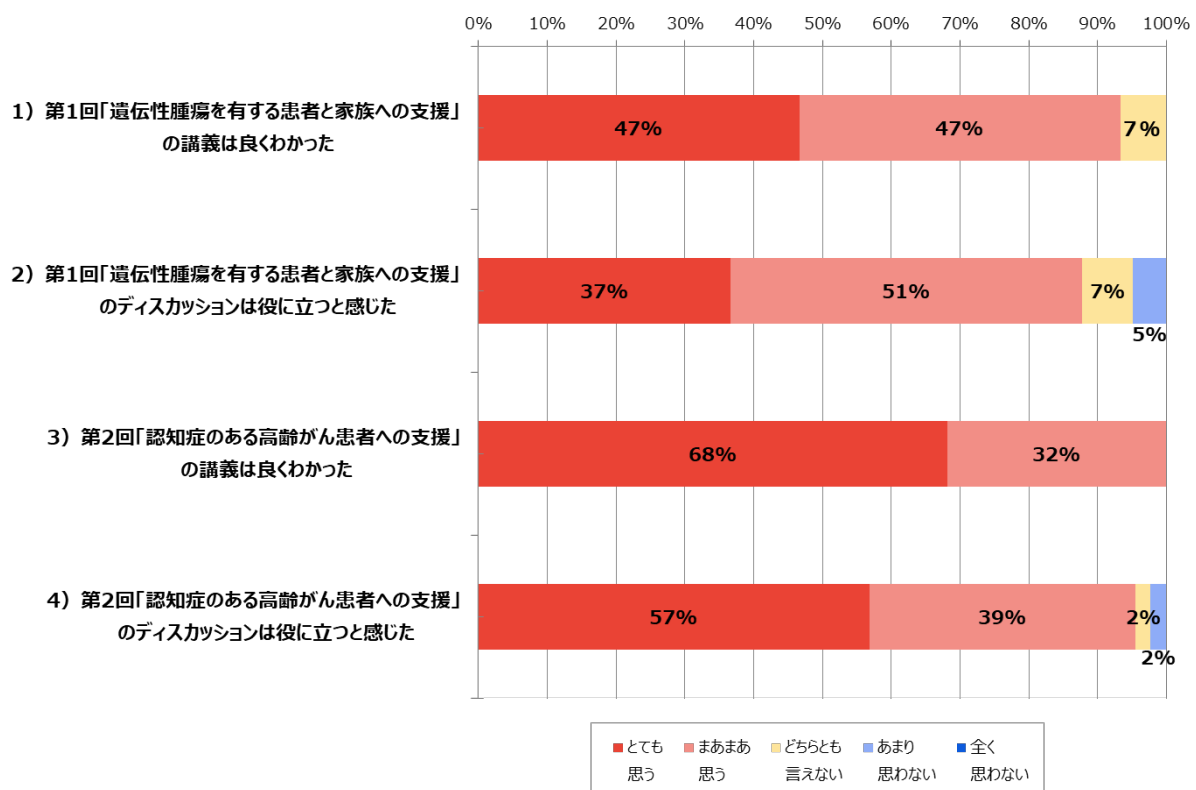
4. アンケート結果

1) 事後アンケート：9月2日のコース終了後～9月14日までの期間に参加者背景、講義の理解度やディスカッションの有益性、学び、運営についてなどのWebアンケートを実施した。45名から回答があった（回答率79%）。

（1）参加者背景（臨床経験・がん看護経験・所属施設）



(2) がん看護インテンシブコースの講義・ディスカッションについて
(個人ワーク・グループワーク含む)



(3) コース全体を通して学んだこと、今後の実践に活用できること (抜粋)

<コース全体について>

・がん看護でも様々な分野があり、知識を深めることができた。それぞれの癌の特徴や患者さんの年齢、ライフステージ、併せ持っている疾患などを考えて、コミュニケーションを取りながら、看護をしていきたいです。

・今回の内容は専門的かつ現場で実際に活躍されている先生方から患者さんへの熱い思いと多くの経験からなる実践的な看護について学ぶ事が出来ました 遺伝性腫瘍については該当患者が少なくかつ専門性が高くすぐに実践する事は難しいと思いますが患者の持つ特性や様々な悩みがあることを理解できたので乳癌の患者さんへの対応の際に役立てたいと思います。また認知症患者の多くは家族を含めてのケアが必要であり積極的に信頼関係の構築を図り患者さんがその人らしく病気と共に生活出来るような環境作りや看護を提供出来るよう関わりたいと思います。

・研修の機会をいただき、ありがとうございました。研修内容が盛りだくさんで、多くの学びを得ることができました。また、日々の看護で実践していることの根拠づけができたように思います。今回の研修の学びを実践に活かしていきたいと思います。

・難しい言葉もありましたが、知っていることはさらにそれを深められましたし、触れることはあっても詳しくわからなかったことも今回色々教えていただき、あの患者さんはこうだったのかなど考え直すきっかけとなり、大変多くの学びを得ることが出来たと実感しています。今後は、患者さんと接する際に今までより少し視野を広げて関わるようにしてみること、そして患者さんの情報を得る際にも今回の講義で学んだことを意識したいと思います。

・がん看護を行なっていく中で患者や家族が持つ不安や葛藤などを理解し、ニーズを知った上で看護師として必要な専門分野に繋げたり、意思決定の支援を行うことの大切さを学んだ

・・・など

〈各講義について:遺伝性腫瘍を有する患者と家族の看護〉

・遺伝性腫瘍の患者、家族への支援についてのイメージが出来ました。様々なライフステージでの患者の思いを踏まえて、正しい知識を持って情報提供や意思決定支援をしていく事が大切だと学びました。

・遺伝性腫瘍を持つ癌患者さんの場合では、比較的若い患者さんが多く、子育て中の患者さんもおられ、ご本人に対する心身のケアと共に、血縁関係にあるご家族さんへのケアも大切であり、患者さん家族さんの思いをしっかりと傾聴し、受け入れに時間を要する事も多々ある事を理解した上で関わっていこうと思いました。

・遺伝子検査が進む中、遺伝性腫瘍について知識不足を感じていたため勉強になりました。1人の遺伝学的検査の結果が家系員へ及ぼすなどの影響を踏まえ、支援を行う必要があることが大切である、また、最新の情報について学んでいく必要性を実感できました。

・遺伝性腫瘍の患者さんと関わることがなく、今回講義で新しく学んだことが多かったです。難しい問題で、関わりかた、自分ならどう受け止めるか、家族にどう伝えるかな?と深く考えてしまう内容でした。自分の子供も遺伝してるかもと考えると不安でたまらないと思う。しかし、今後のことは医療者の関わりで大きく変わるということを聞き、もっともっと私たちの言葉1つ1つ考えて発言する必要があり寄り添い傾聴しようと思いました。

・・・など

〈各講義について:認知症のある高齢がん患者の看護〉

・認知症のある患者さんは、普段から関わる事が多く、気をつけてはいましたが、講義を受けコミュニケーションの取り方で反省する事があり、基本的な事ですが、視界に入ってから声をかける、声のトーンや表情にも今以上に注意して患者さんと接したいと思います。

・認知症患者との関わりも、相手の視界に入り声をかけ、ポジティブな発言を大切に、患者だけでなく家族への安心、信頼が今後に影響するということ、橋渡しができる存在になれば。と強く感じました。今は、放射線治療にて関わっていますが、今月末移動があり、入退院支援をしていくことになりました。在宅へ繋げていくなかで、認知症の患者さんでも、病院内での患者さんの意思などを提供できる環境作りもできたらと考えます。

・認知症のある高齢がん患者への支援については認知症の特徴やケア、課題、関わり方など学びました。実際に病棟でもがんを患っている認知症患者さんがおられるので、患者さんの思いを橋渡しできるような関わりを持って看護していきたいと思います。

・認知症のある高齢がん患者の支援については、勤務する病棟でも、多くの患者と関わることが多く、関わり方に難しさを感じる事が多くありました。時間がなく、余裕がないためうまく患者とコミュニケーションをとれず、ジレンマを感じていましたが、今回の講義で取り上げられていたユマニチュードは、自分が工夫してうまく関わる事ができていた場面で、使用していたことだなと思いました。症状に囚われがちですが、患者がどうなれば幸せかを考えて関わりたいなと思いました。

・認知症で癌になったとしても、その人がハッピーで過ごせるように、支援できることを探していきたい。今までは、主観的なことにとらわれていて、痛みの評価がきちんと出来ない事に悩んでいたが、客観的な表情や睡眠状態や、仕草とかでも評価出来ることに気づけた。また、視線をつかみにいき、つかみ続けることで新たな事が気づけるのではないかと思う。明日から、実践してみます。

・患者さんが何気なくしている行動でも一つ一つ意味があること、理由についてを考えながら対応していく必要性を学ぶことができた。自分のペースではなく、相手のペースで対応する、目線を合わせて対応できるようにしていく。

・・・など

(4) 講義・ディスカッション、時間配分など

<講義・ディスカッションについて>

- ・大変興味深く、今後にも活かせる内容でした。ありがとうございました。
- ・それぞれ違う立場からの体験や悩みなどを聞く機会となり、気づきも多かった。
- ・ディスカッションですが、どう進めていけばよいのかが難しかったです。話す人が偏りがちになってしまいました。2日目は意識して少し慣れたこともあり、1日目に一言も話せなかった方の意見も聞けたのでよかったかなと思います。
- ・ディスカッションは自分が普段接していない疾患のこともあり、またいろいろな部門の方がいたので難しい面もあったが、いろいろな意見が聞けたので新鮮ではあった。
- ・病棟や訪問看護、外来や関わっている領域が全然違った方々と様々な臨床現場での話し合いができて話題が充実していました。興味がある話ばかりだったので、それぞれの特徴に合わせた看護について深めた話もできたらと思いました。
- ・オンラインディスカッションは発言のタイミングが難しかったです。スマホでの参加でしたので、お顔が見えるのがお一人だけで、グループ全体が見えず、不馴れでもあり、余計に難しく感じました。

・・・など

<時間配分について>

- ・ちょうど良かった
- ・ディスカッションの時間が短く、全員の意見を聞くことができなかった。
- ・初めての zoom 研修だったため、いつ話していいのかわからず、ディスカッション出来るまでに時間がかかり、話し合う時間が足りなかった。もう少しグループワークする時間が欲しかった。
- ・講義時間配分は特に問題なかったと思います。ディスカッションは少し時間が短いと思った時もありましたが、全体の講義時間も考えるとあまり長くもできないので、時間配分は良かったのではないかと思います。

・・・など

2) 半年後アンケート：どのように本インテンシブコースでの学びを活用できているかについて、2023年3月頃、アンケートを行う予定である。

5. 今後の課題

事後アンケートの結果、内容は興味のあるものであり、グループワークでのディスカッションでは、様々な意見を聴くことができ勉強になったとの意見が多かったことから、講義とグループワークは継続する。グループワークの時間が短いという意見があるため、時間配分を講師と共に検討したい。Zoomによる研修であったため、参加しやすい面もあったが、PCトラブルで参加できなかったり、ディスカッションに参加しにくかったと回答した者もいたことから、次年度以降は対面形式での開催を検討する。

家族への看護を考える会：家族看護オンラインフォーラム

井上敦子 中山美由紀

1. 活動目的

今日の家族は縮小化し、家族機能を担える成員は量的・質的にも限られている状況にある。病を抱える人とともに生活する家族に求められる役割や期待は複雑化しており、療養者を含めた家族全体を看護の対象として支援していく必要性は高まっている。

さらに、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大により、病院や施設では面会制限が行われ、家族が療養者の状態を理解しにくいなかで意思決定を迫られたり、直接会うことのできないまま看取りを迎えるなど、新たな課題に直面することとなった。看護職者には、限られた家族とのかかわりの機会を逃さず、療養者を含めた家族の状況を理解し、支援することが求められる。家族への看護を考える会では、臨床における家族看護実践を支えるために、2010年度から継続して家族看護フォーラム・家族看護講座を開催している。2020年度からは、オンラインを活用した家族看護フォーラムを開催しており、本年度の活動について以下に報告する。

2. 活動内容

1) 参加者

家族看護に興味のある臨床看護師

2) 募集方法

大阪府下の128施設にチラシを配布するとともに、家族看護分野ホームページ、本学看護実践研究センターホームページにチラシを掲載し参加を呼びかけた。

3) 開催方法

Zoom を活用したオンライン

4) 活動内容

「家族とのかかわりの場面から支援の在り方を考える」をテーマに、第1部は、家族支援専門看護師の実践報告を通じた講義を行った。第2部は、「家族支援看護師を交えての情報共有」としてグループワークを実施した(表1)。

オンラインフォーラムの評価として、申込時に個人特性および参加の動機等の入力を依頼した。オンラインフォーラム終了後には、参加者にオンラインフォーラムの内容に関する評価および感想の入力を依頼した。

主催 大阪公立大学大学院看護学研究科 看護実践研究センター 家族への看護を考える会

参加費 無料

11月12日(土) 13:00~15:00

(Zoom同期型) オンラインフォーラム

対象：臨床看護師 50名(定員になり次第締切り)

第1部

『家族看護の基本姿勢』
家族支援専門看護師 山内 文(大阪母子医療センター)

『実践報告:ICUにおける実践』
家族支援専門看護師 永野 晶子(大阪労災病院)

『実践報告:一般病棟における実践』
家族支援専門看護師 山口 望(市立豊中病院)

『実践報告:入退院支援部門から』
家族支援専門看護師 藤原 真弓(堺市立総合医療センター)

第2部 グループワーク

『家族支援専門看護師を交えての情報共有』
ファシリテーター: 藤原真弓 山内文 永野晶子 山口望
中山美由紀(大阪公立大学大学院看護学研究科家族看護学分野)
井上敦子(大阪公立大学大学院看護学研究科家族看護学分野)
※第1部・第2部を通してご参加ください

大阪公立大学大学院看護学研究科家族看護学Webサイト
またはQRコードよりお申込みください。

URL:<http://www.omu.ac.jp/nurs/kazokukango/>

申込締切:10月31日(月)

お問い合わせ先 大阪公立大学大学院看護学研究科 家族への看護を考える会 中山 美由紀
〒583-8555 堺東野市ひびきの3-7-30 TEL:072-950-2819 E-mail:or-nurs-family@omu.ac.jp

表1. 家族看護オンラインフォーラムの具体的な内容

| | |
|--|--|
| テーマ: 家族看護オンラインフォーラム ～家族とのかかわりの場面から支援の在り方を考える～ | |
| 第1部: 講義 | |
| 講義内容 | 講師 (家族支援専門看護師) |
| 『家族看護の基本姿勢』 ・ 家族を理解する視点 ・ 一部の家族にしか出会えない看護師にできること | 山内 文 (大阪母子医療センター) |
| 『実践報告: ICUにおける実践』 ・ ICUにおける家族の特徴 ・ ICUでの家族ケアの課題 ・ ICUにおける家族ケア | 永野 晶子 (大阪労災病院) |
| 『実践報告: 一般病棟における実践』 ・ 一般病棟における家族支援の特徴 ・ 事例から意思決定支援について考える | 山口 望 (市立豊中病院) |
| 『実践報告: 入退院支援部門から』 ・ 短期間のかかわりで家族内に変容をもたらす ・ 15分以内でできる家族インタビュー | 藤原 真弓 (堺市立総合医療センター) |
| 第2部: グループワーク | ファシリテーター |
| 『家族支援看護師を交えての情報共有』 ・ 第1部を参考に、自身の家族看護実践を振り返る ・ 自施設での家族看護の実際、課題等 | 藤原 真弓 (堺市立総合医療センター) 山内 文 (大阪母子医療センター) 永野 晶子 (大阪労災病院) 山口 望 (市立豊中病院) 井上 敦子、中山美由紀 |

3. 参加者の概要およびアンケート結果

1) 参加者の概要 (申込者 31名 / 参加者 24名)

(1) 年齢: 参加者 (名)

| | 20歳代 | 30歳代 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳代 |
|------------|------|------|------|------|------|
| 人数 (/ 31) | 5 | 7 | 6 | 13 | 0 |

(2) 臨床経験

| | 0～5年 | 6～10年 | 11～15年 | 16～20年 | 21～30年 | 31年以上 |
|------------|------|-------|--------|--------|--------|-------|
| 人数 (/ 31) | 3 | 4 | 4 | 5 | 11 | 4 |

(3) 所属分野

| | ICU・HCU | 外来 | 地域連携 | 病棟 | その他 |
|----------|---------|----|------|----|-----|
| 人数 (／31) | 3 | 2 | 8 | 15 | 3 |

(4) 看護専門学校・大学等で家族看護を学んだ経験

有 2名 無 29名 / 31名

有：大学院 1

(5) 今までに研修会などで家族看護を学んだ経験

有 6名 無 25名 / 31名

有：院内研修 2 過去の同講座 1 自己学習 1

(6) この家族看護オンラインフォーラムを何で知りましたか？（複数回答可）

| | 病院掲示チラシ | 公大看護のHP | 上司や同僚の紹介 | その他 |
|----------|---------|---------|----------|-----|
| 人数 (／31) | 23 | 4 | 5 | 0 |

その他：中山教授の講義 3

(7) この家族看護オンラインフォーラムに参加したいと思ったのは何故ですか？（複数回答可）

| | テーマ | 講師 | 公大の開催 | 交通至便 | 開催時期 | 過去の講座 | その他 |
|----------|-----|----|-------|------|------|-------|-----|
| 人数 (／31) | 31 | 0 | 1 | 0 | 2 | 2 | 2 |

その他：オンライン(Zoom)開催だったため

2) 家族看護オンラインフォーラム参加後のアンケート結果

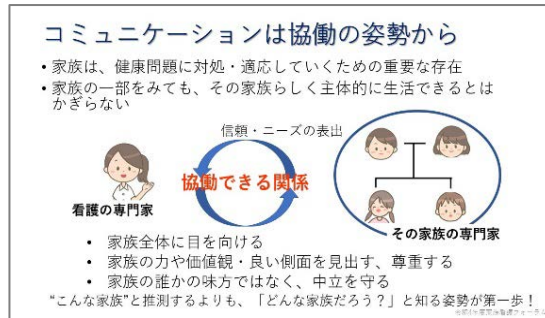
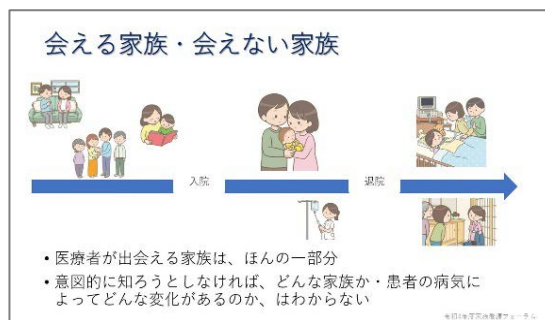
(1) 家族看護オンラインフォーラム評価（回答 19名/参加者 24名）

| | 大変興味深かった | 興味深かった | どちらともいえない | 興味がなかった | 全く興味がなかった |
|-----------------|----------|--------|-----------|---------|-----------|
| 家族看護の基本姿勢 | 16 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 実践報告：ICUにおける実践 | 13 | 5 | 1 | 0 | 0 |
| 実践報告：一般病棟における実践 | 15 | 4 | 0 | 0 | 0 |
| 実践報告：入退院支援部門から | 15 | 4 | 0 | 0 | 0 |

(2) 家族看護オンラインフォーラム「第1部」の感想(一部抜粋)

「家族看護の基本姿勢」について

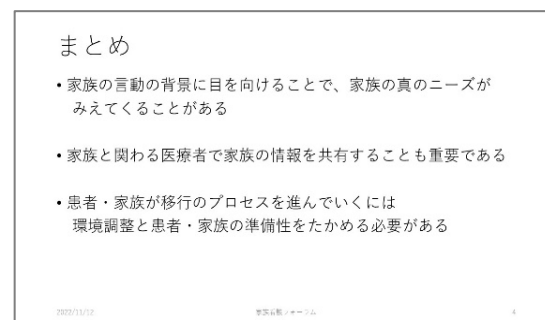
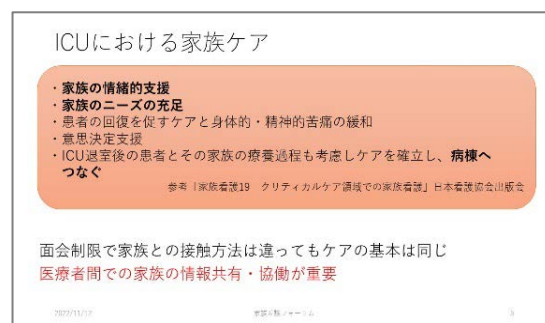
- ・家族も看護の提供者と理解しながらも、これまで具体的な家族への看護の在り方をよくわからないままでした。家族看護を改めて学ぶ機会が少なく、貴重な講義を受けることで自身の看護実践の振り返りを行うことができました。
- ・家族行動の肯定的な側面を見出す、背景を推し量ることで、たとえそれが、苦情の内容であっても、家族にとっての一つの力であると捉える大切さという内容が学びになった。
- ・患者の家族の状況の概説は復習になりました。医療者からみた、困った対応の難しい家族の反応も受容への応答であり家族の力の1つであることを再認識できました。
- ・家族看護する上で、基本となる視点や考え方を学びました。多様な視点で家族を捉えることの大切さを認識できました。患者・家族の反応や面会の様子など情報が継続できていない課題にも気づくことができました。



(講義資料抜粋)

「実践報告：ICUにおける実践」について

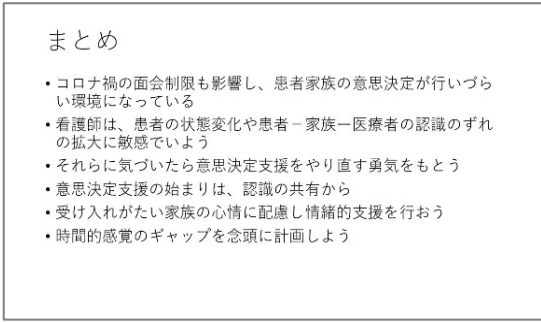
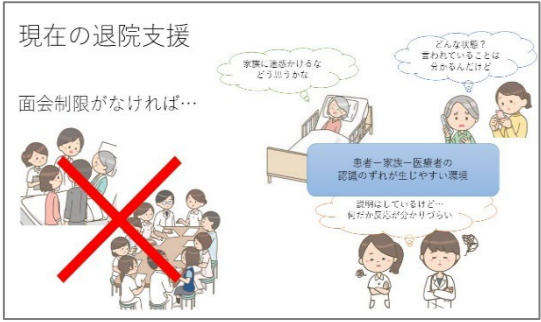
- ・家族のそれぞれの思いを整理し、家族の役割をそれぞれが果たせるように介入された点がとても興味深かったです。
- ・危機的な状況にある家族の問題・課題を整理する過程や、セカンドオピニオンが家族に与える影響など、学ぶことが出来ました。その時々で、医療者が全力を尽くしている様子が伝わり、そのような力を発揮したいとあらためて感じました。
- ・急性期の状態変化の激しい患者さんやそのご家族に対し、コロナ禍といった特殊な環境によって不安も増強すると思われる中で、医療従事者として寄り添う姿勢の工夫にはそれぞれの準備段階を理解することの重要性をご教示いただきました。



患者さん、ご家族がそれぞれ特別でかけがえのない存在であることを関わる医療従事者もしっかり胸に受け止めつつ移行のプロセスを進んでいくサポートの役割があると痛感いたしました。

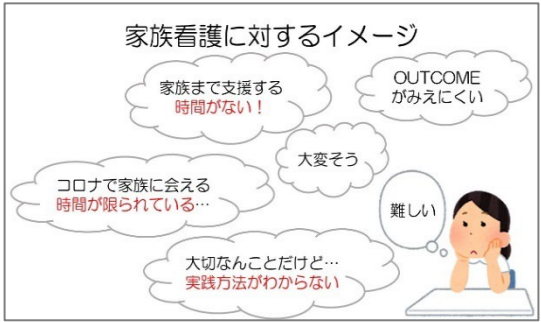
「実践報告：一般病棟における実践」について

- ・退院調整を行っている看護師として、参考になることでした。また、自分が実践していることが間違っていないなどの確認ができた。もっと話が聞きたいと思った。
- ・面会制限の医療現場において、患者・家族・医療者間の認識のズレが生じやすい環境であることを再認識できた。また、この部分に敏感でいること、ズレを拡大させないことに注力することが重要だと学べた。意思決定は状況に応じて、時にはやり直す勇気を持ち、患者・家族にとっての目標(希望)に近づくよう、複数人で合意形成していく必要性を再認識した。
- ・院内では、退院支援は患者支援センターがすると思っているスタッフが多い。また、病棟での支援で実践出来ない過程が自分の中で明確になった。早期からの介入が早期退院(患者家族に利益をもたらすこともある)にも繋がるため、まずは当該病棟での支援を盛り上げていこうと感じた。
- ・意思決定が認識の共有からはじまるということ、その認識の確認やズレに気付くことの重要性を学びました。意図的に家族と関わることの重要性やその効果も事例を通して学びました。退院支援では、医療者の立場で物事を考えがちでしたが、”待つ覚悟を決める”ということも選択肢としてあるんだと気づくことが出来ました。



「実践報告：入退院支援部門から」について

- ・家族看護を意識的に実践することを明日から始めてみようと思える内容でした。地域連携室に在籍しており、入院と退院の両面から見ているため具体的な事例がわかりやすかった。15分以内でできる家族インタビューは、参考になった。



(講義資料抜)

- ・会話と質問は、ケアの延長であることを常に意識し、気がかりなことに関してはタイミングを逃さないことが重要であることを再認識できた。15分インタビューは意図的には実施していなかったが、ある程度実践できていると自己評価できました。改めてマナーや円環的質問、家族への称賛の大切さを再認識しました。


まとめ

15分以内でできる家族インタビューの5つのポイント

1. マナー
2. 家系図
3. 治療的な会話
4. 治療的な質問
5. 称賛

特に会話や質問は日常ケアの延長線上にあり、いつでもどこでも行うことが可能だからこそ、常に意識してしなければそのチャンスを逃してしまふ。

常に意識下において**効率的に目的意識をもった**会話や質問を心がけてください



(講義資料抜粋)

- ・事例を通じ、退院調整看護師がうまく機能していると感じました。インタビューのポイントは、無意識から意識的な実践に変えることが大切だと感じました。
 - ・患者さんやご家族にお話を伺うときの目的意識をしっかりと持つことで、会話が不必要にダラダラ続くことも無くなる方法をご教示いただきありがとうございます。私に関わる透析患者さんも患者さんやご家族は本当に頑張ってらっしゃる方がほとんどで、何気ない一言に涙を流される方も多く「会話」することの大切さをいつも感じていました。そこに、しっかりと目的意識と意図を持って向かうことが患者さんやご家族に対する礼儀でもあり、専門職として関わられるよう今後も精進したいと思います。
- ・こちらからの意図的な質問によって、家族さんが自分の考えを認識でき、そうすることで、患者さんにとって最も良い選択を一緒に考えていけるのだと学びました。

(3) 家族看護フォーラム「第2部」について

「グループワークの役立ち度」について (回答 19名/参加者 24名)

| | 役に立つ | 少し役に立つ | あまり役に立たない | 役にたたない |
|----------|------|--------|-----------|--------|
| 人数 (／19) | 15 | 4 | 0 | 0 |

4. まとめ

2021年度に引き続いて、参加者との双方向の情報共有・意見交換を通して学びが深まることを目指して、同期型のオンラインフォーラムとして開催した。第1部の講義では、家族看護の基礎的な部分を確認したうえで、臨床実践の場で遭遇する身近な事例を交えて解説することで、参加者は日頃の実践を振り返りながら学ぶことができた。第2部では、Zoomのブレイクアウトルームを活用して小グループのディスカッションとすることで活発な意見交換をすることができた。

今後も、臨床に生じている変化や看護師の学習ニーズを分析し、家族看護実践力の向上に貢献していきたいと考える。

看護職のための継続教育実践講座

紙野雪香 勝山愛 細田泰子

1. 活動目的

本活動は、看護職者を対象とした講座を実施し、看護教育に関する基本的な理論に基づいて継続教育における実践方法について考える機会を提供することを目的とする。活動を通して看護継続教育の質の確保における社会貢献ができると思う。

2. 活動内容

1) 受講者

大阪府内の医療施設に所属する看護職者を受講対象にした。大阪府下の医療施設のうち病床数の多い順から 100 施設を選択し、看護部長宛てに講座の案内状とポスターを送付し、受講希望者を募った。各講座 20 名程度とし先着順とした。

2) 講座の方法

対面で講義やグループワークを行った。場所は I-site なんばで開催し、実施の際は感染予防を徹底するとともに座席指定をした。

3) 講座内容

1 回 2 時間の講座を 3 回実施した。本学看護教育学教員で実施し、本学教員が作成した講義資料を教材として使用した。講座内容については表 1 に示す。

4) 講座評価

講座終了時には受講者に講座アンケート（所要時間約 5 分）の実施にご協力いただいた。

5) 活動状況

(1) 受講申し込み者と当日受講者

第 1 回は、受講申し込み者 15 名で当日受講者は 13 名であった。第 2 回は申し込み者 17 名で当日受講者は 14 名、第 3 回は申し込み者 18 名で当日受講者は 13 名であった。

看護教育に関する基本的な理論を学び、継続教育における実践方法について考えてみましょう！

**2022年度
看護職のための
継続教育実践講座**

講師は、
大阪公立大学大学院
看護学研究科
看護教育学分野の
教員が務めます。

| 回 | 日時 | 内容 | 講師 | 申込 締切 |
|-----|--------------------------|---------------------|------|-----------|
| 第1回 | 10月25日(火) 14:00~16:00 | 臨床判断能力の 育成と学習環境 | 細田泰子 | 10/7 金 |
| 第2回 | 11月1日(火) 14:00~16:00 | 看護実践の意味と ナラティブ | 紙野雪香 | 10/7 金 |
| 第3回 | 11月30日(水) 14:00~16:00 | 成人学習理論の 看護における活用 | 勝山愛 | 11/4 金 |

場所: I-site なんば C1 会議室
参加費: 無料
対象: 大阪府内の医療施設に所属する看護職の方
定員: 各回先着20名様(事前申込)
*定員になり次第、締め切らせていただきます。
*申込完了通知は、登録いただいたメールにお知らせいたします。

申込み: 2022年9月5日(月) 10:00開始
URLまたはQRコードよりアクセスし、お申し込みください
◆ URL: <https://forms.office.com/r/aiMYHZ4izU> ◆ QRコード:

【お問い合わせ】
大阪公立大学大学院看護学研究科 看護教育学分野 紙野雪香 E-mail: kaminoy@omu.ac.jp

表1 看護職のための継続教育実践講座の内容

| 回 | 日時 | 内容 | 講師 |
|-----|-----------------------|-----------------|-------|
| 第1回 | 10月25日 14:00~16:00 | 臨床判断能力の育成と学習環境 | 細田 泰子 |
| 第2回 | 11月1日 14:00~16:00 | 看護実践の意味とナラティブ | 紙野 雪香 |
| 第3回 | 11月30日 14:00~16:00 | 成人学習理論の看護における活用 | 勝山 愛 |

(2) アンケート結果

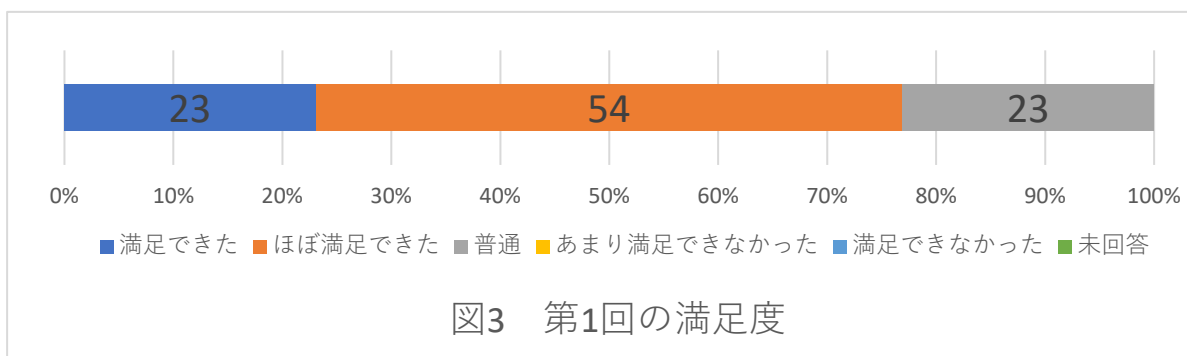
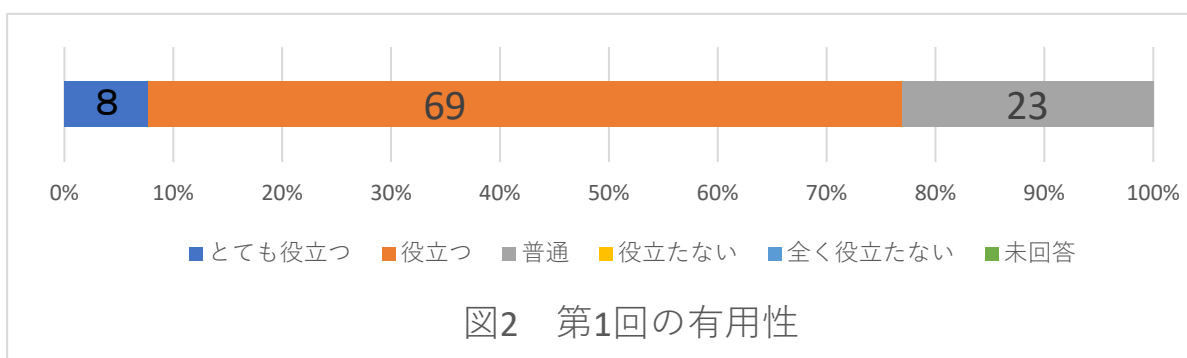
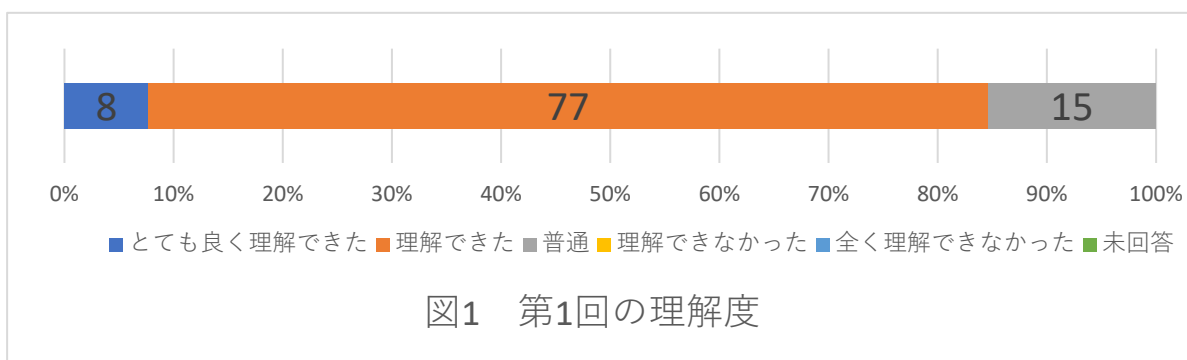
①第1回「臨床判断能力の育成と学習環境」について

13名から回答が得られた。受講者の役職については、副部長2名(15%)、副師長1名(8%)、主任4名(31%)、副主任1名(8%)、スタッフ5名(38%)であった。看護師経験年数は、10~14年2名(15%)、15~19年3名(23%)、20~24年6名(47%)、25年以上2名(15%)であった。指導経験年数は表2に示す。

表2 指導経験年数 n= 13

| | 学生 | | 新人 |
|--------|----------|---------|----------|
| | 人(%) | その他 | 人(%) |
| 5年未満 | 3 (23) | | 6 (46) |
| 5~9年 | 2 (15) | | 1 (8) |
| 10~14年 | 2 (15) | | 2 (15) |
| 15~19年 | 1 (8) | | 1 (8) |
| 20年以上 | 0 (0) | | 1 (8) |
| その他 | 1 (8) | 大学助教:3年 | 0 (0) |
| 未回答 | 4 (31) | | 2 (15) |

講座の内容については図1~3に示す。内容の理解については、とても良く理解できた・理解できたが11名(85%)、普通が2名(15%)であった(図1)。教育実践に役立つかについては、とても役立つ・役立つが10名(77%)、普通が3名(23%)であった(図2)。満足度は、満足できた・ほぼ満足できたが10名(77%)、普通が3名(23%)であった(図3)。



②第2回「看護実践の意味とナラティブ」について

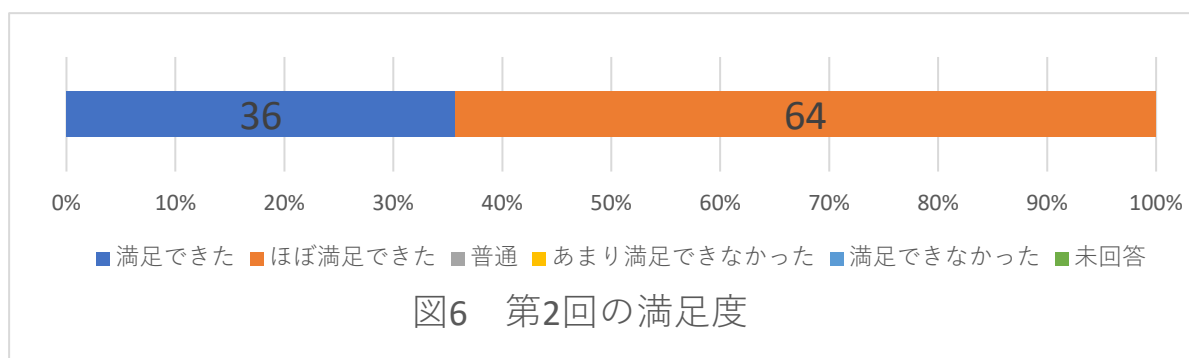
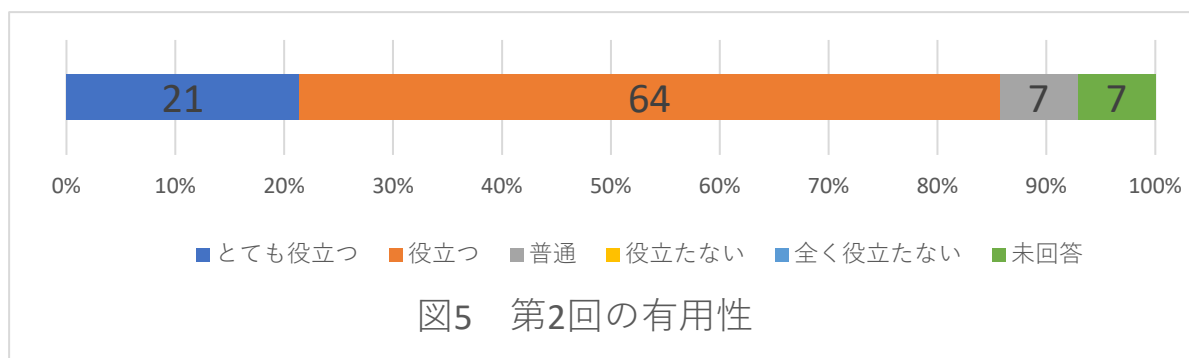
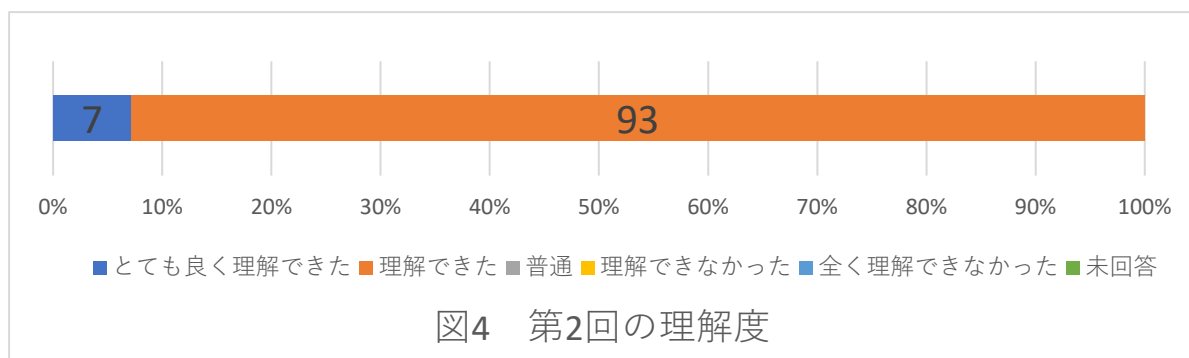
14名から回答が得られた。受講者の役職については、副部長2名（14%）、師長3名（21%）、副師長1名（7%）、主任4名（29%）、スタッフ4名（29%）であった。看護師経験年数は、15～19年6名（43%）、20～24年6名（43%）、25年以上2名（14%）であった。指導経験年数は表3に示す。

講座の内容については図4～6に示す。内容の理解については、とても良く理解できた・理解できたが14名（100%）であった（図4）。教育実践に役立つかについては、とても役立つ・役立つが12名（85%）、普通が1名（7%）、未回答が1名（7%）であった（図5）。満足度は、満足できた・ほぼ満足できたが14名（100%）であった（図6）。

表3 指導経験年数

n= 14

| | 学生 | | 新人 | |
|--------|----|--------|----|--------|
| | 人 | (%) | 人 | (%) |
| 5年未満 | 5 | (36) | 3 | (21) |
| 5～9年 | 2 | (14) | 2 | (14) |
| 10～14年 | 3 | (21) | 6 | (43) |
| 15～19年 | 2 | (14) | 0 | (0) |
| 20年以上 | 0 | (0) | 2 | (14) |
| 未回答 | 2 | (14) | 1 | (7) |



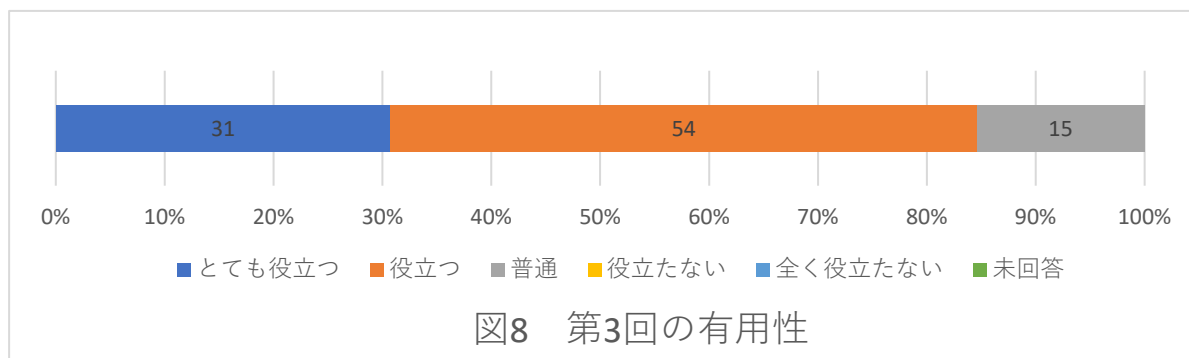
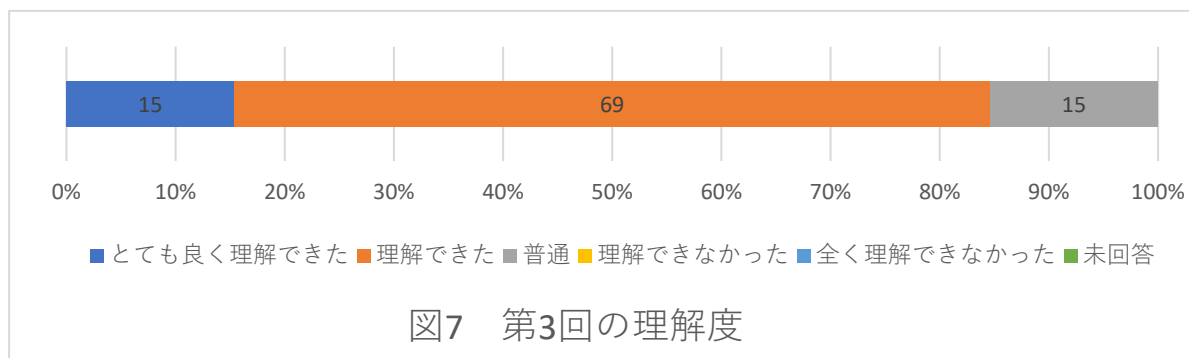
③第3回「成人教育理論の看護における活用」について

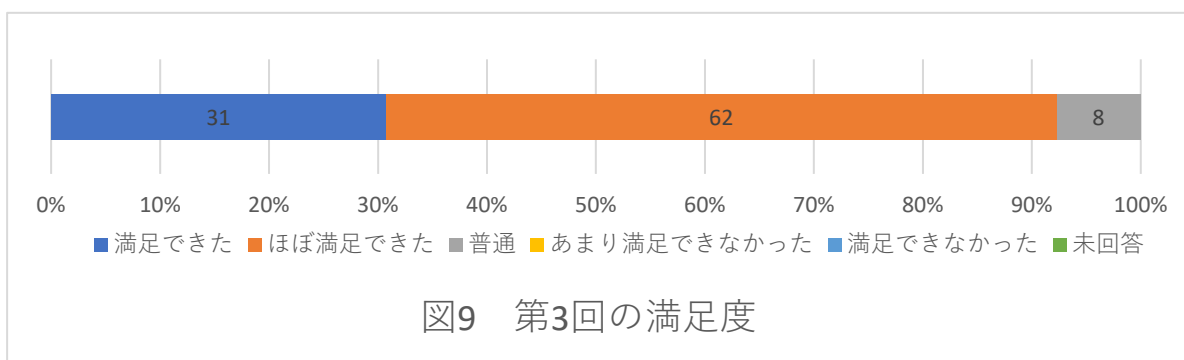
13名から回答が得られた。受講者の役職については、副部長2名(15%)、師長4名(31%)、副師長1名(8%)、主任3名(23%)、スタッフ3名(23%)であった。看護師経験年数は、15～19年4名(31%)、20～24年5名(38%)、25年以上4名(31%)であった。指導経験年数は表4に示す。

講座の内容については図7～9に示す。内容の理解については、とても良く理解できた・理解できたが11名(84%)、普通2名(15%)であった(図7)。教育実践に役立つかについては、とても役立つ・役立つが11名(85%)、普通が2名(15%)であった(図8)。満足度は、満足できた・ほぼ満足できたが12名(93%)、普通1名(8%)であった(図9)。

表4 指導経験年数 n= 13

| | 学生 | | 新人 | |
|--------|------|--------|------|--------|
| | 人(%) | | 人(%) | |
| 5年未満 | 4 | (31) | 2 | (15) |
| 5～9年 | 1 | (8) | 2 | (15) |
| 10～14年 | 3 | (23) | 3 | (23) |
| 15～19年 | 0 | (0) | 0 | (0) |
| 20年以上 | 0 | (0) | 1 | (8) |
| 未回答 | 5 | (38) | 5 | (38) |





④自由記載について

教育実践での有用性については以下のような意見があった。

- ・新人看護師への教育ではこれからの院内教育計画へ、学生への教育では、指導者の育成へ活かそう。
- ・どのように考えていくか教えるのにコンセプトを活用した学習デザインを使っていきたい。
- ・“臨床判断モデルに基づいた質問項目”として具体的な発問例を示してもらえたことで、今後のOJTの中で使っていけそう（使ってみよう）と思った。
- ・教育をしていく上で、語ることの意味や重要性を後輩達にも伝えることができると思った。
- ・新人看護師の指導者（実地指導者）が新人を教育する際に抱えている問題に対してお互いが肩に力が入った状態では良い対話が生まれにくいように思えた。指導者に対してナラティブを伝えることで自己の成長や教育・人材育成にもつながると感じた。
- ・若い看護師が主体的になり、自尊感情が高まるために教育担当者として行動を変えたい。環境を整えていく。
- ・今までは教育内容を指導者が考えていた。主体がだれかを考えていなかった。主体性を考え、自己で教育計画を立てられるようにしていきたい。
- ・教育担当者として、マンネリ化していたプログラムの改訂に役立てることができる。

本講座への要望については以下のような意見があった。

- ・ペアシェアで他施設の方とお話する機会があり、同じ様な悩みをもち経験されているのだと感じる事ができた。
- ・講義の内容をワークすることでイメージがついて質問もできたのでよかった。
- ・勤務希望の関係で月に1回にしてもらいたい。

3. 今後の展望

理論的背景を基盤とした具体的な教育実践方法を考える良い機会となっており、今後も活動を継続したいと考える。ペアシェアを通して講義内容の理解が深まった、他施設の看護職

との情報交換になった、という意見があった。これからもペアシェアを積極的に取り入れていくこととする。今年度は、第2回と第3回を同じ月に開催したことから、職場での勤務調整が難しく月に1回にしてほしい、という意見があった。今後は月に1回の開催とする。

2022年度 看護職・介護職のための腰痛予防推進リーダー研修会実施報告

杉本吉恵 相原ひろみ 細名水生 山口舞子 富澤理恵

1. はじめに

日本における「休業4日以上の上業務上疾病」(厚生労働省 業務上疾病発生状況)のうち腰痛による発生において保健衛生業が2007年以来第1位となっている。2020年度には1944件と、年々増加傾向にあり日本の全産業の腰痛発生うち34.5%が保健衛生業による腰痛になっている。

そのため2015年から看護職や介護職などケア実施者に腰痛予防に必要な知識と技術を普及するとともに、臨床において腰痛予防対策を推進していけるリーダー的人材を育成する目的で、研修会を企画・実施してきた。

2020年度から新型コロナウイルス感染症拡大が続き、オンラインやオンデマンドでの研修会をおこなってきたが、昨年度のアンケートで技術習得には対面がよいとの意見もあり今年度は対面での研修会を企画した。しかしながら、参加者が少なかったため、急遽オンデマンド研修会を企画した。

2. 研修会の実施報告

1) 対面による研修会 3日間

研修会の案内は、大阪府立5医療センター、大阪公立大学医学部附属病院を含む大阪府内総合病院、看護大学・介護福祉士専門学校、その他大阪府内介護老人保健施設等の合計105施設に郵送した。そのほか、昨年参加者へのメール周知、SNSでの広報活動、腰痛予防に関心がありそうな個人にもメールで連絡をした。

(1) 講師

講義・実技研修：上田喜敏先生 (安全なケア研究所 博士(工学) 理学療法士)

実技指導補助：杉本吉恵、相原ひろみ、細名水生、富澤理恵、山口舞子 (大阪公立大学看護学部)

(2) 参加申し込み数

4名 (看護職1名、介護職3名)

受講要件：医療・介護・福祉関係者・学生等腰痛予防に関心のある方

受講料：3回分で7,000円

(3) 研修会日時

1回目：2022年10月1日(土) 9:30~16:00 (9:00 受付開始)

2回目：2022年10月29日(土) 9:30~16:00 (9:00 受付開始)

3回目：2022年11月20日(日) 9:30~16:00 (9:00 受付開始)

(4) 研修会場所

大阪公立大学羽曳野キャンパス K301 実習室

(5) 研修会内容

1回目 2022年10月1日

9:30-10:00 講師紹介 教員紹介、参加者の自己紹介

10:00-12:00 講義 第1部「腰痛対策は利用者/患者と介護提供者の安全になる」



写真1 講義風景

13:00-15:00 講義 第2部「腰痛対策の具体的な方法」～セーフティケア～

15:00-16:00 実技 腰痛予防の基本的な姿勢、履物の重要性、患者の支え方



写真2 座位時の対象の支え方

2回目 2022年10月29日

9:30-10:30 講義 アメリカの安全な患者介助&移動

10:30-12:00 実技 身体の重みの体験、背上げ背下げ時の摩擦(ずれ)の体験
体位変換時のベッドの高さ、介助姿勢、環境と整えることの重要性

13:00-15:30 実技 スライディングシートの使い方 ベッド上移動、体位変換
スライディングボードを使った車いすへの移乗

15:30-16:00 まとめ



写真3 スライディングシートの紹介



写真4 スライディングシートの使い方



写真5 背上げ時の摩擦（ずれ）の体験



写真6 スライディングボードの使い方

3回目 2022年11月20日

| | | |
|-------------|------|--|
| 9：30-10：00 | 意見交換 | 職場で腰痛予防のために工夫したこと |
| 10：00-12：00 | 実技 | リフト・吊り具などの使い方 ベッドから車いす移乗 |
| 13：00-15：30 | 実技 | リフト・吊り具などの使い方 ベッドから車いす移乗 ベッドからストレッチャーへの移乗 仰臥位から腹臥位への体位変換 |
| 15：30-16：00 | まとめ | この研修会で学んだことの意見交換 |



写真7 櫓式リフトの使い方



写真8 床走行式リフトの使い方



写真9 ホバーマットを使った腹臥位



写真10 ホバーマットを用いた腹臥位2

(6) 最終回のまとめでの意見

「安全な身体の使い方について学べた。」「介助時の姿勢の重心移動はまだ身についていないので意識して習慣化したい。」リフトについては、「練習すれば臨床でも使用できそうだ。」「福祉用具の導入だけでは腰痛は防げないことが分かった。」「参加者が少なかったので十分に実技指導を受けることができた。」「背上げや背下げ時の摩擦については体験することが重要と分かった。」「物を持ち上げる時の持ち上げ制限重量について知らなかった。」「看護師養成や介護士養成学校において、教育内容を改善してほしいし、テキストも作ってほしい」などの意見があった。

(7) アンケートの結果

アンケートは無記名で参加者全員4名（回収率100%）からの回答があった。

(8) 対象者の属性

年代：40歳代2名（50%）、50歳代2名（50%）

性別：男性1名（25%）、女性3名（75%）

職種：看護職1名（25%）、介護職3名（75%）

職場における立場：リーダー職1名（25%）、スタッフ3名（75%）

(9) 講義内容

講義内容が職場での腰痛予防に役立つかについては、全3回を通して「非常にそう思う」は3名(75%)、「あまり思わない」は1名(25%)であった。「あまり思わない」理由は、「忙しい、時間がないなどの理由で受け入れてもらえないと思う」であった。

講義内容が自身の腰痛予防に役立つかについては、全3回を通して「非常にそう思う」は2名(50%)、「少し思う」は2名(50%)であった。

(10) 研修会受講後に腰痛予防対策

自身の腰痛予防対策として、ベッドの高さを上げて介助、物を取るときの姿勢やベッド上でケア時の姿勢、腰を曲げない、福祉用具（動作別移乗用具）の検討などの回答があった。

職場での腰痛予防対策を進めるために取り組んだこととしては、ベッドの高さを上げるように指導、ケア時に身体をねじらないように正面でのケアの実施などであった。今後の取り組みとしては腕を使つてのケアを避ける、スライディングシートやリフトの活用、腰痛予防の研修会開催や腰痛予防の看護研究などであった。

職場で腰痛予防対策を推進する上での困難は、患者を抱える方が楽というスピード重視の職員がいるのでなかなか対策が浸透しない、上司の腰痛予防に対する意識が薄い、勤務時間がバラバラで職員全員に周知できないなどであった。

2) オンデマンド講義

対面での研修会と同様に広報活動を実施した。受講要件：医療・介護・福祉関係者・学生等腰痛予防に関心のある方とし、学外者受講料：1,000円、学内者受講料：無料とした。

(1) 配信期間 2023年1月～2023年5月

(2) 参加者

学外者5名（医療施設2名（看護師1名、管理職1名）、特別養護老人ホーム3名（介護職2名、管理職1名））

学内者5名（大阪公立大学医学部附属病院看護師3名、総合リハビリテーション研究科院生1名、看護学研究科院生1名）

(3) オンデマンド講義内容

講義内容は、基礎知識と腰痛対策の具体的な方法からなり、以下の動画について YouTube の視聴限定で講義動画をアップした。それぞれの講義資料は、看護実践研究センターHP から閲覧・入手できるようにした。

講義動画リスト

- I. 医療・介護サービスを取り巻く社会的背景 (13分)
- II. 介護とテクノロジー、セーフティケア (35分)
- III. 職場環境を整備する 5S 活動 (19分)
- IV. 介護・看護・リハの人間工学 新・職場における腰痛予防対策指針 (52分)
- V. 腰痛対策の具体的な対応方法 (19分)
- VI. アメリカの安全な患者介助&移動—過去から学び、未来を支えるために (16分)

実技動画リスト

- I. ケアにおける腰部負担軽減方法の実際 (53分)
- II. リフト・吊り具の使用法 とホバーマットを用いた腹臥位への体位変換の実際 (54分)

3. 研修会のまとめ

1) 対面研修会について

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が緩和しているということで対面研修会を企画したが、参加者4名と大変少ない状況となってしまった。医療施設や介護施設においては、外部の研修に参加することにはまだ抵抗があったと考えられる。一方で参加者数が少なかったため、参加者が実技練習に取り組む時間は十二分に確保できた。また、アンケートの結果からは自身の腰痛予防や職場での腰痛予防に役立つ内容であった。

医療施設や介護施設に勤務する職員の対面研修会参加については、次年度以降も新型コロナウイルス感染症の感染状況に大きく影響される可能性が高い。

2) オンデマンド研修会について

オンデマンド研修会参加者は、学外者5名、学内者5名の計10名となった。2023年1月に研修会の案内を配布したため、時期的に参加者の増加につながらなかった可能性がある。本学医学部附属病院の看護師3名の受講があった。研修会の講義資料は看護実践研究センターHP で入手する方法をとっているため看護実践研究センターの看護生涯学習支援についてご理解いただける機会になったと考えられる。

3) 今後の課題

研修会の参加者を増やすためのさらなる広報活動の工夫が必要である。

看護職を対象とした実践に活かす看護研究セミナー

大阪公立大学大学院看護学研究科先進ケア科学領域ヒューマンケア科学分野

細名 水生 森木 ゆう子 富澤 理恵 重見 雅子 浜 恵実子

1. 活動目的

大阪府内に在住または府内の医療・保健・福祉施設に所属する看護師に対して、看護研究セミナー「看護職を対象とした実践に活かす看護研究セミナー」を開催し、看護師の研究能力の向上を図る。これにより、所属施設及び活動の場において、研究活動を推進し看護実践能力や看護の質の向上につながり対象者への看護に還元できると考える。

2. 活動内容

- 1) 参加者：大阪府内在住の看護師、または府内の医療・保健・福祉施設に所属する看護師
定員 10 名程度
- 2) 場所：大阪公立大学大学院看護学研究科（阿倍野キャンパス看護学舎または遠隔：ZOOM）
- 3) 実施内容

看護研究のセミナーを期間内に 3 回程度実施する。研究初心者や研究の経験が少ない看護師の参加を歓迎する。大阪公立大学大学院看護学研究科の教員による講義及び演習を行う。大阪府内の看護師であれば看護研究の経験は問わず、所属に関わらず実践に活かすことができる看護研究の概要と活用の手立てになる内容とする。

講義を受けるだけでなく、実際に参加者は、本セミナーの受講とともに、自分の研究テーマで、文献検討から研究計画書作成まで取り組んでいく。セミナー内でディスカッションや指導を受けながら、自分の研究計画書を完成させるところまで実施する。実施後にアンケート調査を実施する。

4) 募集方法

大阪公立大学大学院看護学研究科のホームページに募集案内を掲載、大阪府看護協会へのチラシの設置、大阪公立大学医学部附属病院、実習関連病院 2 施設にチラシを配布した。

5) 参加費

セミナーは 3 回シリーズで 6000 円とした。

6) セミナー会場

大阪公立大学大学院看護学研究科阿倍野キャンパス 5 階多目的ホール

図1 セミナーチラシ

3. 活動の実施報告

3回のセミナーの参加者は、大阪府内の病院に勤務する看護師4名（4施設）であった。

1) 第1回セミナー

- (1) 開催日時：2022年11月22日（火） 10：00～16：00
- (2) 場所：阿倍野キャンパス看護学科学舎5階多目的ホール
- (3) 参加者：4名
- (4) プログラム

| 時間 | プログラム内容 |
|-------------|--|
| 10：00～12：00 | 講義「看護研究の概要と進め方」 講師：細名 臨床における看護研究の意義から看護研究の概要、文献検索の方法、テーマの抽出に関する講義を実施した。 リサーチクエスションの整理のワーク ※途中10分休憩含む |
| 12：00～13：00 | お昼休憩 |
| 13：00～16：00 | PCを用いた医中誌での文献検索演習 医中誌を用いた文献検索を参加者それぞれが実際に行い、研究テーマに関する先行研究を検索した。少人数でのセミナーであり、医中誌での検索やサイトの操作に戸惑う参加者については、随時教員が個別指導を行った。抽出した文献のうち、他機関から取り寄せるべき文献を選定し、取り寄せ文献については、教員が取り寄せ手続きを行った。次回のセミナーまでに取り寄せた文献を各参加者へ郵送した。 |

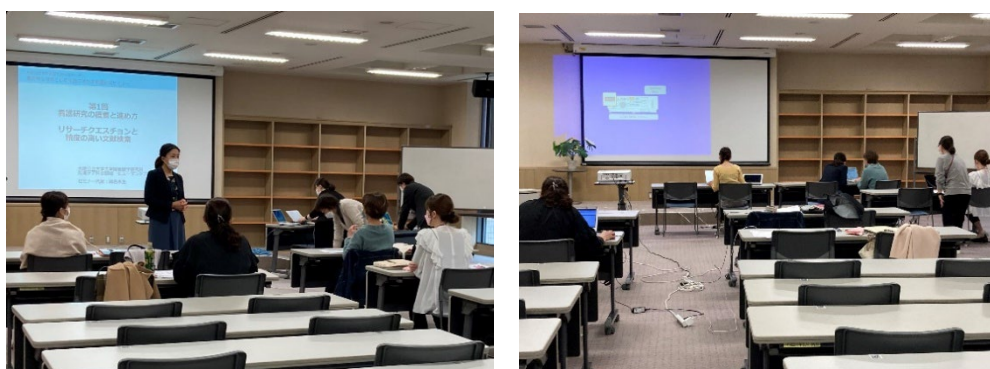


図2 第1回の会場の様子

2) 第2回セミナー

- (1) 開催日時：2022年12月19日（月）10：00～16：00
- (2) 開催場所：阿倍野キャンパス看護学科学舎5階多目的ホール
- (3) 参加者：4名
- (4) プログラム

| 時間 | プログラム内容 |
|-------------|--|
| 10：00～12：00 | 講義「研究計画からの研究のプロセス」 講師：細名 研究計画書の作成からデータ収集、論文作成に至るまで研究実施から研究成果の公表までの一連のプロセスについて講義を行った。 ワーク「研究計画書を作成する」 ※途中 10 分休憩含む |
| 12：00～13：00 | お昼休憩 |
| 13：00～16：00 | 演習「PC を用いて研究計画書を作成する」 PC を用いて、参加者個々が自分の研究テーマについて研究計画書の作成に取り組んだ。計画書の様式を指定の様式を用いて、作成にあたり、教員が個別に内容を確認しながら適宜指導を行った。 必要時、医中誌での文献検索も実施しながら、演習に取り組んだ。 |



図3 第2回の会場の様子

3) 第3回セミナー

- (1) 開催日時：2023年1月24日（火）10：00～16：00
- (2) 開催場所：阿倍野キャンパス看護学科学舎5階多目的ホール
- (3) 参加者：3名（1名体調不良で欠席）
- (4) プログラム

| 時間 | プログラム内容 |
|-------------|--|
| 10：00～12：00 | 演習 参加者1人ずつ、研究計画書の確認と個人指導を実施した（担当：細名） その後、PCを使用して各自計画書の修正と随時個別指導を行った。 第1回での文献検索で得た先行研究について研究背景に活用していく必要性や、研究方法の書き方について主に助言した。 ※途中 10 分休憩含む |
| 12：00～13：00 | お昼休憩 |
| 13：00～16：00 | 研究計画書の発表及びディスカッション（参加者及び教員） 1人15分発表+ディスカッション 午前中に作成した、研究計画書を印刷し、資料として配布した。 |

配布資料をもとに、参加者が順に自分の作成した研究計画書の内容を発表し、参加者、教員とともにディスカッションをした。
参加者同士で意見交換が多くなされ、今後の研究計画の示唆が得られていた。



図4 第3回の会場の様子

4. アンケートの集計結果

1) 参加者の背景

- (1) 年代：30歳代 2名, 40歳代 1名, 50歳代 1名
- (2) 最終学歴：専門学校卒 4名
- (3) 取得免許：看護師 4名
- (4) 看護師の経験年数：平均10年
- (5) 看護師の勤務経験場所：病院の病棟勤務 4名, 他施設なし
- (6) 看護研究に取り組んだ経験：あり3名 (学生時代1名, 就職後3名(複数回答))
なし1名
- (7) 今回セミナーに参加した理由(原文)

- ・今まで何となく関わらせてもらったり、ラダー教育としてさせてもらいましたが、きちんと学んだことがなく、自ら、学びたいと思ったことがなかったのですが、レポート、文章が苦手ということもあり、きちんと学びたいと思いました。
- ・就職後にいくつか看護研究に取り組ませて頂いていますが、院内でも確立された研修等も無く、詳しくな方に教わったり、都度調べて取り組んでいる状況です。そのため、基礎から学びたいと思い、参加させて頂きました。
- ・看護研究についてしっかり基礎を学んだことがなく、主体となって取り組んだ経験がない為学びたい。後輩指導に役立てたい。
- ・院内にて看護研究の発表が毎年あるが(コロナ禍は除く)実際どのように行えばよいのか、初歩的などころから分かっていないため、今後、発表に参加していくためにこのセミナーにて学びたいと思いました。

2) セミナーへの参加について

(1) 満足度・理解度・難易度

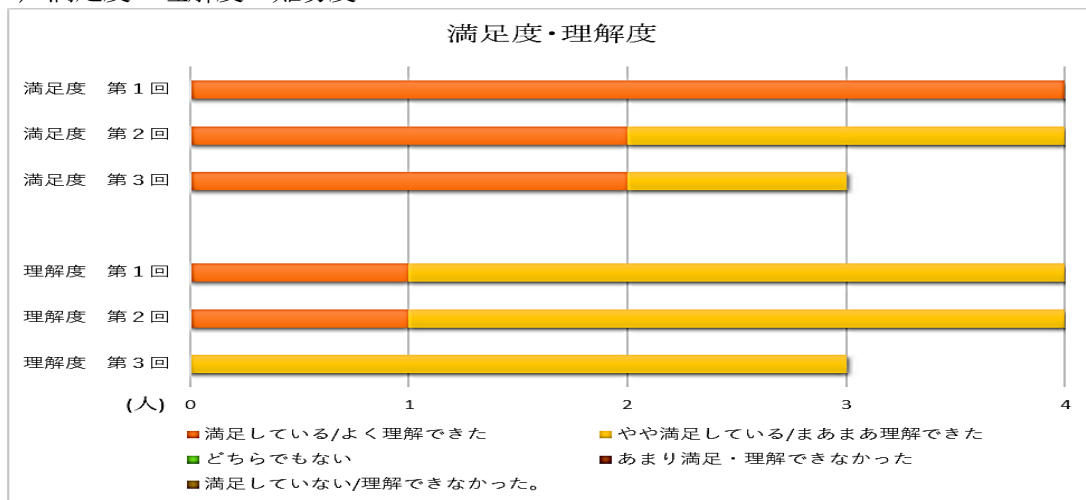


図5 各回のセミナーの満足度・理解度

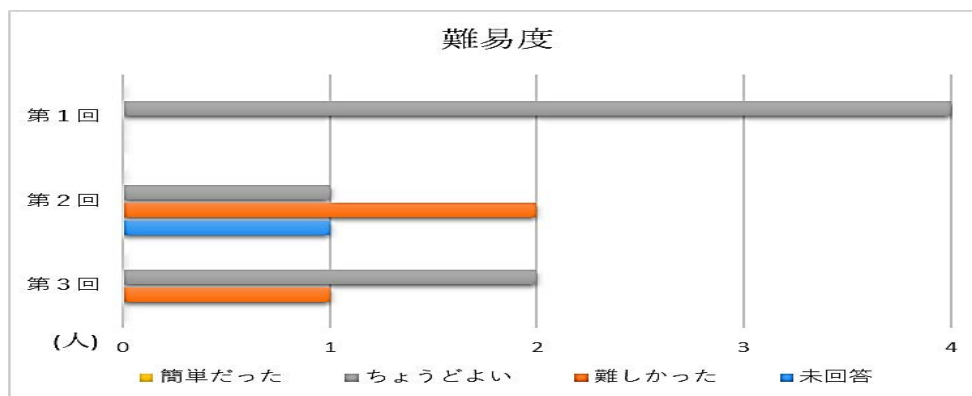


図6 各回のセミナーの難易度

(1) -1 セミナーの満足度に関する自由記載(原文)

- 1回目
- ・質問に1対1で応じて頂き、手厚くご指導いただけました。
 - ・看護研究について、何も分からなかったが、段階をふんで考察していく過程のかな?と思えました。文献検索についても学ぶことができました。
 - ・基礎から教わることができた。文献検索に対する苦手意識が強く、単発で困っている点のみを聞いて対応していたため、充実した時間でした。
 - ・その都度、質問ができ、わからないことがないことがうれしいです。
- 2回目
- ・論文作成に興味があったため。
 - ・わかりやすく、ていねいに対応して頂いていること。
 - ・看護研究をしたことがないため、文献を読んで、マネからはじめようと思っていたが、計画の立て方や実施していくプロセスを分かりやすく講義して頂いた。
- 3回目
- ・看護研究について何もわからない状態から、研究計画書を何となく作成するまでに至った為。

(1) -2 セミナーの理解度に関する自由記載(原文)

- 1回目
- ・まだ深く理解できていない所もあると思いますが、実際にやってみて、深めたいと思います。ありがとうございました。あと2回、よろしくお願い致します。
 - ・何が分からないかが分からない面もあり、不安はまだあります
 - ・ちょっとしたパソコンの使い方が分かり、うれしいです。
- 2回目
- ・看護研究に取り組みたいと思うようになった。
 - ・研究計画書の記載内容が理解できた。
 - ・未経験の内容もあったため、経験してみないと実感が湧かない部分もあったのかと思います。
- 3回目
- ・研究を行っていく流れについて理解する事はできたと思う。

(2) セミナーに参加して良かった点について(原文)

- 1回目
- ・人数が少ないため、個別で質問することができました。
- 2回目
- ・少人数のため、質問しやすい。
 - ・看護研究の進め方について細かい点を知ることができた。迷ったことがあればすぐにアドバイスがいただける。
 - ・不安なまま進めていた内容も入っていたため。

- ・ひとつひとついねいに指導して頂いたこと。わからないことをわからないままにならずが一番良かったです。
- 3回目
- ・本当、ありがとうございました。また、何かのセミナーがあれば、参加させて顶きたいです
 - ・受講させて頂いてありがとうございました。このセミナーを受講した人を対象としたステップアップセミナーや論文作成に向けた内容があったら嬉しいです。
 - ・毎回、分かりやすいセミナーでした。少人数で、研究が初めての人でも参加でき、難しかったですが楽しかったです。今回の学びを、できるだけ、生かせればと思います。

(3) 文献検索や研究計画書作成の演習について

表1 文献検索や研究計画書作成の演習についての回答

| 回答 | 回答数 (人) |
|-----------|---------|
| よかった | 2 |
| まあまあよかった | 1 |
| どちらともいえない | 1 |
| あまりよくなかった | 0 |
| よくなかった | 0 |

自由記載

・検索ひとつでも、何となくではなく、意味があることがわかった。計画書作成を言語化が難しく、下書きの様に感じてわかりやすいと思った。

(4) 研究計画書の発表と意見交換について

表2 研究計画書の発表と意見交換についての回答

| 回答 | 回答数 (人) |
|-----------|---------|
| よかった | 3 |
| まあまあよかった | 0 |
| どちらともいえない | 0 |
| あまりよくなかった | 0 |
| よくなかった | 0 |

自由記載

・指導に限らず、同じ臨床の現場にいるNSから、アドバイスなり、質問からヒントになるなど、良かったです。

・他の方の研究も covid-19 にて興味深いものであり、また指導されていることで自分とてらしあわすことができた

5. 今後の課題

今回、阿倍野キャンパス側を本事業にはじめて担当し、予算配分における新たな所管手続き、受益者負担に伴う予算のやりくり、事業に係る必要経費の試算など事務的な部分で戸惑った。また、今回の事業で最も困難をきたしたのは参加者の募集であった。チラシや募集の案内の仕方、施設等の選定や配布について計画的にできなかったことが課題である。本セミナーの内容は中小規模の病院に従事する看護職に需要がある可能性が考えられ、今後は計画的に大阪府内にチラシを通して広く周知して参加者の定数の確保をしていく。また、セミナーの内容についてもアンケートで得られた意見を反映して検討していく。

2. 府民健康支援部門

1) 研究報告

- (1) 心身障がい児の性行動の実態と養育者が認知する当人のセルフマネジメントに関するニーズ

心身障がい児の性行動の実態と 養育者が認知する当人のセルフマネジメントに関するニーズ

古山美穂 渡邊香織 佐保美奈子 中嶋有加里 高知恵 山田加奈子
(実践看護科学領域 家族支援看護科学母性看護・助産学)
岡崎寛 織田智子 (認定 NPO 法人プール・ボランティア)

1. 研究背景

現在日本では身体障がい者 436 万人、知的障がい者 109 万人、精神障がい者 419 万人が障がいの診断を受けている。そのうち、18 歳未満の子どもは、身体障がい児 7 万人、知的障がい児 21 万人、25 歳未満の精神障がい者は 39 万人で、複数の障がいを併せ持つ人がいるため正確な数は不明であるが、国民の 7.6%が何らかの障がいを有している（内閣府）といわれている。

本研究で焦点をあてたい性の健康（世界性の健康学会：World Association for Sexual Health）とは、セクシュアリティに関する身体的、情緒的、精神的、社会的に良好な状態をさし、単に疾患、機能不全または虚弱でないということではない。性の健康にはセクシュアリティや性的関係に対する肯定的かつ敬意あるアプローチと同時に、強要・差別・暴力を被ることなく、楽しく、安全な性的経験をすることが求められている（東ら、2015）。すべての人に性の権利があり、いかなる事由によっても区別されることなくその権利は享受される。そのため障がいの有無も例外ではない。一概に障がいといっても多種多様であり、自他ともに安全に性行動をとろうとしても、身体的（視覚や聴覚障害も含む）あるいは認知的に障がいのある子どもは、障がいのない子どもに比べて、強要・差別・暴力を被る可能性は高いと考えられる。日本では心身障がい児が強制性交や強制わいせつの加害・被害者かどうかの公表資料はない（警視庁）が、児童福祉施設の 1 つである情緒障害児短期治療施設に入所している被虐待児の中に、性的加害や被害につながるリスクを抱えた子どもがいるという報告はある（子どもの虹情報研修センター）。また子どもに「エッチな雑誌やテレビへの興味」が出てきても十分な支援ができていないなど知的障がい児を対象にした研究は散見される（長浜、2002；木戸ら、2004；寺川ら、2005；林ら、2008；岡田ら、2011）。知的障がい以外の視覚や聴覚など身体的な障がいがある子どもの性被害などの実態は十分に明らかにされていない。国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は、性教育の指針として国際セクシュアリティガイダンスを公開し、人間関係やジェンダーの理解など包括的セクシュアリティ教育の推進を提唱している。包括的セクシュアリティ教育は、日本の学校や地域で十分浸透しているとは言い難く、特に障がいのある子どもの状況に合わせた教育や支援のニーズは明らかにされていない。学校や親が個々の障がいの状況に合わせて伝えている実状はあるが、学校間や親によって格差があると推測できる。

2. 目的と意義

本研究の目的は心身に障がいのある子どもの性行動や性に対するセルフマネジメントのニーズを明らかにすることである。今後、子どもの年齢や理解、命や健康を守るという点で優先度の高い獲得すべき行動に合わせて、大人が知識やスキルを提供できる支援を検討する基礎的資料にする。

3. 研究方法

1) 研究デザイン

横断的記述研究

2) 研究対象施設

大阪府立支援学校全 46 校と認定 NPO 法人プール・ボランティア（心身障がい者が利用するスイミングスクール）

3) 研究対象者

- a. 大阪府立支援学校全 46 校に在籍する子ども 9,278 人（令和 3 年 5 月 1 日学校基本調査による）の養育者。そのうち校長から協力が得られた学校に在籍する全子どもの養育者。
- b. 認定 NPO 法人プール・ボランティアを利用する 18 歳以下の子どもの養育者。a の対象者と重複して回答しないよう説明した。

(1) 研究対象者の選定方針および除外基準

選定方針は、a 大阪府立全支援学校 46 校と b 認定 NPO 法人プール・ボランティアに在籍する子どもの全養育者。支援学校の選定基準は大阪府立であることとした。配布予定者数は、各校長に一任した。

除外基準は 18 歳より上の子どもしかいない養育者（大阪府立支援学校の在籍者には基本、該当しない除外基準である）。

4) データ収集期間

2022 年 12 月 1 日～2023 年 2 月 28 日（予定）

5) データ収集方法

無記名自記式質問紙票（Google フォーム）を使って収集した。

6) 調査項目

- (1) 基本属性：支援学校の所属、子どもの年齢・性別、子どもからみた回答者（養育者）の続柄・年齢
- (2) 心身障がいの診断の有無、命や性の健康を守るという点で知識の理解や行動がとれな

いと養育者が考える心身の障がいを疑う状況 22 項目

- (3) 性行動：自分の気持ちを伝えたい、他人とコミュニケーションを取りたいという時に、自他の心身に対する理解や行動といった広い意味での性行動（養育者から見た子どもに起こっている気になる性行動） 27 項目
- (4) セルフマネジメント：性の健康に対する自分の行動や思考、感情を調整する能力（学校園で教えている知識の理解 11 項目、子ども自身が行動や思考、感情を調整できていないと養育者が認知する心配事 7 項目）
- (5) 養育者の心配度：全く心配していないが 1、心配でたまらない状態が 10 として 1 から 10 のうちどれくらい心配か
- (6) 性に関する教育や支援に対する養育者の考え・希望 5 項目と自由記載
上記項目は日本性教育協会編（2019）：第 8 回青少年の性行動全国調査報告「若者の性」白書や文科省学習指導要領をもとに、研究者らで作成した。

7) 研究対象施設への同意方法

a. 大阪府立支援学校

大阪府立支援学校校長会役員を通して、役員会、校長会で本研究の課題名、研究目的、研究期間、研究対象者、研究方法、研究内容、倫理的配慮、研究の資金源等や研究に係る利益相反、研究組織について口頭および書面で説明した。協力可能と判断した校長から、研究代表者のメールに連絡をもらった。再度、校長にメール及び電話で説明し、同意が得られた学校に承諾書 2 部を送付し、署名をもらい、1 部を返信用封筒で返送してもらった。もう 1 部は校長が保管した。

b. 認定NPO法人プール・ボランティア

理事長、事務局長に本研究の課題名、研究目的、研究期間、研究対象者、研究方法、研究内容、倫理的配慮、研究の資金源等や研究に係る利益相反、研究組織について口頭および書面で説明した。承諾書 2 部に署名をもらい、1 部は研究代表者、もう 1 部は理事長が保管した。

8) 研究対象者への同意方法

a. 大阪府立支援学校

同意を得た研究対象施設の校長に、配布可能な在籍者の人数を確認した。できれば在籍者全員に配布をお願いしたいが、施設で生活している子どもの養育者である施設長に複数の子どもの回答をお願いするのは負担であるという場合は、施設長との相談も含めて、校長の判断で、施設で生活している子どもの養育者には配布しないという選択もあることを伝えた。Google フォームの URL あるいは QR コードが記された研究対象者宛の説明依頼文（本研究の課題名、研究目的、研究期間、研究対象者、研究方法、研究内容、倫理的配慮、研究の資金源

等や研究に係る利益相反、研究組織について記載)を1枚ずつ封筒に入れ封を閉じ、文面が子どもの目に触れないように配慮した。配布予定者数分、学校に郵送で送付した。学校長名で、大阪公立大学からの調査依頼である旨の説明文と一緒に配布した。Google フォームの最初に、研究に対して同意するかどうかの項目を設けた。

b. 認定NPO法人プール・ボランティア

施設のメーリングリストを使って、Google フォームの URL あるいは QR コードが記された研究対象者宛の説明依頼文を配布した。Google フォームの最初に、研究に対して同意するかどうかの項目を設けた。

9) 分析方法

質問項目全ての割合及び代表値を記述する。年齢は正規性を確認し、平均値(標準偏差)又は中央値(四分位範囲)で示す。心身障がいの診断の有無、命や性の健康を守るという点で知識の理解や行動がとれないと養育者が考える心身の障がいを疑う状況の各項目の有無別に、性行動とセルフマネジメントについて χ^2 検定、フィッシャーの正確確率検定を行う。質的データ(自由記載)については内容分析法を用いる。

10) 倫理的配慮

大阪公立大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会で承認を得て実施した(承認番号: 2022-26)。

4. 結果

現在、データ収集の途中であり、データ収集終了後、改めて分析し、考察を行う。

1) 対象者の属性

2023年2月21日現在、9名から回答を得た。研究対象者の子どもの年齢は 13.4 ± 2.9 歳であった。子どもの性別は男性が6名、女性が3名、本人の性自認がわからないのは0名であった。研究対象者は父親が3名、母親が5名、友だちが1名であった。研究対象者の年齢は 45.1 ± 4.9 歳であった。

2) 子どもの状況

(1) 心身の障がいの診断の有無

障がいの診断を受けているのは5名であった。診断名は、広汎性発達障害、自閉症、知的障害、ダウン症候群で、複数の診断を受けている人は5名のうち2名であった。

(2) 知識の理解や行動がとれないと養育者が考える心身の障がいを疑う状況(表1)

診断を受けているかどうかにかかわらず、命や性の健康を守るという点で知識の理解や行動がとれないと養育者が考える心身の障がいを疑う状況について回答を得た。複数回答した

人は5名で、「どれもあてはまらない」とする人が3名いた。

表1 知識の理解や行動がとれないと養育者が考える心身の障がいを疑う状況(複数回答) n=9

| | |
|---|---|
| 言語機能に障がいがある(全く伝えられない) | 1 |
| 言語機能に気になるところがある (他人に自分の気持ちを伝えにくい/伝えているのに受け取ってもらえにくい) | 2 |
| 逃げる・抵抗するという点で、気になるところがある(動きにくい/遅い) | 1 |
| 知識を与えられても理解の点で障がいがある(全く理解できない) | 1 |
| 知識を与えられても理解の点で気になるところがある(理解しにくい) | 4 |
| 自分の言動をコントロールすることが難しい /考えないで行動してしまう(衝動的) | 3 |
| 自分の思うようにならないと、かんしゃくを起こす/気分が爆発的 | 4 |
| 気分がコロコロ変わる | 2 |
| 伝えていることに対し聞こうとしないなど、注意を払えない | 1 |
| 伝えたとおりに行動することができない(ことが多い) | 2 |
| 少しのことで容易に動揺してしまう | 1 |
| 1人で高圧的にしゃべってしまうなど、会話のキャッチボールが難しい | 3 |
| 他人と関係性を保つのが難しい(ことが多い) /対人関係のトラブルが多い | 2 |
| どれもあてはまらない | 3 |

3) 養育者が気になる性行動

「性的な関心がないこと」が3名、「性的な関心が年齢不相応に感じること」が1名であった。「プライベートゾーンを他人に見せる(または見せても平気なこと)」3名、「プライベートゾーンを他人に触らせる(または触らせても平気なこと)」2名、「自慰(マスターベーション、オナニー)をすること」1名、「自慰(マスターベーション、オナニー)を場所や時を考えず自制できないこと」1名であった。「子どもが好きと思っている相手が多いこと」1名、「SNSなどで性的な動画や言葉を検索(または視聴)していること」1名、「(心理的な理由で)他人から嫌なことをされてもノーと言えないこと」1名であった。「気になる性行動について考えたことがない」が1名であった。

4) 養育者が心配していること

「性被害を受けるかもしれないこと」4名、「他人に性加害をしてしまうかもしれないこと」2名、「妊娠する(させる)かもしれないこと」1名、「性感染症にかかるかもしれないこと」1名、「どんな知識を持っているのかわからないこと」6名、「どんな行動をとれる状況(成長度)なのかわからないこと」8名、「性に対してどんな価値観をもっているのかわからないこと」7名であった。

5) 性行動に対する養育者の心配度

全く心配していないが1、心配でたまらない状態が10としたうち、平均は3.6±1.8であった。1が1名、最も高い心配度は7(1名)であった。

6) 学習内容の理解 (表2)

性の健康を維持、増進するために必要な知識や、自分の行動や思考、感情を調整していく時に拠り所や手がかりとなる情報について、「全く理解していない」、「理解の程度がわからない」子どもが多いことが推察された。一方、「理解している」子どももあり、学校や親が個々の障がいの状況に合わせて伝え、子どもに伝わっている状況も推察された。セクシュアリティに関する包括的な教育内容を理解していない状況は、障がいがないとされる子どもも同様であると考えられる。命や性の健康を守るという点で、知識の理解や行動がとれない子どもの状況に合わせた伝え方が必要である可能性が示された。

表2 学習内容の理解

| | n | 理解している | 少しは理解している | あまり理解していない | 全く理解していない | 理解の程度がわからない |
|---------------------------------|---|--------|-----------|------------|-----------|-------------|
| 妊娠のしくみ | 9 | 1 | 1 | 0 | 4 | 3 |
| 避妊の方法 | 9 | 1 | 1 | 0 | 4 | 3 |
| 人工妊娠中絶(時期や方法) | 9 | 1 | 0 | 1 | 5 | 2 |
| 自慰(マナーや方法) | 9 | 0 | 0 | 3 | 4 | 2 |
| 梅毒やクラミジア、エイズなどの 性感染症 | 9 | 0 | 1 | 1 | 5 | 2 |
| 男女の身体のしくみ (月経・射精を含む) | 9 | 1 | 1 | 0 | 5 | 2 |
| 平等と性差 (現在の社会の問題) | 9 | 0 | 2 | 0 | 5 | 2 |
| 恋愛・失恋 | 9 | 1 | 0 | 2 | 4 | 2 |
| 関係性における性の問題 (性暴力、デートDV、セクハラ) | 9 | 0 | 2 | 0 | 5 | 2 |
| 性的マイノリティ (同性愛、性同一性障害など) | 9 | 1 | 0 | 2 | 4 | 2 |
| 性の悩みについての相談方法 (人、機関) | 9 | 0 | 1 | 3 | 4 | 1 |

7) 養育者が望む支援

「子どもの発達段階や特性に合わせて、知識を得たり、行動をとったりできる学習機会や教材を増やしてほしい」8名、「家庭でできる教育や支援の教材を増やしてほしい」7名、「教育や支援は家庭以外(学校や地域など)で行ってほしい」が2名であった。

8) 家庭でのセクシュアリティ教育の工夫や支援方法に対する提案(自由記載)

子ども自身や他者の心身、性に対する理解を促したり、性被害に遭わないようにしたりなど、養育者がすでに工夫して行っていることや、支援方法の提案について回答を得た。

- ・家庭で基本的にプライベートは大切と教えその通りに行動している様に見える。

- ・言葉では理解しにくく表現も難しい。視覚支援が有効。
- ・極力家で色々話す様に心がけています。
- ・昭和と令和では常識も変化していると思うので家庭での情報もアップデートしたいと思います
- ・息子には女の子はデリケート(弱い)なので丁寧に対応する。してはいけない事はしてはいけない、マナーを大切に、など基本的な事しか伝えられていないと思う。

5. 研究の限界と今後の展望

当初、障がいのある子どもの性行動や性に対するセルフマネジメントのニーズを明らかにするために、障がいはないと養育者が認知する研究対象者を対照群にして比較する研究計画を立てていた。しかし対照群の学校から協力が得られず、研究計画の変更を余儀なくされた。そのため障害のある子どもに特有の性行動や性に対するセルフマネジメントのニーズであるとはいえないのが本研究の限界である。

今後の研究や心身に障がいのある子どもに包括的セクシュアリティ教育を推進していく上で参考になる意見を対照群の学校長に伺う機会を、A市B区の地域まちづくり課兼A市教育委員会事務局総務部教育政策課のご厚意により設けていただいた。下記はヒアリング内容の抜粋である。

- ・障がいをはじめ、あらゆる差別に対する感度は数十年前よりは格段にあがり、多様な人格と個性を尊重し合う共生社会について理解は進んできていると思う。しかし学校のいじめ対応の場面などで、障がいに対する無理解や差別意識を根強くもつ保護者が少なからずおり、障がいに対する理解が十分ではない(対照群となる)学校で、この研究依頼文を配布することはかなりリスクがあると判断した。障がいのある人は、性衝動を抑えられないという偏見が独り歩きする危険を感じた。
- ・教師をしていて感じていることは、少しの個人差はあれど、性衝動は誰しも同じようになり、障がいの有無には関係ない。障がいの状況によって、知識が理解しにくかったり、他者とのコミュニケーションの方法が不相応であったり、齟齬をきたしていると思う。
- ・学校でトラブルがあると、障がいのある子どもをもつ親は、必要以上に相手の親や子どもに対して下手に出ることがある。また相手が障がいをもっているとわかると、弱みにつけいて居丈高にふるまう親もおり、(多様な人格と個性を尊重し合う共生社会となるには)もう少し時間がかかるように思う。
- ・「障がい」と「性」という2つのスティグマを扱う研究であったため、対照群となる学校の方がかえって協力を得にくかったと思う。

これらご意見も参考に、今回の研究結果をもとに、障がいに対する理解、また子どもの年齢や理解、個性に合わせた教育、支援の方法を検討していきたい。

謝辞

本研究にご協力、ご意見をいただきました施設、自治体、研究対象者様に感謝申し上げます。研究を推進する中で、私たち研究者自身も「障がい」「性」の課題についてさらに深く学ぶことができました。

文献

- ・林真由美ら：知的障がい児者の性に関する実態調査、日本公衆衛生雑誌、55（12）、830-836、2008.
- ・東優子ら：世界性の健康学会「性の権利宣言」、社会問題研究、64、59-62、2015.
- ・木戸久美子ら：知的障害をもつ子どもの性に関する親の意識についての研究、発達障害研究、26（1）38-51、2004.
- ・子どもの虹情報研修センター：情緒障害児短期治療施設における性的問題への対応に関する研究（第1報）、平成21・22年度研究報告書、2012.
- ・長浜亜希子：地域で生活する中・軽度知的障害を持つ女性の性知識、母性衛生、43（2）、292-299、2002.
- ・岡田久子ら：支援者の捉えた知的障害のある女子の性発達に伴う課題と対応、小児保健研究、70（6）、753-759、2011.
- ・内閣府 https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r02hakusho/zenbun/siryo_02.html、[20220831](https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r02hakusho/zenbun/siryo_02.html) アクセス.
- ・寺川志奈子ら：知的障害のある母親の子育て支援に関する研究、小児保健研究、64（2）、301-307、2005.

2. 府民健康支援部門

2) 活動報告

- (1) 健康的に日常を生きることを応援する「ホッと&ハートの会」
- (2) 地域における出前健康講座
- (3) 暮らしの保健室における住民育成活動

健康的に日常を生きることを応援する「ホッと&ハートの会」

南村二美代 籬持知恵子 中村雅美 太田佳織

福間綾 上村里沙 小西利佳 門前結 (博士前期課程)

1. 活動目的

高齢化や治療技術の向上とともに、慢性の呼吸器疾患や心疾患、糖尿病などの慢性病をもちながら地域で生活する人々が増加している。単身世帯も多く地域コミュニティのあり方が変化するなか、孤独な療養生活を余儀なくされる患者も多い。慢性病者は自宅から外に出て他者と交流を図り、情報交換しながら療養上必要な生活管理を実践できることが望ましいが、慢性病患者とその家族の社会参加の場や情報交換の場が少なくなっている状況がある。健康日本 21 (第二次) (厚生労働省, 2013) では、慢性病 (生活習慣病を含む) の発症予防と重症化予防、高齢者の社会生活機能低下予防 (運動器症候群や虚弱の予防) 等が医療政策上の重要課題として掲げられ、住民が楽しく主体性を発揮できる健康づくりの場の必要性が提唱されている。また、「人生会議」などの、人生の最終段階についての意思決定に関わる啓発活動等が国民的課題となっている。これらの社会状況を踏まえ、疾病予防や地域住民の健康的な生活を支援するための情報を提供する必要がある。

このような背景を鑑み、本事業は、長期療養や生活習慣病の管理が必要な方、健康維持に関心がある方の健康管理や社会活動を支援するために、当事者の積極的な参画のもとに医療者が実施・運営する事業である。参加者が“ホッ”とでき、心の安らぎを得ながら病気とうまく付き合っていくこと、健康的な生活のための情報を得て日々元気に生活していくことをめざしている。

また、本事業は大学院生が企画・運営に参画することを通して、地域で慢性病を管理し生活している人々への理解を深め、社会資源の活用やセルフヘルプグループ支援などのサポートネットワークづくりを実践的に学習する場ともなっており、教育上の意義も大きい。

以上のことから、会員同士がつながり、情報交換や交流する場、さらには大学院生の実践的な学習の場にすることを今年度の活動目的とした。

2. 活動方法

1) 参加者

慢性の呼吸器疾患や心疾患、糖尿病などで長期の療養や病気の管理が必要な方やその家族、健康維持に関心がある方

2) 開催方法

今年度も COVID-19 感染拡大防止のため、第1回～第3回の会はオンライン (Zoom ミーティング) を使用し、第4回の会については対面での開催予定である。今年度は就業されている方にも参加しやすいように、オンライン時の開催時刻を 18 時～19 時半に設定した。

3) 事業運営

本学大学院看護学研究科教員および大学院生が運営に携わった。COVID-19 感染拡大の影響により、例年共同活動者として協力を依頼している大阪府立病院機構 大阪はびきの医療センターや在宅療養支援企業には参加協力依頼は行わなかった。

4) 活動内容

大阪公立大学大学院看護学研究科および慢性看護学分野のホームページにおいて開催の案内周知をし、登録者には郵送で会の案内を送付した。その後、今後の参加意思確認と近況報告等を返信してもらった。COVID-19 感染拡大による社会情勢の影響で、基礎疾患を有する方や高齢者が多い参加者への感染リスクを考慮し、第1回～第3回の会についてはWEB開催とし、第4回の会については、対面による開催（予定）とした。

活動内容については、大学院生が講師を担当する講義内容を計画し、健康教育のあり方を体験的に学ぶ機会とした。また、会員同士のミーティングをプログラムし、参加者が楽しく学べるように工夫した。講義やミーティングは、参加者が健康に関する情報を得る場としてだけでなく、意見や情報を交換できる場とした。参加することが心身の負担にならないように配慮し、参加者が他の人と交流でき、療養生活を元気に過ごすための自信を維持できる場となるよう運営した。

表1 令和4年度「ホッと&ハートの会」活動内容

| 回数 | 開催日時 | テーマ | 講師・担当者（敬称略） |
|-----|-------------------------------------|---|---|
| 第1回 | 2022.7.22 (金) 18:00- 19:30 | 講義・ミーティング:オーラルフレイルを予防するために、皆で語り合おう | 解説：太田佳織 南村、中村 福間、上村、門前、小西 |
| 第2回 | 2022.9.15 (木) 18:00- 19:30 | 講義：「腸活」って何？一緒に考えてみませんか？ 腸年齢チェックリスト ミーティング | 講師：福間綾（大学院博士前期課程） 南村、簗持、中村、太田 福間、上村、小西、門前 |
| 第3回 | 2022.11.4 (金) 18:00- 19:30 | 講義：季節を感じて体と心をととのえよう ミーティング | 講師：上村里沙（大学院博士前期課程） 南村、中村 福間、上村、小西、門前 |
| 第4回 | 2023.3.3 (金) 14:00- 15:00 | もしもの時にそなえる～これからの人生の過ごし方を一緒に考えてみませんか～？ 「もしバナゲーム」・ミーティング | 南村、簗持、中村、太田 福間、小西、門前 |



「ホット&ハートの会」の案内ちらし

3. 活動結果

1) 参加者数

| 開催回 | 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 |
|----------|-----|-----|-----|---------|
| 参加者数 (人) | 9 | 11 | 8 | 14 (予定) |

2) 各回の状況

以下に、各会の状況について記す。第4回目については、2023年3月3日に、「もしもの時にそなえる～人生の過ごし方を一緒に考えてみませんか～」と題して、「もしバナゲーム」をしながら、参加者個人が人生において大切な「価値観」や自分自身の「あり方」について考える予定である。

(1) 第1回：オーラルフレイルを予防するために、皆で語り合おう

①解説・ミーティング：「オーラルフレイルを予防するために、皆で語り合おう」

講師：太田佳織

オーラルフレイルについて、「近年マスクの着用により会話が減ったことでオーラルフレイルのリスクがますます高まっていること」「大きな声を出すことがなくなり、表情筋の衰え、口角が下がってしまっていること」「マスク生活が2年以上となり、初対面からずっと顔を知らずに関わる人も多いこと」「マスク生活で他者に対して口臭を気にする機会が減ったので、口腔ケアに対する意識が低下している人もいること」「意図的に大きな声を出した

り、表情筋を使うようなことをしたりしているかどうか」「歯間ブラシなど実施している口腔ケア」等について簡潔に解説後、質疑応答を含め、参加者同士で、自由なテーマでミーティングを実施した。今回のミーティングの目的の一つは、テーマ「オーラルフレイルを予防する」目的もあり、皆で声を出して、積極的に会話をするにであった。自己紹介を兼ねて参加者全員が自身や家族の近況を紹介し、コロナ禍での生活や趣味などについて自由に話し合った。参加者からの質問として、フレイルに関連した筋力低下を予防する食事内容についての質問等があった。

(2) 第2回：「腸活」って何？一緒に考えてみませんか？

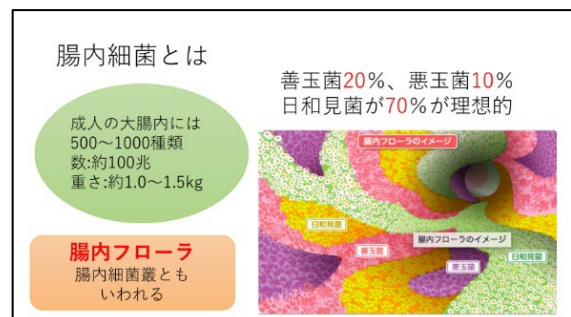
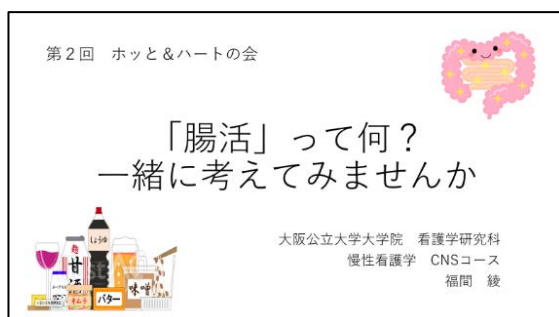
①講義：「腸活」って何？一緒に考えてみませんか？

講師：福間綾（大学院看護学研究科 博士前期課程）

講義内容は、「腸活って？」「腸内細菌について」「腸脳相関って？」「腸内環境を整える食べ物」「明日からできる腸活」であり、腸活の意義や方法について学んだ。途中、腸内年齢チェックリストを使用して、参加者の腸内年齢を測定した。講義後、参加者個人の腸活について行っていることや気を付けていることについて情報交換を行った。「朝食に免疫機能をたかめる食品、ヨーグルト、チーズなどを摂取するようにしている」「暴飲暴食をさけて、腹八分目」「朝食後の腹部マッサージ」「便秘予防のために適切な脂肪分摂取をする」「運動をする」などについて話された。

②ミーティング

ミーティングでは自己紹介を兼ねて参加者全員が自身や家族の近況、趣味などについて、情報交換を行った。「フェイスブックやYouTube へのコメント」「料理や食生活」「運動不足になりがちな生活」などについて、自由に話をし、それぞれの意見等が述べられた。



第2回「ホット&ハートの会」資料表紙・内容一部

(3) 第3回：季節を感じて、心と体をととのえよう

①講義：季節を感じて、心と体をととのえよう

講師：上村里沙（大学院看護学研究科 博士前期課程）

講義内容は、「健康とは」「健康であるためには」「心と体のバランス」「中医学での健康観：陰陽論」「中医学での健康観：五行論」「あなたの心と体は今どうでしょうか？」「季節を感じて過ごすことができますか？」「食事を通して心と体を整える」「11月から1月の冬の食養生」「最近、季節を感じることで出来事はありましたか？」についてであった。質疑応答では、「寒涼のなかにバナナがあったが、バナナは毎日食べているため、よいのか？」などの質問があった。

②ミーティング

参加者で、季節を感じる時はどのようなときであるかについて、それぞれの意見を共有した。「7月生まれのため、一番好きなのは夏。冬は体の動きが悪くなるのでつらい」「医食同源。食べることは、不可欠であるため、健康にいいものを食べたいと思う。フレイルに対する食事療法についても教えていただき、とてもありがたい」「車の運転中の外の風。風を感じるとリフレッシュできる」「マスクを外して走り始め、金木犀の香りがした。数年ぶりに匂いを感じることができ、匂いで季節を感じていたんだなあ気づくことができた」「公園の紅葉の変化を感じる。太陽のもとにいと、生きているなど実感する」「服が夏物から冬物に変わり、インナーも夏物だと寒くなってきた。天気も不安定で、服装に気をつかう」「地元のお祭り。地元特有の押し寿司を作る。それを食べると秋を感じる」「食べ物で季節を感じる。コンビニのおでんとか。お祭りやハレの日の食事でも季節のうつろいを感じる」「好きな季節は春。桜が咲いて、新学期も始まって、誕生日も4月末の影響もあるかも」などの私見が話された。また、地元のお祭りや季節の神事やイベントの話、自分の好きな季節とその理由、季節を感じる匂いや最近の気象の変化などの話も共有した。



第3回「ホッと&ハートの会」資料表紙・内容一部

4. 総括

今年度も COVID-19 感染拡大防止への対策のため、第1回～第3回については、WEB 上での会開催となった（4回目は報告書作成時点では対面開催を予定）。昨年度に引き続き、多くの会員にとって WEB 開催での参加は、参加者のインターネット環境や機器の問題だけでなく、使用方法などの知識が必要であるため、高齢者が多い当会の会員の参加は難しく、一部の限られた参加者での会の開催となった。今後どのように参加を促し、支援していくかという課題は残ったままであるが、一方で、遠方に居住されている方の参加を容易にするメリットもあった。慢性病患者とその家族、単身で外出や他者との交流の機会が少なくなりがちで、COVID-19 感染リスクから自粛せざるを得ないような療養者の交流の場、健康や療養生活を見直す場となっており、少人数での参加者ではあるが、継続する意義は大きいと考える。ICT の活用もしながら、参加者と運営側ともに無理のない事業計画を検討し継続できればと考える。

本学大学院生がプログラムの企画・運営に積極的に参画したことは、地域で慢性病を管理し生活している対象の理解や教育技法、セルフヘルプグループ支援のあり方についての実践的な学習の機会となった。大学院教育の場としても有意義であり、次年度も継続する意義はあると考える。今後の課題として、活動内容等の吟味と共に、他領域との共同開催なども含め、当会のあり方を検討していく。



令和4年度 地域における出前健康講座

根来佐由美 田中健太郎 安本理抄 大野志保 都筑千景

1. 活動目的

本活動の目的は住民の活動の場に出向き、身体計測や健康相談、健康教育を実施することにより、住民自身がコロナ渦も含めた健康状態について振り返る機会や社会資源の情報を提供することである。この活動を通じ、行政や他大学、地域住民組織と連携し、地区や住民組織の課題について考え、地域住民の健康の保持増進を目指す。他機関との情報交換を深めることで、大学の存在意義について広く周知できる機会となる。また、本活動は大学院生が健康相談や健康教育の企画・運営への参画を通して、地域で生活する住民理解を深め、社会生活を送るうえで必要となる社会資源の情報提供や健康増進を支援する学習の場ともなり、教育上の意義も大きい。

2. 活動内容

当初は新型コロナウイルス感染症の収束も視野に入れ、住民が集う場での出前健康講座（測定会や健康相談、健康教育、フェスタへの出展など）を複数回予定していたが、新型コロナウイルス感染症継続の影響により、高齢者向けの集いの場の活動休止やフェスタ自体の中止等が相次ぎ、従来実施していた一般住民を対象とした活動は実施できなかった。しかし、前年度に企画し延期となっていた高齢者向けサロン活動等に従事する住民スタッフへの健康教育は実施することができた。

また、今年度新たに大阪市阿倍野区での活動として、高齢者の閉じこもりなどの地域課題に対し、同地区の地域福祉コーディネーターらと話し合いの場を持つことができ、地域住民の健康の保持増進に向けた取り組みについて検討することができた。

1) 羽曳野市での取り組み

高齢者支援の担い手への支援を視野に入れて大学近隣の羽曳が丘校区にある住民組織（NPO 団体「羽曳が丘 E&L」と住民が主体となって高齢者のデイサービスを行っている「ゆうゆうクラブを支える会」）のスタッフを対象とした健康教育（懇話会）を実施した。各住民組織のスタッフはこれまで高齢者の見守りや介護予防を目的とした活動を活発に行っているものの、自身の高齢化に伴う今後の活動への不安や世代交代についての悩みを抱えながら活動を続けている現状にあった。

(1) 健康教育（懇話会）の実施

日時と場所：令和4年6月25日（土）、羽曳が丘第2集会所

当日参加者：教員（都筑、田中、根来）、大学院生（M1、2 計4名）

テーマ：地域と保健師でつながる社会的ネットワークの中で高齢者のくらしを支える

目的：羽曳が丘E&L及びゆうゆうクラブを支える会の方々が他市のケースを知ることやディスカッションを通じて自分たちの行う地域活動の意義を振り返り、今後の課題を検討し課題解決に向けた保健師との協働の意義を再確認する。

- 目標：①羽曳野市と他市の高齢者保健に関して比較した統計データを知ること、両市の共通点や相違点について考察し、羽曳野市の高齢者保健の現状を理解できる。
②他市の高齢者の孤立予防に向けた互助や公助の取り組みへの理解を通じて、自分たちの地域活動の意義と課題を振り返ることができる。
③他市保健師によるひとり暮らし高齢者へ支援事例を知ること、保健師の果たす役割と保健師と地域住民の協働の意義について考察できる。
④説明後のディスカッションを通じて、メンバー各々の日頃から抱えている地域活動への思いや課題を共有することができる。

流れ：

- ① 他市の統計データや保健師と住民組織団体との協働の実際について情報提供



- ② 参加者との意見交換（地域活動の振り返り）

- ・これまでの活動内容
- ・活動継続のための課題
- ・課題解決案等



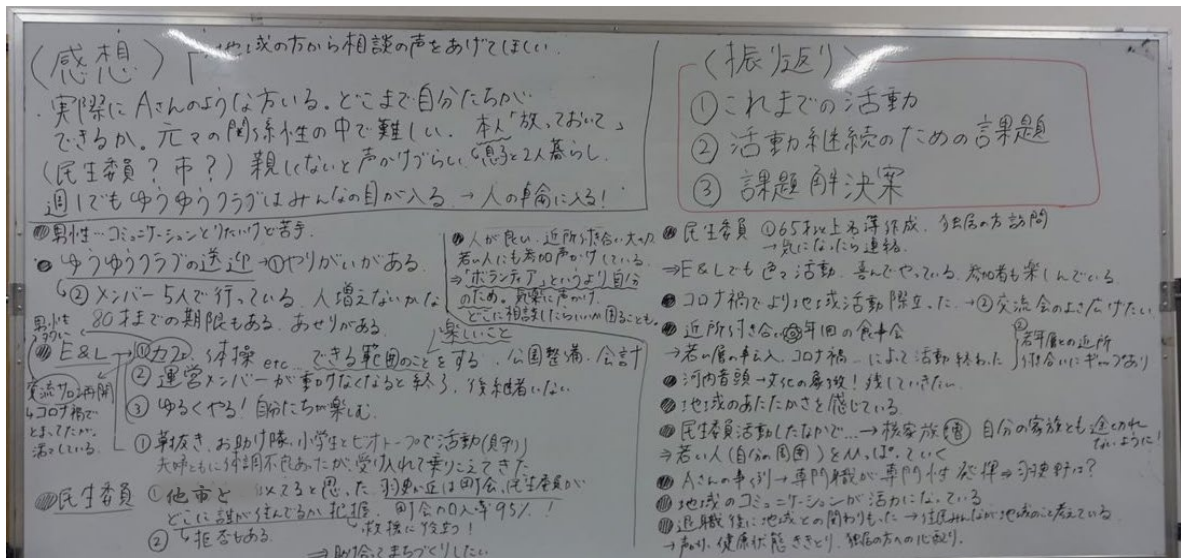
(2) 結果

① 参加者の概要

参加者は17名（男性7名、女性10名）であり、年齢は60～80歳代であった。NPOの活動やデイサービスのボランティアに加えて、民生委員や町内役員を兼務している人や夫婦で活動している人も複数いた。

② 参加者の意見

- ・羽曳が丘と同じような地域の情報が知れてよかった。
- ・自分たちの活動は後継者が少ないのが課題だが、自分たちができることをできる範囲で楽しみながらゆるく続けていきたい。
- ・自分たちが住んでいる地域には強みがあり、地域のあたたかさを感じている。若年層の方との付き合いや独居の方とのつながりを大切にしていきたい。
- ・今回の意見交換を通じて、他の人の前向きな思いや考えを知るいい機会になった。等



- ・意見交換のきっかけとしてもらえるよう、冒頭では羽曳野市羽曳が丘と特徴が似ている他市の活動について説明した。参加者に人口動態の数字を覚えてもらったことで、両市の高齢者保健への関心喚起につながったと考える。
- ・冒頭の説明後の質疑応答の場面では、自分たちの活動においても今後保健師との協働を示唆する発言が出ていたことから、保健師の果たす役割と保健師と地域住民の協働の意義について理解するきっかけにつながったと考える。
- ・最後の意見交換の場面では、自分たちの活動の意義や課題、今後の抱負について活発な意見が出ていた。参加者全員がそれぞれ、地域への強い愛着、地域活動の楽しさや意義、地域で巡り合う課題や解決案を率直に話すことができ、課題や解決案の共有につながり、終了後の参加者の感想や表情から参加者は概ね満足されていたと考える。



2) 大阪市での取り組み

(1) 地域課題に対する意見交換の実施

日時と場所：令和5年2月8日（水） あべのマルシェ商店街

当日参加者：田中（教員）、金塚地域長寿会会長、地域福祉コーディネーター、訪問看護師等

テーマ：地域課題に対する意見交換と今後の取り組みについて

目的：阿倍野区金塚地区における地域課題について意見交換を行い、課題解決に向けた取り組みを検討すること。

目標：①2016年5月に高齢者の買い物支援や閉じこもり予防等を目的に始まった金塚ミニマーケットの現状について話し合いを行い、地域の課題を共通することができる。

②話し合いの結果を踏まえ今後の方向性について検討することができる。

意見交換の概要：

- ・ 2019年12月以降、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、高齢者の外出頻度は減っていると感じる。実際、ミニマーケットに来る高齢者の数も減っている印象を受け、閉じこもりがちな高齢者は増加していることが懸念される。
- ・ 1976年に始まった天王寺駅周辺の再開発事業により、金塚地区には20棟の高層マンションが建ち並ぶことになり、当時20歳代で入居した人たちが高齢者となる中、どのマンションにどのくらいの高齢者がいるのかは把握できていない。
- ・ 過去にマンションに暮らす高齢者が孤独死する事案も発生しており、地区の民生委員や福祉関係者、自治体等を巻き込んだ話し合いの場が必要なのではないか。
- ・ 今後は、3月上旬～中旬をめどに、まずは上記関係者に声掛けを行い、地域の現状や課題について情報共有を行い、その方策について検討していくこととする。



3. 評価と今後の課題

本年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、コロナ禍前に実施していた測定会等の活動は概ね中止となった。しかしながら、このコロナ渦において、大学にできることは何かを模索し、NPO 法人等地域住民の方と相談しながら活動を検討した。今年度は高齢者支援の活動の担い手となるスタッフへの支援に方向転換することでスタッフや地域の健康増進に寄与することができたと考える。

また、大阪市での取り組みでは、高齢者の閉じこもりなどの地域課題に対し、関係職種と話し合いを行うことができた。今後も継続的な話し合いの場を持つことになり、地域住民の健康や暮らしを支えるうえでも重要な一歩になったのではないかと考える。今後は関係職種や自治体等との意見交換を通じて、地域住民の健康の保持増進に向け、具体的な方策に向けて検討していくとともに、学生がどのような形で地域に関わることができるのかについても併せて議論していく必要があると考える。

最後に本活動にご協力いただきました NPO 法人や地域住民の皆様、本学学生の皆様等に深く感謝申し上げます。また、看護実践研究センタープロジェクト活動助成につきまして、心より御礼申し上げます。

暮らしの保健室における住民育成活動

深山華織 三輪恭子（看護実践科学領域 生活支援看護学分野 在宅看護学）

中川智恵 山本初美（博士前期課程 CNS コース 1 年）

1. 活動目的

人口減少・超高齢多死社会を迎え、様々な慢性疾患や貧困などの多重課題をもつ住民が増加するなか、対象・機能別に整備された公的支援の限界が顕在化している。限りある社会資源を有効に活用し、地域特性や住民ニーズに合わせた事業や複合的な課題にも対応できる柔軟なサービスが求められており、厚生労働省も住民や地域の多様な主体が参画する地域共生社会の実現に向けた改革を進めている。

看護においては、近年、既存の制度や枠組みに囚われずに、地域の相談窓口や交流スペース、訪問看護ステーション等を基盤に中長期的に住民と関わり、パートナーシップを形成しながら、その専門性や知識を活かした柔軟な活動を展開する看護職の活動が注目されている。

今回、地域において複数の介護事業を運営する事業所の住民交流スペースの立ち上げ・企画に参画するとともに、「暮らしの保健室」を開催し住民の健康増進にむけた活動を行うこととした。

2. 活動内容

1) 「暮らしの保健室」活動に至るまでの経緯

羽曳野市の羽曳が丘三丁目商店街に位置し、介護事業を展開している山勝ライブラリ (<https://www.yamakatsu-library.com/>) が運営主体となる新しい住民交流スペースの立ち上げ・企画に参画し、地域の活性化に向けた支援を行うこととなった。

山勝ライブラリが 2017 年に開設したカフェ「FIKA 三丁目」は、健康や暮らしに関する窓口を必要とする高齢者を中心とした住民同士の交流場所となっている。2022 年 9 月に、「FIKA 三丁目」の“となり”の店舗が閉店することに伴い、レンタルスペース「ライブラリとなり」が開設され、本活動に適した場所であると考え、活動拠点とすることとした。これらの経緯や住民の“となり”に寄り添える場所になるよう思いを込めて、本「暮らしの保健室」を“となりの保健室”と命名した。


また、 のロゴを用いて広報活動をおこなうこととなった。

図 1 となりの保健室ロゴ

2) 参加者の募集方法

となりの保健室への参加者の募集は、カフェ「FIKA 三丁目」にチラシを置き、参加申込書に記名してもらった。活動場所のスペース上、10 名を定員とした。

3) 活動スケジュール

2022 年 8 月 活動内容などの打ち合わせ

(参加者：山勝ライブラリ代表取締役 山下勝巳様、三輪、深山)

2022年9～12月 第4木曜日 計4回 となりの保健室の実施

2023年1月 活動の振り返りと今後の活動に関する打ち合わせ(参加者:山勝ライブラリ代表取締役 山下勝巳様、四天王寺大学人間福祉学専攻教授、地域包括支援センター保健師・社会福祉士、訪問看護師、認知症専門鍼灸師、福祉用具専門相談員、三輪、深山)


4) 実施内容

9月～12月の第4木曜に1時間、となりの保健室を開催した。テーマと内容は、健康や暮らしに関する話題を提供し、参加者同士が困りごとや悩みを話し合えるように構成した(表1、図2)。

コロナ感染対策上、参加者には体温測定と症状確認を行い、手指消毒とマスク着用のうえ、参加してもらった。

表1 となりの保健室の活動実施内容

| 回 | 開催日程 | テーマ・主な内容 | 話題提供者 |
|-----|----------------------|--|----------|
| 第1回 | 9月22日(木) 15時～16時 | テーマ:お医者さんの上手なかかりかた ➤ 知っておきたい! 今どきの医療のしくみ ➤ 医者にかかる10か条 ➤ セカンドオピニオンとは?? | 三輪 |
| 第2回 | 10月27日(木) 14時～15時 | テーマ:もしものときの話 楽しく いっしょに しませんか? ➤ もしものときの話“人生会議”とは? ➤ もしバナゲームをやってみよう | 深山 |
| 第3回 | 11月24日(木) 14時～15時 | テーマ:体も心も健やかに 絶好腸な排便習慣 ➤ うんちが出るしくみ ➤ 便秘がもたらす影響 ➤ 下剤のはなし ➤ 気持ちのよい排便のためのポイント ➤ 排便チェック・体操とマッサージ | 中川 山本 |
| 第4回 | 12月22日(木) 14時～15時 | テーマ:不眠から富眠へ!～より良い眠りのため のお話～ ➤ あなたの睡眠チェック ➤ 眠りのしくみ ➤お薬のはなし ➤ 眠りの考え方のキホン ➤ 「不眠」を「富眠」に変えるヒント ➤ リラクゼーション法の伝授 | 中川 山本 |


となりの保健室 第1回
お医者さんの上手なかかりかた

羽曳が丘のみなさまをはじめまして、大阪公立大学羽曳野キャンパスの看護教員です。この度、「となり」にて、月1回程度の「となりの保健室」を開かせていただくことになりました。みなさまと身近な暮らしや健康のことなど、気軽にしゃべりしたり、気になることを話したりできればと思います。9月は、「お医者さんのかかりかた」がテーマです。賢い患者になるために…、いっしょにおしゃべりしませんか？

無料

＊日時 9月22日(木) 15:00～16:00
 ＊場所 となり(羽曳が丘3丁目5-38)
 ＊参加 どなたでも(先着10名様)
 ＊申込 FIKAにて、申込書にご記入ください


＊ 知っておきたい! 医療者のしくみ
 ＊ 医者にかかる10か条
 ＊ セカンドオピニオンとは??

健康相談もOKです!

どなたでも、お気軽にご参加ください

次回 10/27(木)

電話: 072-950-2932 (平日:10:00～16:00)
 お問い合わせ: 大阪公立大学大学院看護学研究科 在宅看護学 深山華織・三輪恭子


となりの保健室 第2回

もしものときの話し 一緒にしませんか?

楽しく

もしも、病気や介護が必要になったら…人生最後の日がくることになったら…どんなことを大事にしたいですか? 「縁起でもない話やけど、聞いてほしいわ～」 「ほかの人の話聞いてみたいわ～」 大歓迎です! どうぞお気軽にご参加ください。

＊カードゲームをしながら、おしゃべりします＊

無料

日時 10月27日(木) 14:00～15:00
 場所 となり(羽曳が丘3丁目5-38)
 参加 どなたでも(先着10名様)
 申込 FIKAにて、申込書にご記入ください

健康相談もお気軽にどうぞ! 第3回は11月24日です

お問い合わせ: 072-950-2932 (平日:10:00～16:00)
 大阪公立大学大学院看護学研究科 在宅看護学 深山華織・三輪恭子

第3回 となりの保健室
 体も心も健やかに **絶好腸な排便習慣**

日時 2022年11月24日(木) 14:00～15:00

第3回は、元気な腸をつくるためのお話です。みなさんは、排便に関するお困りごとはありませんか、排便にまつわるお話を中心にみなさんとおしゃべりできたらと思います。

- ・便秘がもたらす影響
- ・下剤のはなし
- ・元気な腸のつくりかた など

申し込み(先着10名様)
 FIKAにて、申込書にご記入ください

お問い合わせ
 電話: 072-950-2932 (平日10:00～16:00)
 大阪公立大学大学院看護学研究科 在宅看護学 深山華織・三輪恭子・山本初美・中川智恵

楽しくお話ししましょう。

場所 となり
 羽曳が丘3丁目5の38

次回 12月22日(木)

第4回 となりの保健室

不眠から富眠へ!
 ～より良い眠りのためのお話～

日時: 12月22日(木) 14:00～15:00
 場所: となり (羽曳が丘3丁目5の38)

今回のテーマは「睡眠」です。みなさんは眠れていますか? 眠れないことは、体にも心にも大きく影響しますよね。この機会にご自身の睡眠を振り返り、豊かな眠りに変えてみませんか?

- ♪ あなたの睡眠チェック
- ♪ 眠りのメカニズム
- ♪ 不眠のはなし
- ♪ お薬のつかい方 などなど…

＊申し込み(先着10名様)＊
FIKAにて、申込書にご記入ください

お問い合わせ
 電話: 072-950-2932 (平日10:00～16:00)
 大阪公立大学大学院看護学研究科 在宅看護学 深山華織・三輪恭子・山本初美・中川智恵

図 2

となりの保健室 第1回～第4回 ちらし

3. 活動結果

1) 参加者の状況

各回に10～11名が参加した。活動当初は、カフェ「FIKA 三丁目」の利用者が中心であったが、回数を重ねるたびに、テーマに対する関心や不安がある地域住民に声かけられ、参加につながり、「FIKA 三丁目」の利用者以外の者が増えていった。

参加者の年齢は80代が最も多く(図3)、男性よりも女性の方が多かった(図4)。

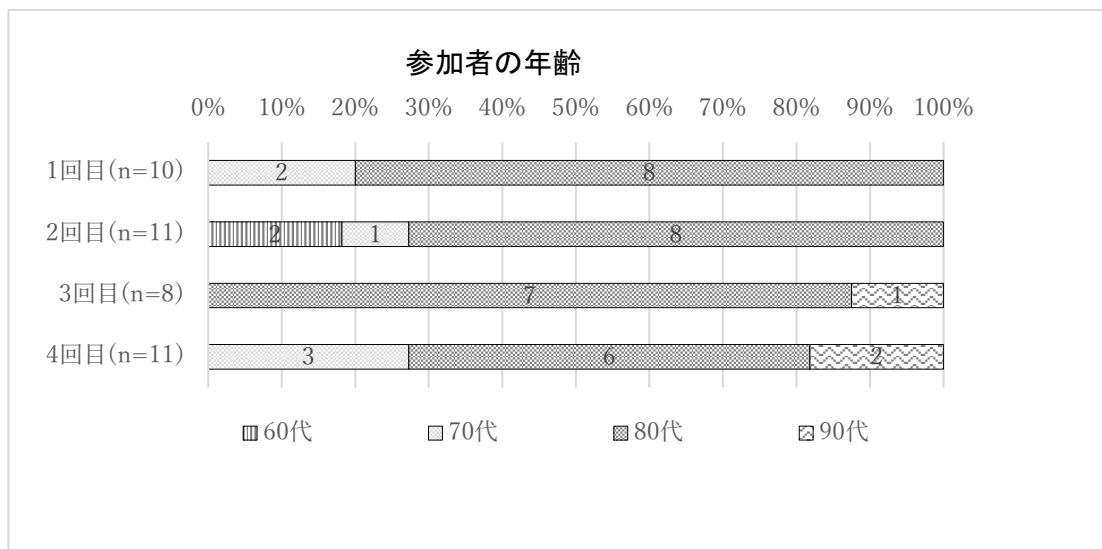


図3 参加者の年齢

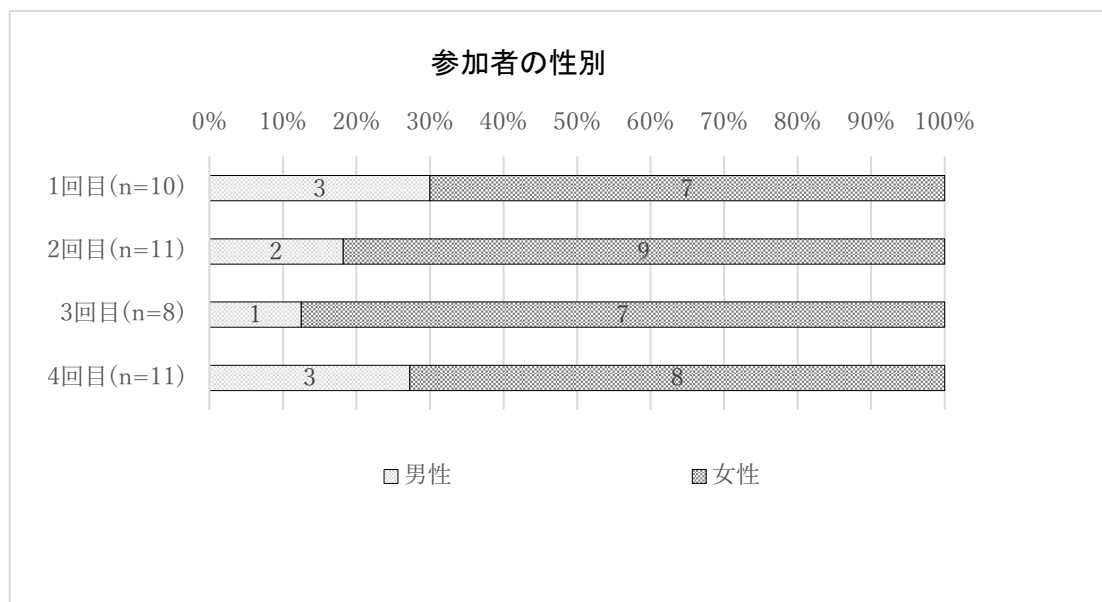


図4 参加者の性別

2) となりの保健室に対する意見

参加者に行ったアンケートの結果から、各回の内容は「よくわかった」「まあまあわかった」と回答した者が約90%であった(図5)。となりの保健室への満足度は「とても良かった」「まあまあ良かった」と回答した者が100%であった(図6)。

自由記述から、参加者同士の交流を楽しみ、話題について関心や理解を深める機会となったことがわかった(表2)。今後のとなりの保健室の要望として、健康や暮らしに関する幅広い内容が挙げられた(表3)。

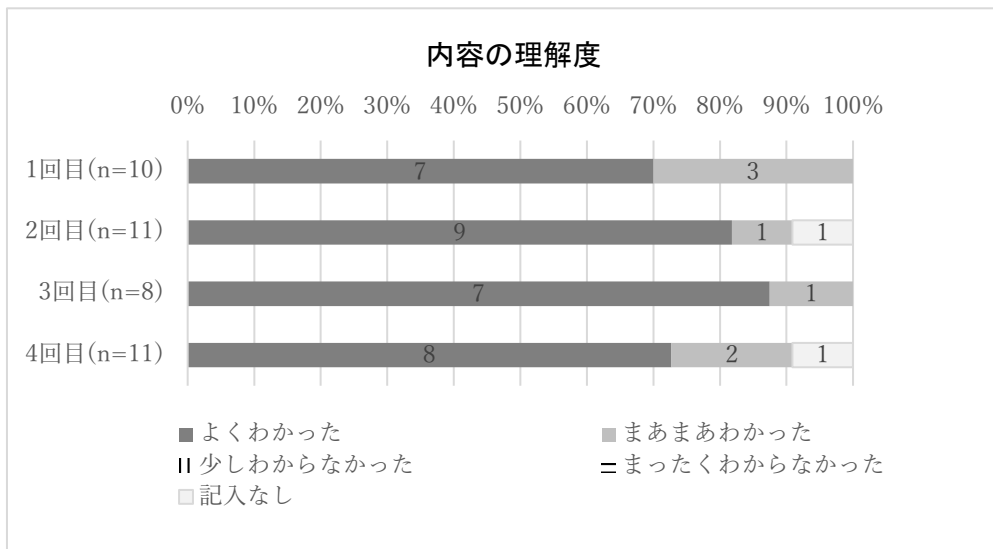


図5 内容の理解度

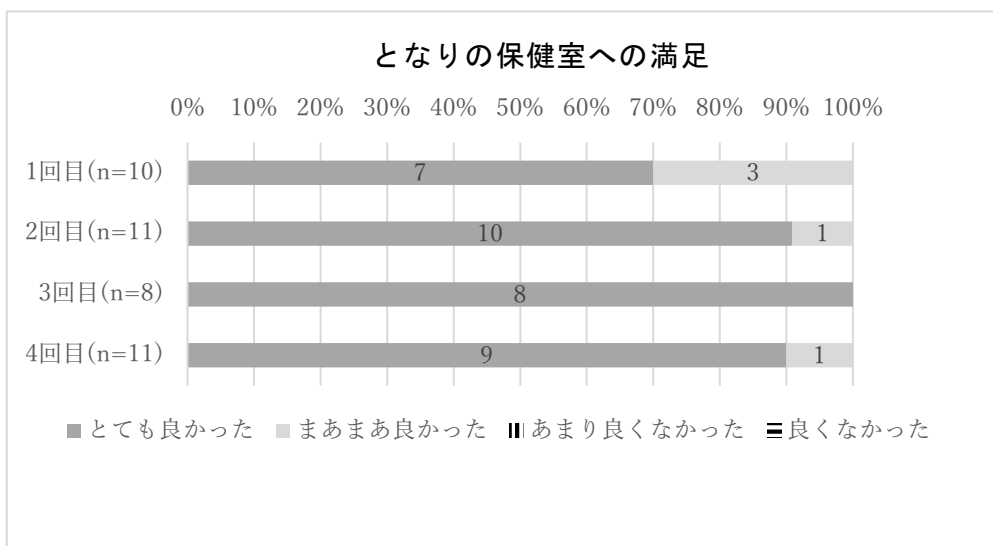


図6 となりの保健室への満足度

表2 となりの保健室への感想（自由記述から一部抜粋）

- ・共通の話しが気軽に話せた
- ・多くの人達のお話を聞く事を楽しみにしています。
- ・身近な問題で勉強になった。
- ・日頃なんとなく思っている事が現実にくるお話を聞いて勉強になりました。楽しいひとときでした。
- ・ふだんあまり考えた事がないので、改めて内容を知ることができた

表3 内容の要望（自由記述から一部抜粋）

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・具体的な終活の仕方、リストアップ等教えてほしい・腰痛に関する話題が欲しい・アレルギーについても話し合っ欲しい・認知症に関わる話をしてほしい・血圧の話をしてもらいたい・軽い筋力を付ける体操 |
|---|

4. となりの保健室 活動の評価

今回、地域において複数の介護事業を運営する事業所の住民交流スペースの立ち上げ・企画に参画するとともに、「暮らしの保健室」として“となりの保健室”を4回開催し、住民の健康増進にむけた活動を行うこととした。

各回参加者は10～11名で、80代の参加者が多く、現在の健康に関する懸念だけでなく、将来の健康や介護、生活に対する不安があることが示唆された。参加者は、カフェの利用者からテーマに関する不安を抱える地域住民へと声をかけられ、参加につながったケースもあり、となりの保健室を拠点に住民同士の交流の活性化や健康増進の一助になったと考えられる。参加者の感想や理解度から、健康や暮らしのニーズに合った内容が提供できたと考える。

また、博士前期課程 CNS コースの院生にとって、となりの保健室のテーマ選定や内容の検討、話題提供を計画・実施するといった一連の流れを経験し、在宅看護専門看護師にとって必要な要素を学習できる貴重な機会となった。

5. となりの保健室 今後の課題と展望

本活動は、大学教員や院生の本来の業務をしながらの活動であるため、実施できる回数や資金には限界がある。参加者のとなりの保健室への要望は多岐にわたっており、健康や暮らしに関するニーズに応じた活動方法や実施場所、講師等を検討する必要がある。羽曳野市の公的機関や民間事業所、大学を巻き込み、長期的で持続可能な事業計画を立てていく。

今年度の広報は、運営主体のカフェの利用者に行っていたため、参加者は常連もしくは関係者であったが、地域住民に広く知ってもらえる方法を検討する必要がある。

謝辞

本活動にあたり、2022年度 大阪公立大学大学院看護学研究科 看護実践研究センター活動支援の助成をいただき、心より感謝申し上げます。

3. 国際学術研究推進部門**1) 研究報告**

- (1) 2022 年度タイ王国マヒドン大学ラマティボディ校との研究プロジェクト
COVID-19 ワクチンリテラシーとワクチン接種行動との関連

2022 年度タイ王国マヒドン大学ラマティボディ校との研究プロジェクト COVID-19 ワクチンリテラシーとワクチン接種行動との関連

志田京子 相原ひろみ 益加代子 喜田雅彦 中川祐一

1. プロジェクトの概要

2021 年より、(1) COVID-19 ワクチン（以下ワクチンとする）接種行動とワクチンに対する態度、意見、ワクチンリテラシーとの関連性（プロジェクト 1）、(2) 親のワクチンリテラシー、ワクチンに対する態度、意見と 5 歳以上 18 歳未満の子どもに対するワクチン接種行動との関連性についての調査（プロジェクト 2）を、Faculty of Medicine, Ramathibodi Hospital, Mahidol University の Dr. Wantana Maneesriwongul を研究リーダーとして共同研究プロジェクトを実施している。本プロジェクトは、国際交流協定校であるマヒドン大学からの申し入れであった（図 1）。日本、タイ、ベトナム、米国の成人を対象とした国際比較研究であり、日本および各国で収集したデータをタイに集約し、国ごとにその特徴を明らかにすることを目的としている。本プロジェクト実施にあたり、看護学研究科より研究助成を受けた。

2. 2021 年度プロジェクトの進行

1) 2021 年 9 月 研究メンバーの招集と役割分担

タイの研究チームは、Dr. Maneesriwongul の他、Dr. Visudtibhan, Dr. Butsing, Dr. Leelachalus, Dr. Kittipimpanon の 5 名であった。本学においては、基礎看護学教員である志田をリーダーとして、相原准教授、益准教授、感染看護学教員である喜田助教の 4 名で研究チームを構成した。主な役割として、プロジェクト 1 を喜田助教、プロジェクト 2 を益准教授、COVID-19 ワクチンリテラシー尺度（日本語版）の開発と検証を相原准教授が担うこととした。このワクチンリテラシー尺度は、イタリアの Biasio ら（2021）が開発したものであり、本プロジェクトで用いるコアな説明変数である。著者に連絡をとり、日本語版の作成許諾を得た。



MAHIDOL UNIVERSITY

Since 1888

25 October 2021

Professor Tanaka Kyoko
Dean, School of Nursing
College of Life, Environment, and Advanced Sciences
Osaka Prefecture University

Reference: Invitation for collaboration in research projects on COVID19

Dear Dean Tanaka Kyoko

This letter is a formal invitation for collaboration in two collaborative research projects on COVID19 that lead by Assoc.Prof.Dr.Wantana Maneesriwongul, Ramathibodi School of Nursing:

- 1. Trends analysis of COVID-19 vaccination, vaccine literacy, attitude towards COVID-19 vaccines, intention to vaccinate against COVID-19, and factors predicting intention and decision to get COVID-19 vaccination (COA. MURA2021/381)
2. Trends analysis of child COVID-19 vaccination, parents' COVID-19 vaccine literacy, attitudes towards COVID-19 vaccine, and intentions to vaccinate their children against COVID-19 and factors predicting intention to vaccinate their children against COVID-19 (In process)

While the first project has been approved by the Human Research Ethics Committee, Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital, Mahidol University, please find the IRB's certificate as enclosed. The second project is in preparation process for the IRB submission.

Our faculty members who join the team will provide in-kind contribution to support the protocol development, tool development/translation, data management & analysis, as these two research projects have been set up in a timely period with no funding. We hope that our faculty members and yours will have fruitful collaborations towards productive outcomes, such as joint publications in near future.

We are looking forward to establishing this research collaboration with your institution.

Sincerely yours,

Signature of Poolsuk Janepanish Visudtibhan, RN, PhD
Poolsuk Janepanish Visudtibhan, RN, PhD
Director, School of Nursing,
Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital, Mahidol University



Human Research Ethics Committee, Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital, Mahidol University
270 Rama 4 Rd. Phayatai Ratchathewi Bangkok 10400 Tel.66(0)2012176, 2011644, 2010388
Website: https://med.mahidol.ac.th/research/ethics
E-mail: raec.mahidol@gmail.com

COA. MURA2021/381
Ref.1415

Table with 2 columns: Field (e.g., New Title of Project, Main Title, Type of Review) and Content (e.g., Trends analysis of COVID-19 vaccination, expedited review, list of investigators).

Institutional Review Boards in Mahidol University are in full compliance with International Guidelines for Human Research Protection such as Declaration of Helsinki, The Belmont Report, CIOMS Guidelines and the International Conference on Harmonization in Good Clinical Practice (ICH-GCP)

Date of Approval of Amendment: October 15, 2021

図 1 : マヒドン大学との国際共同研究のための MOU

2) 2021年10月 質問項目日本語訳の作成

ワクチンリテラシー尺度、ワクチンに対する態度や意見、個人属性など、Dr. Maneesriwongul が作成した質問項目（英語版）、Biasio ら（2021）が作成した COVID-19 vaccine literacy scale を、バックトランスレーションを実施して日本語版を作成した。まず、内容の不明な点について、タイの研究者と Zoom ミーティングを実施し、質問項目の意味内容の確認をしながら翻訳をすすめた。プロジェクト1における質問項目数は個人特性10項目、ワクチン接種状況7項目、ワクチン接種躊躇理由18項目、ワクチン接種忌避理由11項目、ワクチンに対する態度10項目、ワクチンリテラシー尺度12項目、ワクチンに対する考え10項目、一般的なワクチンに対する考え5項目であった。プロジェクト2における質問項目数は個人特性11項目、子どものワクチン接種状況4項目、（子どもに）ワクチンを接種させる意思2項目、ワクチン接種躊躇理由16項目、ワクチン接種忌避理由13項目、ワクチンリテラシー尺度12項目、ワクチンに対する考え10項目、一般的なワクチンに対する考え5項目であった。

翻訳版尺度の作成は、患者報告式アウトカム尺度の質を担保するための翻訳ガイドラインである ISPOR(International Society for Pharmacoeconomics and Outcomes Research)タスクフォースによるガイドラインで推奨されている手続き(稲田, 2015)にしたがい、まず研究チームで日本語の質問項目原案を作成し、英語のネイティブスピーカーで学術的論文の校正に熟練している者に日本語原案を英語に翻訳してもらい、意味内容の変更がないか確認し、尺度開発者の原作者に確認してもらい修正を行った。

3) 2021年12月 倫理審査申請

ウェブ調査になることから、倫理上の配慮やバイアスの取り扱い等について学習を行い、倫理審査申請書を作成した。倫理申請承認番号は、プロジェクト1は2021-45、プロジェクト2は2021-46であった。

4) 2022年2月 調査開始

ウェブ上に Google フォームを用いて調査画面(図2)を作成し、SNS や自治体へのチラシで協力を呼び掛ける(図3および図4)とともに、(株)クロス・マーケティングにパネル調査を依頼した。当社は488万人のパネルを有している。目標サンプル数はプロジェクト1、およびプロジェクト2において各1200であった。回収数は、プロジェクト1では1256、プロジェクト2では2200であった。

5) 2022年3月 分析～英語論文作成

データ・クリーニングを実施し、プロジェクト1および2に関するデータをタイの研究リーダーに送付した。

プロジェクト1およびプロジェクト2、COVID-19 ワクチンリテラシー尺度（日本語版）の信頼性・妥当性の検証を実施し、論文にまとめた。

「日本におけるCOVID-19ワクチン接種の動向、ワクチンリテラシー、態度、意図、COVID-19ワクチン接種の関連因子」研究へのご協力をお願い

研究テーマ：日本におけるCOVID-19ワクチン接種の動向、ワクチンリテラシー、態度、意図、COVID-19ワクチン接種への関連因子について

本研究を行い、日本人のCOVID-19ワクチン接種の動向、ワクチンリテラシー※、態度、意図について明らかにし、ワクチン接種に関連する因子を検討することを目的としております。また、本研究で得られたデータはタイの共同研究者と共有し、国際比較を行う予定です。
※ワクチンリテラシーとは：ワクチン接種に関する必要な情報を読み取り、活用する能力のことを指します。

◇調査の概要は以下の通りです。

1. 調査時期

2021年12月～2022年3月

2. 調査対象者

18～85歳の日本人

3. 調査内容

①個人背景：居住地区、年齢、性別、最終学歴、婚姻状態、職業、経済状況、基礎疾患の有無、COVID-19の情報源

② COVID-19ワクチン接種の有無やその理由、副反応の有無

③COVID-19ワクチンに対する態度：COVID-19ワクチンに対する態度や考えを問う10項目です。これらの回答形式は7段階で行います。

④COVID-19 ワクチンリテラシー：心理測定尺度「COVID-19ワクチンリテラシー尺度」の日本語版を用います。12の質問項目があり、回答形式は4段階で行います。

⑤COVID-19ワクチンやその他のワクチンに関する考え：COVID-19ワクチン接種に関する意見を問う9項目とその他のワクチン接種に関する経験・考えを問う5項目です。その他のワクチン接種に関する2項目に対する回答形式は4段階で行い、その他12項目の回答形式は2段階で行います。

⑥修正版Perceived Health Competence Scale(PHCS)：健康管理に関する能力指標を測定する8項目です。回答形式は5段階で行います。

図2 Google フォームアンケートの一部（プロジェクト1より）

<https://docs.google.com/forms/d/1hrFnk0HcXRC4AeC5K687ritsylnrPZxE2xv3vHpotxQ/edit>

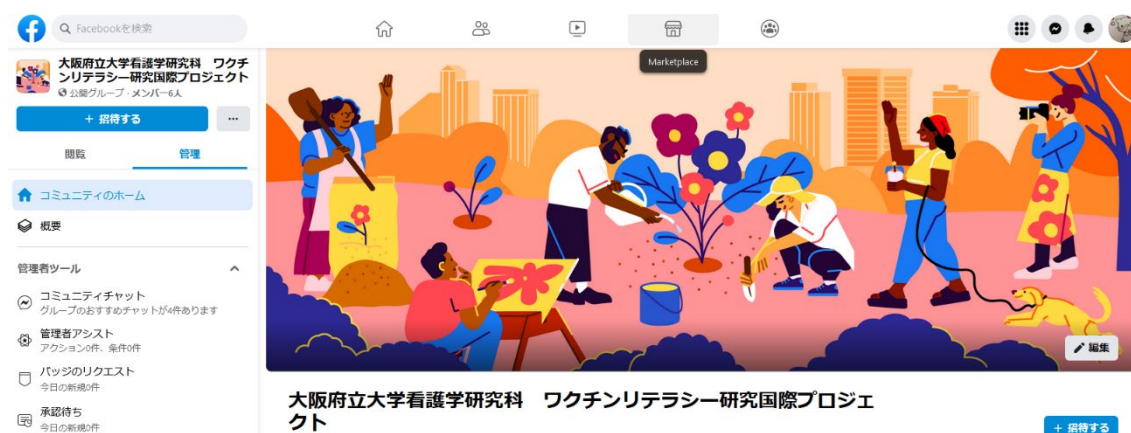


図3 研究協力呼びかけのためのフェイスブック画面

<https://www.facebook.com/groups/1518416211847813>

プロジェクト1

コロナワクチン接種に関するアンケート調査協力をお願い

現在全国民に向けてワクチン接種が進んでいます。このアンケートは、日本人のワクチン接種に関する意識調査とその予測因子を調べるために行います。そして、その結果をタイ王国で得られたデータと比較をします。より多くの方のご協力を歓迎します。スマホから簡単に回答いただけます。匿名回答であり、皆様の個人情報（氏名や電話番号など）は守られますのでご安心ください。

対象者：18歳から85歳の男性・女性どなたでも

方法：Google Formによる選択回答
右下のQRコードよりアクセスしてください

入力期間：2021年〇月〇日から2022年〇月〇日

大阪府立大学看護学研究科
ワクチンリテラシー研究国際プロジェクト 担当窓口： QRコード

プロジェクト2

お子様へのコロナワクチン接種に関する親御様へのアンケート調査協力をお願い

現在子どもたちへのワクチン接種が始まっています。このアンケートは、12歳から18歳のお子様をもつ親の方のワクチン接種に関する意識調査とその予測因子を調べるために行います。そして、その結果をタイ王国で得られたデータと比較をします。より多くの方のご協力を歓迎します。スマホから簡単に回答いただけます。プロジェクト1に協力してくださった方で以下の条件に当てはまる方はご協力いただけます。匿名回答であり、皆様の個人情報（氏名や電話番号など）は守られますのでご安心ください。

対象者：12歳から18歳のお子様をお持ちの方 男性・女性どなたでも

方法：Google Formによる選択回答
右下のQRコードよりアクセスしてください

入力期間：2021年〇月〇日から2022年〇月〇日

大阪府立大学看護学研究科
ワクチンリテラシー研究国際プロジェクト 担当窓口： QRコード

facebook <https://www.facebook.com/groups/1518416211847813>

図4：自治体への研究協力呼びかけのためのチラシ

3. 研究結果の公表

1) COVID-19 ワクチンリテラシー尺度（日本語版）の信頼性・妥当性の検証,

Verification of the reliability and validity of the Japanese version of the COVID-19 Vaccine Literacy Scale, CA:Hiromi Aibara.

2022年日本看護科学学会でポスター発表をしたのち、現在英語論文として投稿中である。2023年3月17日に実施する看護実践研究センター発表会で報告する予定である。

2) Relationship of COVID-19 Vaccination Behavior with Attitudes, Opinions, and Vaccine Literacy in Japan, CA:Masahiko Kita.

2023年EAFONS2023でポスター発表したのち、現在英語論文として投稿中である。

3) COVID-19 Vaccine Literacy, Attitudes, and Factors Associated with Child Vaccination Behavior of Parents With 5- to 16-year-old Children, CA: Eki Kayoko

2023年EAFONS2023でポスター発表したのち、英語論文として投稿予定である。

また、2023年3月17日に実施する看護実践研究センター報告会で報告する予定である。

4. 2022年度の取り組み

今年度は以下の2つのテーマで継続研究を企画し、看護実践研究センターの国際学術研究部門の研究助成を得た。また、子どものワクチン接種をテーマにした研究となるため、小児看護学を専門とする教員である中山祐一講師がメンバー加入した。両研究結果

はタイの研究チームと結果を共有し、ディスカッションしてまとめていく予定である。

【プロジェクト3】

親の子どもへの COVID-19 ワクチン接種奨励行動、忌避行動に関連する因子に関する医療専門職と非専門職間の比較（担当：志田京子）

【プロジェクト4】

子どもへの COVID-19 ワクチン接種の動向とワクチンリテラシー、態度、意図および COVID-19 ワクチン接種に関連する因子の検討（縦断調査）（担当：中山祐一）

5. 2022年度プロジェクトの進行

1) 2022年11月 調査項目の検討

2022年2月に実施した調査項目について再検討を行った。質問項目はプロジェクト2の縦断調査を実施することより変更は加えなかった。ただし、COVID-19 ワクチンリテラシー尺度は、当初は12項目であったが、日本版の検証を実施した結果10項目が適切と判断されたため、10項目で構成した。また、プロジェクト2では有する子ども全員の接種状況について確認したが、今回は18歳未満の長子に限定することとした。

2) 2022年12月 研究倫理 審査申請書の提出

倫理審査承認番号は2022-23であった。

3) 2023年2月 調査開始

自治体へのチラシやSNS等を用いず、(株)クロス・マーケティングによるパネル調査のみとし、目標サンプル数を1200とした。現在調査中である。

6. 今後の課題

プロジェクト1～4までの結果をまとめ、タイの共同研究者と情報共有を行うと共に英語論文として公開していく。

参考文献

Biasio, J.R., Bonaccorci, G., Lorini, C., & Pecorelli, S. (2021) Italian Adults' Likelihood of Getting COVID-19 Vaccine: A Second Online Survey. *Vaccines*, 9(3), 268.

稲田尚子. (2015). 尺度翻訳に関する基本指針. *行動療法研究*, 41(2), 117-125.

Ⅱ.

運営委員会活動

1. 闘病記文庫
2. 広報活動
3. 看護実践研究センター運営委員会活動報告
4. 会計報告

1. 闘病記文庫

闘病記文庫【さくらんぼ】は、大阪公立大学羽曳野図書館センター内に開設している。疾患別に分類されており、2023年2月現在、約260疾患、1900冊程度の蔵書となった。闘病記には、闘病する人自身や家族が病気にかかった時、どのような日々を送り、何を感じ考えたかの闘病体験が記されている。単なる医学的な知識としての情報だけでなく、人が病気を抱えた時にどう生きていくのかという貴重な情報源となる。医療や介護を学ぶ学生にとっては、病とともに生きる人を理解し、ケアを実践していくうえでの手がかりとなる。また、学内だけでなく、地域の方々が闘病記を活用できるように貸出も行っている。

| | 2022年度の利用状況 (2022/4/1～2023/1/31) | | 2021年度の利用状況 (2021/4/1～2022/2/28) | | 2020年度の利用状況 (2020/4/1～2020/12/31) | |
|-------|-------------------------------------|------|-------------------------------------|------|--------------------------------------|-----|
| 教員 | 2人 | 4冊 | 2人 | 3冊 | 1人 | 2冊 |
| 学域生 | 229人 | 548冊 | 202人 | 456冊 | 4人 | 28冊 |
| 大学院生 | 7人 | 8冊 | 3人 | 4冊 | 1人 | 9冊 |
| 非常勤職員 | 4人 | 30冊 | 4人 | 14冊 | 0人 | |
| 職員 | 0人 | 0冊 | 0人 | 0冊 | 0人 | |
| 卒業生 | 0人 | 0冊 | 1人 | 1冊 | 0人 | |
| 学外利用者 | 1人 | 1冊 | 0人 | 0冊 | 0人 | |
| 計 | 243人 | 591冊 | 212人 | 478冊 | 6人 | 39冊 |

※2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大による登校制限、学外利用者の制限あり

1) 2022年度の取り組み

(1) 新刊図書の購入

- ・看護実践研究センター運営委員会予算より、新刊図書63冊（88,310円）を購入した。配架は、2023年4月頃の予定である。

(2) 闘病記文庫の利用促進に向けた取り組み

- ・闘病記文庫利用促進を目的としたチラシの更新を行い、1000部印刷（5,246円）し、学生課・羽曳野図書館センター内の補充を行った。2023年度新入生（学部・大学院）に配布予定である。
- ・地域の方の利用を促進するため、羽曳野キャンパス周辺の14の病院および地域保健機関と、Licはびきの、市役所へチラシを送付し、施設内での配置を依頼した。
- ・2025年度キャンパス移転後の闘病記文庫の配下場所および管理について学術情報課と情報共有し、検討を開始した。

医療分野で専門職業人となりゆく学生が患者・家族の闘病記から得る学びは、実習や卒業後の臨床実践において重要な意味をもたらすと考える。継続した啓発活動を行うとともに、キャンパス移転に向けて準備を進めていく必要がある。

担当：畠山典子、井上敦子

ご存知ですか？

闘病記文庫【さくらんぼ】

皆さん、大阪公立大学羽曳野図書センターの闘病記文庫【さくらんぼ】をご存知ですか？

「闘病記」とは、病気や障害を抱えた人びととその家族が病気と闘った手記です。闘病記には、その人がどのように病気を乗り越えたのか、どのように障害とともに暮らしているのか、家族はどのような気持ちになり助けとなったのか、など日々の様子や気持ちが綴られています。

【さくらんぼ】では、毎年100冊ほど新しい本を整備し、現在、1900冊の蔵書があります。



Q&A

Q1. どこにあるの？

A1. 羽曳野図書センター2階にあるカウンターの手右にあります。

Q2. どうすれば利用できるの？

A2. 地域にお住まいの方も利用できます。お名前と現住所を確認できるもの（職員証・学生証・運転免許証・健康保険証など）をご持参のうえ羽曳野図書センターカウンターで所定の手続きを行ってください。闘病記文庫【さくらんぼ】の閲覧・複写・貸出などのサービスをご利用いただけます。

闘病記を読むことの意味



- * 病いとともに生きる人を広く理解することができる
- * 病いとともに生きる人とその家族の生活を想像したり理解したりすることにつながる
- * 生と死を考える機会となる
- * 自己をみつめる機会となる
- * 医療や介護を学ぶ学生にとっては、病いとともに生きる人を理解し、ケアを実践していく上での手がかりとなる

闘病記貸出冊数ベスト10

| 著者 | 書名 |
|--------------------|------------------------------------|
| 木藤亜也 | 1リットルの涙：難病と闘い続ける少女亜也の日記 |
| 木藤潮香 | いのちのハードル：「1リットルの涙」母の手記 |
| 小林和彦 | ボクには世界がこう見えていた：統合失調症闘病記 |
| 安武信吾, 安武千恵 安武はな | はなちゃんのみそ汁 |
| 児島美都子 | ガンの夫を自宅で看取る ：医療ソーシャルワーカーの介護日記から |
| 横山文野, 山口智久 | その夜、妻に最期のキスをした。 |
| 窪田陽子 | パパからのプレゼント |
| 岡田典子文；岡田美穂絵 | みぼりんのえくぼ |
| 向井亜紀 | 16週：あなたといた幸せな時間 |
| 高地哲夫 | ある末期がん患者のつぶやき |

このように病名別に配架されています。
ぜひ一度、羽曳野図書センター2階の
闘病記文庫【さくらんぼ】まで足を運んで
あなたの気になる本に出会ってください。



【羽曳野図書センター】
〒583-8555 大阪府羽曳野市はびきの3丁目7番30号
羽曳野キャンパスN棟 Tel 072-950-2956

開館スケジュール

| | | |
|-----|---------------------------------------|------------|
| 月～金 | 授業のある日 | 8時30分～21時 |
| | 授業のない日 | 9時～19時 |
| 土 | - | 10時30分～19時 |
| 休館日 | 日曜日・授業のない祝日、蔵書点検期間、年末年始、入学試験日、電気設備点検日 | |

<http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/center/cerry/>

 **大阪公立大学 看護学研究科**



2. 広報活動

看護実践研究センターの広報活動として、初年度に当たる令和4年度は、広報用パンフレットの作成、ホームページの作成を行った。

1) 広報用パンフレット

今年度は大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センターのパンフレットを参考に、本センターの活動理念を踏まえて新たに作成した。具体的には、本センターの趣旨を説明すると共に、活動の3本柱である「看護生涯学習支援」「府民健康支援」「国際・国内学術研究支援」に分け、其々の活動内容と担当者等を掲載した。さらに「看護生涯学習支援」「府民健康支援」については、興味のある方が参加しやすいように、活動日と問い合わせ先も掲載した。掲載内容については、担当教員に確認を依頼し、適宜追加修正した。完成したパンフレットは、ホームページにアップすると共に、担当教員に必要時ご活用いただくことを案内した。

2) ホームページ

本センターの活動を広く周知すべく、トップページには羽曳野キャンパスと阿倍野キャンパスの写真を掲載し、各部門で行われる活動内容について紹介した。また活動日が指定されている活動については、その都度内容を更新した。

<https://www.omu.ac.jp/nurs/institutions/>



2022年度看護実践研究センターパンフレット

文責：看護実践研究センター運営委員会 広報担当（精神行動ケア科学）河野 あゆみ

3. 看護実践研究センター運営委員会活動報告

| 日 時 | 活 動 | 概 要 |
|-------------------------|-----------------------------------|---|
| 4月19日(火) 15:00~16:40 | 第1回 運営委員会 出席者:15名 欠席者:2名 | <p>【議 事】</p> <p>1. <u>委員会規定について</u> 大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター規定及び同センター運営委員会規定について、資料に基づき三輪主任より説明がなされた。</p> <p>2. <u>役割分担について</u> センター長、主任、副主任を除く11名の委員は、以下の役割を担うこととし、希望する役割がある場合は三輪主任へ申告をする。希望がない場合は適宜割り振りを行うこととした。なお、センター長、主任、副主任は以下の通りとする。 センター長：田中教授 主 任：三輪教授 副 主 任：森本教授（国際学術研究推進部門） 岡本准教授（府民健康支援部門） 細名准教授（看護生涯学習支援部門）</p> <p>[役割分担] 闘病記文庫2名・広報3名・年報2名・会計2名・備品管理2名</p> <p>3. <u>活動計画</u></p> <p>1) 研究・活動支援事業について 今年度は、前身である大阪府立大学療養学習支援センターの募集要項に準じ、微調整を行ったうえで募集し、来年度は新たな研究を生み出し、実践につなぎ、かつ教員の研究業績となるような支援事業を検討する。また、現在は単年度の募集になっているが、複数年度の応募の受付も検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・採択予定件数について <ul style="list-style-type: none"> ・看護生涯学習支援部門 <ul style="list-style-type: none"> ①活動支援②実習施設等との共同研究支援各3~4件 ・府民健康支援部門 <ul style="list-style-type: none"> ①活動支援②共同研究支援 各3~4件 ・国際学術研究推進部門 <ul style="list-style-type: none"> ①学術研究推進支援(国際学会での発表支援等)1件 ・予算について 本活動の予算は290万円とし、うち90万円は実習施設等との共同研究用とする。なお、より多くの研究・活動が採択できるよう、看護生涯学習支援部門では、受益者負担の研究・活動を推奨する。 ・審査・審査日程について 審査については各部門で審査のうえ、副主任が統括し、主任、副主任で再審査を行う。日程は追って調整する。 <p>2) 闘病記文庫について 新規図書購入、配架手続き、利用状況の報告、チラ</p> |

| 日 時 | 活 動 | 概 要 |
|---------------------------------|--|--|
| | | <p>シでの広報活動を行う。今後、キャンパスが統合された際の移設先についても検討する。</p> <p>3) 広報活動 ホームページの作成、更新およびパンフレットの作成を行う。また、現在、看護実践研究センターのトップページの画像が府立大学になっているが、市立大学と府立大学双方の画像になるよう検討する。</p> <p>4) 年報について 内容、目次の検討、原稿依頼、年報の発行およびホームページへの掲載を行う。</p> <p>5) 備品管理について 羽曳野キャンパスで管理している備品の管理保守を行う。今後キャンパスが統合された後の移設先についても検討する。</p> |
| <p>4月27日(水) 18:00～18:40</p> | <p>第1回 部門長会議 主任1名 副主任3名 出席</p> | <p>1. <u>看護実践研究センター研究・活動支援事業募集要項について</u> 第1回看護実践研究センター運営委員会で検討された事項に基づき、募集要項の修正案が三輪主任より提示された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護生涯学習支援部門の要項3点目「看護職の能力開発のための研究的取り組み」は、臨床の方と共同することに重きを置き、要項4点目「実習施設等との共同研究」と同義となるため、削除する。 ・同部門の要項4点目「実習施設等との共同研究」を「関係機関・実習施設との共同研究」とする。 ・府民健康支援部門の要項3点目「地域住民の健康支援のためのケア開発に関する研究的取り組み」は、上記看護生涯支援部門と同じ理由から、要項4点目と同義となるため、削除する。 ・国際学術研究推進部門の募集件数を1～2件に変更する。 ・研究・活動期間の文章に「予算配分に関しては、単年度ごとの審査になる」旨を追記する。 ・予算計画について1件30万円程度を限度とする、とあるが、関係機関・実習施設等と共同で研究や活動を行う申請により多くの予算が配分されるよう、各部門で審議を行う。ただし、これは委員会内のみでの事項とし、公にはしない。 <p>以上をもって、再度募集要項を修正し、看護実践研究センター運営委員会内でメール審議の上、5月6日(金)に全教員へ募集の案内をする。</p> <p>2. <u>看護実践研究センター運営委員会役割分担について</u> 以下にて役割分担が決定された。</p> <p>闘病記文庫： 島山委員 井上(敦)委員 広 報： (精)河野委員 高委員 喜田委員 年 報： 和木委員 南村委員 会 計： 岡野委員 富澤委員</p> |

| 日 時 | 活 動 | 概 要 |
|---------------------------------|-------------------------------------|---|
| | | <p>副 長 官 : 長田委員 安本委員</p> <p>3. <u>予算執行計画について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 研究・活動支援事業の内容を15万円×18件に修正 広報活動にHPの作成、管理運営費を追記する。 <p>4. <u>今年度の活動について</u></p> <p>今年度は部門ごとに活動内容について検討していく。また、看護実践研究センターを広く周知するための広報活動や、阿倍野キャンパスの教員へセンターの活動をアピールすることも行う。併せて今後のセンターの運営について、運営委員会いや部門長会議を行い、年間を通して検討していく。</p> |
| 発議 4月28日(木) 結審 5月6日(金) | 第2回 運営委員会 (メール審議) | <p>1. <u>研究・活動支援の募集要項(修正版)について</u></p> <p>三輪主任より、看護実践研究センター研究・活動支援事業募集要項(修正版)が提示され、メール審議の結果承認された。また2022年5月6日(金)中に募集要項を発信することとした。</p> <p>2. <u>役割分担について</u></p> <p>資料のとおり2022年度の役割分担が発表され、承認された。</p> |
| 6月15日(水) 15:00~16:00 | 第2回 部門長会議 主任1名 副主任3名 出席 | <p>1. <u>看護実践研究センター研究・活動支援について</u></p> <p>2022年度の看護実践研究センター研究・活動支援事業の採択者は15名、助成額2,234,209円となった。</p> <p>2. <u>看護実践研究センター予算について</u></p> <p>総務部会計に提出する予算申請書に、各部門の活動内容を記載するよう依頼があった件について、活動内容は「次年度に向けて検討する」とし、各部門での予算請求はしないこととした。</p> <p>3. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究・活動支援事業に提出された申請書のうち、経費内訳の項目が異なっているものについては代表者に訂正、再提出をしてもらうこととした。 次年度以降、申請の総数が多くなり予算がオーバーとなった場合に不採択課題が生じるのか、選定基準に沿っていけばすべての応募が採択され、予算の配分を減額し調整するかを今後検討していくこととした。 |
| 8月3日(水) 15:00~16:00 | 第3回 部門長会議 主任1名 副主任3名 出席 | <p>1. <u>看護実践研究センター研究・活動支援について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 研究については高い質があれば外部資金も獲得できる中、センターとしてどの程度の質を基準とするのか。 次年度応募件数が増え、予算より上回る申請があった場合、一律予算を削り全採択とするのか、件数や予算に応じて不採択が出てくるのか 審査部門のメンバーに申請者(研究活動代表もしくは共同研究活動者)がいることについて、公平性のある審査ができるのか 次年度からも研究室毎に研究や活動を支援していくのか、センターとして年間のプログラムを組み、専門職向 |

| 日時 | 活動 | 概要 |
|----|----|---|
| | | <p>けセミナーや府民に対する講習会などを行っていくのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様なことを支援するのも大事だが、受講料を取るということは効果が明らかになっているものを提供する事が大事になってくるため、大阪公立大学大学院看護学研究科としての方向性を絞ることが必要ではないか。 ・社会貢献は社会のニーズに対応していないといけないが、個々の研究や活動ではそれぞれにとっての重要性に基づくものになるので、社会ニーズに対応したものなのか、評価しづらい面がある。大阪府・市から提供される研究課題や情報、ニーズにセンターが窓口となって協力対応できる教員とつなぎ、その教員に対しインセンティブとして予算を配分することも検討できるのではないか。 ・センターが推進する社会貢献のあり方を決めていく必要があるのではないか。 ・受益者負担を課した社会貢献活動を業績に繋げていくことは今のままの体制では難しい。 ・受益者負担の活動について、共同口座を使用するに当たっての取り決めなどを作ってほしい。今年度を踏まえた案を事務側で作成するので、検討していただきたい。 <p>2. <u>看護実践研究センターについて</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 国際学術研究推進部門 部門の活動としては、国際学会での発表実績がない教員に対し、登録方法などのサポート等を行う所から始めたい。また、国際学会で発表するためのセミナーの開催や、研究支援事業で予算を獲得した研究について、次年度国際学会で発表できるよう支援を行う等の活動を行うことを検討したい。 2) 府民健康支援部門 委員にあたった教員が単年度で活動を行うことは難しい。活動・研究支援事業とは別に何らかの活動をするのか、採択された研究・活動を集約するのか、担当委員に負担のかかりすぎない活動を行うことを検討したい。 3) 看護生涯学習支援部門 センターの前身で行われていた「看護フォーラム」については、部門の委員だけでできることではないと考えている。また、部門の活動として何を行うかということを決定づける前に、看護職や大阪府・市のニーズを調査し、それに沿った活動を検討した方がいいのではないか。 4) 看護実践研究センターの独立性について センターとして独立性を保つか、大学のセンター群に入り広報や事務作業を委託するか考慮したい。 <p>3. <u>各部門の意見とりまとめについて</u></p> |

| 日 時 | 活 動 | 概 要 |
|------------------------------------|------------------------------|--|
| | | 次年度以降の看護実践研究センターの活動について、各部門で意見を集約し、9月に田中センター長を迎えた部門長会議を行い、再度検討を行う。 |
| 発議 10月12日(水) 結審 10月18日(火) | 臨時 メール審議 | 看護生涯学習支援部門で採択された高講師の課題について、研究経費が申請時より50%以上の用途変更が必要となったため、変更届が提出された。 [変更理由] 他機関協働研究を締結したため、申請していた測定キットが企業から提供され、費用が不要になった。併せて提供されたキットを一時保管する冷凍庫が必要となり、また業者委託代が過分にかかることが判明したため。 [審議結果] メール審議参加委員10名うち承認10名、不承認0名 よって運営委員会の委員のうち過半数から承認が得られたため、研究経費の使用用途の変更が承認された。 |
| 10月11日(火) 17:00～18:00 | 第3回 運営委員会 出席8名 欠席9名 | [審議事項] 1. <u>看護実践研究センターの今後の活動について</u> 1) 研究・活動支援事業 ・申請された研究・活動について、部門ごとに審査はせず、センター長、主任、各部門長のみ審査もしくは運営委員会全体で審査をする。 ・予算内であれば活動事業についてはすべて採択とし、研究事業は新たに基準を設け、それに満たない場合は不採択とする。なお基準については今年度中に検討する。 ・看護生涯学習部門の活動事業で開講されるセミナーや講座については、受益者負担を前提とする。また、対面・オンライン・オンデマンド毎に負担額の基準を設け、全活動一律とする。なお、交流会等の活動については受益者負担が難しいため、講座等の活動とは別の基準を設ける。 ・府民健康支援部門の研究・活動事業については行政や中小企業と連携し、資金を得たうえでの活動も推奨する。 ・看護生涯学習支援部門、府民健康支援部門では活動事業のみの募集とする。 ・国際学術研究推進部門では、国際研究並びに臨床との行動研究を募集する。また、部門の名称も「国際・共同研究推進部門」または「国際・国内学術研究推進部門」に改称する。 ・募集要項には受益者負担の基準額および研究の採択基準及び優先順等を明記する。 ・個々の活動で行っている広報活動を、センターとして取りまとめて行うことを検討する。(チラシなどを年度頭に作成し、病院や関係各所に送付するなど) 2) 広報活動 |

| 日時 | 活動 | 概要 |
|----|----|---|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・「センター長のご挨拶」をHPに掲載するため、河野委員より田中センター長に挨拶文作成の依頼をする。 ・今年度の活動についてHP上に新たなページを作成し、終了した活動とこれから参加が可能な活動が分かるようにする。 ・研究および活動事業についての簡易なパンフレットをHP上に掲載し、必要に応じ各自ダウンロードしていただくようアナウンスする。 <p>3) 闘病記文庫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学術情報センターより医学部に600冊ほどの闘病記文庫があるが、スペース的に羽曳野図書センターの闘病記文庫約2000冊を置いてもらうのは難しい。 ・闘病記文庫の移転先について、学術情報センターの担当者、三輪主任、闘病記文庫担当の畠山委員、井上敦子委員で検討する機会を設ける。 ・阿倍野キャンパスにおいていただけるスペースがないか各委員で検討の上、情報があれば委員会で共有する。 <p>4) 備品</p> <ul style="list-style-type: none"> ・備品担当の長田委員、安本委員で現在ある備品リストに写真を添付し資料を作成の上、阿倍野キャンパス教員に周知し、使用したいものがないか確認をする。 ・需要のないものや、劣化により使用できないものは廃棄する。 <p>[報告事項]</p> <p>1. <u>CNS ネットワーク活動</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度はCNS ネットワーク交流会を年5回企画し、3回終了した。各回20名ほどの参加状況である。 ・CNS ネットワーク交流会は、前年度までは府立大学の修了生や院生のみに参加が限られていたが、今年度からはそれに限らず、対象を広げた。また、講義形式ではなく修了生から話題を提供してもらう形式で開催した。 ・CNS ネットワークに登録している方に対しては2~3か月に1回メールマガジンを発行、また交流会のチラシを関係各所に配布するなどの広報活動を行っている。今後、学外の方にもCNS ネットワークに登録してもらえるよう、広報活動の方法を検討する。 <p>[その他]</p> <p>1. <u>会計について</u> 前身である療養学習支援センター運営委員会で行った会計処理に準じる。</p> <p>2. <u>年報について</u> 12月に各研究・活動代表者に年報の原稿作成依頼をする。原稿の提出先は看護実践研究センター事務局とする。</p> <p>3. <u>研究・活動報告会について</u> 学内向けに3月中旬にオンラインで開催予定である。</p> |

| 日時 | 活動 | 概要 |
|-------------------------|------------------------------|--|
| 12月6日(火) 15:00～16:00 | 第4回 運営委員会 出席9名 欠席8名 | <p>[審議事項]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>看護実践研究センター報告会について</u> <ul style="list-style-type: none"> ・2022年度看護実践研究センター報告会の日程は2023年3月17日(金)13時からに決定した。 ・各研究、活動報告のタイムテーブルは部会活動および研究10分(発表8分質疑応答2分)、活動7分(発表5分、質疑応答2分)とする。 ・報告会開会挨拶を田中センター長、閉会挨拶を三輪主任、各部門の進行を各部門長とする。また進行について問題が生じた場合、主任および部門長で調整を行う。 ・報告会のスケジュール確認および会計報告の依頼を事務局から行う。併せて看護学研究科全教員に報告会の日程を周知する。 2. <u>広報活動について</u> <ol style="list-style-type: none"> 1) <u>パンフレット</u> 研究活動および部会担当者からパンフレット案について承認が得られ、看護学研究科ホームページに掲載済みであるとの報告がなされた。 2) <u>ホームページ</u> 上記のとおりパンフレットを掲載し随時更新をしており、センター長のご挨拶についても掲載予定であるとの報告がなされた。 3. <u>闘病記文庫について</u> <ul style="list-style-type: none"> ・羽曳野図書センターの闘病記文庫について、阿倍野医学図書館への移管は重複図書以外可能である。 ・重複している図書は学術情報課で調査し、今後その図書の扱いについて検討する。 ・羽曳野図書センターの闘病記文庫は消耗図書となっているが、阿倍野医学図書館の闘病記文庫は資産図書扱いとなり、共通したラベリングが必要であるため、時期を調査の上学術情報課にてラベリングが行われる。 ・闘病記文庫の貸し出しについて、阿倍野医学図書館は本学関係者のみとなっているが、地域に開かれた貸出の仕組みや貸出期間などについても検討中である。 4. <u>年報について</u> <ul style="list-style-type: none"> ・執筆要項について案のとおりとし、巻頭言は田中センター長、看護実践研究センターの目的と事業内容については三輪主任が執筆する事で承認された。 ・年報の表紙案のうち3点を候補とし、メール審議にかけることが決定された。 5. <u>その他</u> <ol style="list-style-type: none"> 1) <u>備品について</u> 療養学習支援センター棟の備品類は全教員に使用の希望、使用予定を調査のうえキャンパスの移転までに廃棄および整備を計画的に行う 2) <u>看護生涯学習支援部門から</u> |

| 日時 | 活動 | 概要 |
|--------------------------------|---|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・専門職を対象としたセミナー等の受益者負担の金額について「大阪市の市民利用施設に係る受益者負担のあり方」を参考とし、活動毎に係る経費の50%を受益者負担とすることが提案され、承認された。 ・地域への貢献活動および看護学研究科の活動などの情報を発信していく必要があるため、センターとして地域に向けた活動を可能な限り早い段階の開催を検討する。 |
| <p>3月2日(火) 15:00～16:00</p> | <p>第5回 運営委員会 出席14名 欠席2名</p> | <p>[審議事項]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>研究助成事業</u> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の選定基準の項目は、資料1の通り7項目策定し、1および6については該当か非該当であるかを定める。2～5および7の項目については、それぞれの内容をスコア化し評価したうえで助成を行う研究を決定する。 ・審査は部門の委員4名が行い、同一スコアになった研究課題などについてはセンター長および主任、他部門長にも意見を伺う。なお、審査に当たっての研究課題は匿名化し、研究組織入っている委員は審査を行わないこととする。 ・選定基準6の「研究方法に倫理的問題がない」の項目について、倫理委員会を通過している必要があるということではなく、研究計画書について倫理的に問題があるかないかを該当・非該当で審査する。 2. <u>受講料収納方法について</u> 次年度から採用予定の受講料収納方法及び公開講座申し込み専用のIPの開設について承認が得られた。 3. <u>委員会報告および来年課題について</u> <ul style="list-style-type: none"> ・CNS ネットワーク活動のメールマガジンは2、3か月に1回の発刊に訂正する。 ・次年度は、CNS ネットワークに登録していない教員もいるので、年2回を目安に活動をPRし、学内から再度周知の上、だれを対象として学外に向けて活動を広げていくかを検討する。 <p>[報告事項]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>看護実践研究センター報告会について</u> 3月17日(金)13時から開催の看護実践研究センター報告会について、当日は各部門長が司会を行うことの確認がなされ、委員は質疑応答に参加するよう要請がなされた。 2. <u>CNS ネットワーク活動について</u> <ul style="list-style-type: none"> ・CNS ネットワーク活動は今年度交流会を行い、CNS、ブレCNSが参加し、CNSの育成面で有意義であった。 ・CNS ネットワーク活動への登録の募集案内チラシは毎年発刊し、今年度も博士前期課程への配布を行った。今年度修了予定者にチラシを配布する時期については未定のため、確認を急ぐこととした。また、CNS ネット |

| 日 時 | 活 動 | 概 要 |
|-----------------------------|--------------------------|---|
| | | <p>ワークの登録者は終了者の何割であるかも担当委員が確認することとした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CNS ネットワークにおける CNS への相談は現在のところ会員同士のみで行われており、一般の方が相談する仕組みにはなっていないことが確認された。 <p>3. <u>闘病記文庫について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・阿倍野医学図書館および羽曳野図書センターに蔵書のない新規図書 63 冊を 88310 円にて運営委員会予算で購入し、近隣施設及び学内に闘病記文庫のチラシを配布した。 ・闘病記文庫を阿倍野医学図書館へ集約するにあたり、学術情報課および両キャンパス図書委員と情報共有の上進めており、次年度も引き続き移転の時期や方法などを検討していく。 <p>4. <u>年報について</u></p> <p>研究助成の報告書について、研究結果や考察を除いた年報としてホームページに公表できる範囲の様式と、結果や考察も記載した、委員会への報告用の方式 2 種類を提出することを次年度以降は求めることとし、それぞれの提出時期や内容、ページ数など規定を設けることとした。</p> <p>5. <u>会計について</u></p> <p>会計報告の提出期限は過ぎているが、すべての活動が終わっていない活動や、人件費が未確定の活動について会計の報告書が未提出であることが報告された。</p> <p>6. <u>その他</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・次年度は第 3 回運営委員会で検討された通り、活動 2 部門（看護生涯学習支援部門、府民健康支援部門）と研究部門（国際・国内学術研究推進部門）に分かれて助成事業を行うことを検討するにあたり、3 月の教授会では部門名称の変更を審議していただき、部門の内容や助成に関する募集要項、研究の選定基準については運営委員会内で検討の上、4 月の教授会で審議していただけるよう勧めていくこととした ・看護生涯学習支援部門の受益者負担が 50% とすることについて、第 4 階運営委員会で検討、承認されたため、次年度の募集要項に明記し周知することとする。ただし、看護生涯学習支援部門全活動について受益者負担を求めることとしていたが、講習やフォーラムを行わない活動については受益者を特定できず、別の基準を検討する必要があるため、部門内で次年度も引き続き検討していくこととした。 |
| 3 月 17 日 (金) 13:00～15:44 | プロジェクト 研究・活動助 成報告会 | <p>開会挨拶：田中センター長 閉会挨拶：三輪主任 進行：三輪主任、細名副主任、岡本副主任、森本副主任</p> <p>1. <u>CNS ネットワーク活動報告(1 題)</u></p> |

| 日時 | 活動 | 概要 |
|----|----|--|
| | | <p>2. 研究・活動助成事業報告</p> <p>1) 看護生涯学習支援部門（研究2題活動5題）</p> <p>【研究報告】</p> <p>① 在留外国人への産褥保健指導に関わる助産師のストレスとその関連要因の検討 - 尿中バイオピリンによる評価 - 高 知恵講師（母性看護・助産学分野）</p> <p>② うつ病入院患者への排便ケアによる患者の変化 - 事例研究 - 富川 順子教授（精神看護学分野）</p> <p>【活動報告】</p> <p>① 地域包括支援センター看護職のネットワークの構築 岡野 明美准教授（在宅看護学分野）</p> <p>② 同期型オンライン形式による集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座 佐竹 陽子准教授（急性看護学分野）</p> <p>③ がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース（がん看護インテンシブコース） 林田 裕美准教授（がん看護学分野）</p> <p>④ 家族への看護を考える会 家族看護オンラインフォーラム 井上 敦子講師（家族看護学分野）</p> <p>⑤ 看護職のための継続教育実践講座 紙野 雪香准教授（看護教育学）</p> <p>⑥ 看護職・介護職のための腰痛予防推進リーダー研修会 杉本 吉恵教授（看護技術学）</p> <p>⑦ 看護職を対象とした実践に活かす看護研究セミナー 細名 水生准教授（ヒューマンケア科学分野）</p> <p>2) 府民健康支援部門（研究1題、活動3題）</p> <p>【研究報告】</p> <p>① 心身障がい児の性行動の実態と養育者が認知する当人のセルフマネジメントに関するニーズ 古山 美穂准教授（母性看護・助産学分野）</p> <p>【活動報告】</p> <p>① 健康的に日常を生きることを応援する「ホッと&ハートの会」 南村 二美代准教授（慢性看護学分野）</p> <p>② 地域における出前健康講座 根来 佐由美講師（地域看護学分野）</p> <p>③ 暮らしの保健室における住民育成活動 深山 華織講師（在宅看護学分野）</p> <p>3) 国際学術研究推進部門（研究2題）</p> <p>【研究報告】</p> <p>① 日本語版ワクチンリテラシー尺度の開発 相原 ひろみ准教授（看護技術学）</p> <p>② 子どもへの COVID-19 ワクチン接種の動向とワクチン</p> |

| 日 時 | 活 動 | 概 要 |
|-----|-----|---|
| | | リテラシー、態度、意図および COVID-19 ワクチン接種に関連する因子の検討 益 加代子准教授（看護管理学分野） |

2022 年度 看護実践研究センター運営委員会

センター長：田中京子教授 主任：三輪恭子教授

<看護生涯学習支援部門委員>

細名水生准教授（副主任）長田暁子准教授 河野あゆみ准教授 井上敦子講師

<CNS ネットワーク活動委員>

富川順子教授 岡野明美准教授 長田暁子准教授（兼任）井上敦子講師（兼任）喜田雅彦助教

<府民健康支援部門委員>

岡本双美子准教授（副主任） 南村二美代准教授 畠山紀子講師 安本理抄講師

<国際学術研究推進部門委員>

森本明子教授（副主任） 和木明日香准教授 高知恵講師 富澤理恵講師

（文責：三輪恭子）

4. 会計報告

1) 2022年度 運営委員会の予算執行状況

| 予算(細目) | 予算額(円) | 受講料収入(円) | 執行額(円) | 残額(円) |
|----------------------------------|-------------------|----------|-------------------|-----------------|
| 研究・活動支援事業(※詳細は下記一覧表を参照) | 2,234,209 | 161,000 | 2,145,218 | 249,991 |
| CNSネットワーク活動費 | 315,800 | | 284,423 | 31,377 |
| 広報活動 | 100,000 | | 0 | 100,000 |
| 闘病記文庫の整備・広報 | 30,000 | | 102,198 | (72,198) |
| 備品修理 | 50,000 | | 0 | 50,000 |
| (事務作業) OKI A3カラーレーザー複合機MC883DNWV | 343,310 | | 343,310 | 0 |
| 小計 | ¥3,073,319 | | ¥2,875,149 | ¥359,170 |

*闘病記文庫にかかる費用は広報活動および備品修理の予算を使用した

【執行明細】・闘病記文庫63冊購入費88,310円 ・闘病記文庫搬入運搬料5,764円 ・チラシ印刷費(カラー両面1000部) 5246円
・送付用文具(ラベルシール等) 1158円 ・封筒(角2 大阪公立大学封筒20枚) 300円 ・発送費(14施設) 1420円

2) プロジェクト研究・活動助成金の執行状況の詳細

| 研究・活動課題 | 活動代表者 | 助成金額(円) | 受講料収入(円) | 執行額(円) | 残額(円) |
|---|--------|------------------|----------------|------------------|----------------|
| 在留外国人への産褥保健指導に関わる助産師のストレスとその関連要因の検討～尿中バイオピリンによる評価～ | 高 知恵 | 300,000 | | 299,882 | 118 |
| うつ病入院患者への排便ケアによる患者の変化～事例研究～ | 富川 順子 | 149,525 | | 58,109 | 91,416 |
| 地域包括支援センター看護職のネットワークの構築 | 岡野 明美 | 126,096 | | 126,096 | 0 |
| 同期型オンライン形式による集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座 | 佐竹 陽子 | 196,600 | 104,000 | 300,573 | 27 |
| がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース(がん看護インテンシブコース) | 林田 裕美 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 家族への看護を考える会 家族看護オンラインフォーラム | 井上 敦子 | 163,342 | | 135,991 | 27,351 |
| 看護職のための継続教育実践講座 | 紙野 雪香 | 180,040 | | 180,040 | 0 |
| 看護職・介護職のための腰痛予防推進リーダー研修会 | 杉本 吉恵 | 171,900 | 33,000 | 204,893 | 7 |
| 看護職を対象とした実践に活かす看護研究セミナー | 細名 水生 | 11,000 | 24,000 | 34,997 | 3 |
| 心身障がい児の性行動の実態と養育者が認知する当人のセルフマネジメントに関するニーズ | 古山 美穂 | 270,950 | | 270,950 | 0 |
| 健康的に日常を生きることを応援する「ホッと&ハートの会」 | 南村 二美代 | 35,120 | | 33,919 | 1,201 |
| 地域における出前健康講座 | 根来 佐由美 | 137,632 | | 8,874 | 128,758 |
| 暮らしの保健室における住民育成活動 | 深山 華織 | 92,004 | | 92,004 | 0 |
| 日本語版ワクチンリテラシー尺度の開発 | 中山 祐一 | 100,000 | | 100,000 | 0 |
| 子どもへのCOVID-19ワクチン接種の動向とワクチンリテラシー、態度、意図およびCOVID-19ワクチン接種に関連する因子の検討 | 志田 京子 | 300,000 | | 300,000 | 0 |
| 合計 | | 2,234,209 | 161,000 | 2,146,328 | 248,881 |

3) 会計総括

運営委員会の予算執行について、年度当初予定していた予算の執行の必要性がなくなった予算「広報活動」「備品修理」、必要以上の予算を必要とした「闘病記文庫の整備・広報」があった。プロジェクトについては、コロナ感染や研究計画の変更等変更があったことによる残高の発生となった。公立大学になって初めての委員会であり旧委員会を参照にした予算であった。次年度は学舎統合等を見据えた予算計画の検討が必要である。

Ⅲ CNS ネットワーク活動

構成員：富川（委員長） 長田准教授 岡野准教授 井上講師 喜田助教 佐々木事務員

1. 2022 年度の活動目標

- 1) 会員への情報発信をメールマガジンの発刊を中心に行う。
- 2) 専門看護師（以下 CNS）・プレ CNS 会員の CNS 活動実践能力の向上と交流促進に役立つ交流会を開催する。

2. 2022 年度活動内容

1) 会員への情報発信

修了生への広報、交流会案内チラシ発送、メールマガジン発刊、HP 更新等による会員への情報発信を行い、2023 年 1 月の会員登録数は 118 名であった。

(1) 会員への情報発信のためのメールマガジンの発刊

2022 年は 5 回のメールマガジンを発刊し（表 1）、看護に関わるセミナー等の情報や交流会の開催・終了後の情報の発信を行った。

発刊月ごとに各構成員がメールマガジンの作成を担当し、各構成員の挨拶や交流会の案内と報告、CNS に役立つセミナーの告知や 1 月には CNS 合格者の声などを盛り込み内容の充実を図った。

今後も CNS の動きのトピックや CNS 活動について構成員の感じていることを発信することにより、会員に読んでもらえるメールマガジンとして更なる内容の充実を図ることが課題である。

| 回数 | 発刊月 | 内容 |
|------|------|---|
| 第1回目 | 5 月 | 今年度の挨拶、CNS ネットワーク活動企画案内、2022年度交流会チラシ掲載、第1回交流会申込案内、第2回交流会告知 |
| 第2回目 | 8 月 | 感染症看護CNS 教員による挨拶、第1回交流会申込案内、第2回交流会告知、2022年度交流会チラシ掲載、その他研修等のお知らせ(精神看護オンライン研修会) |
| 第3回目 | 9 月 | 第1回第2回交流会の報告、参加者の声、第3回交流会申込案内、2022年度交流会チラシ掲載 |
| 第4回目 | 11 月 | 第4回交流会申込案内、第3回交流会報告、参加者の声、第5回交流会告知、その他研修のお知らせ(精神看護オンライン研修会・日本専門看護師協議会主催 スキルアップセミナー) |
| 第5回目 | 1 月 | 第4・5回交流会報告、今年度 CNS 試験合格者の声、振り返りと次年度挨拶 |

表 1 2022 年度メールマガジン発刊回数と内容

(2) ホームページ (HP) による情報発信と交流

HP では他 CNS の検索を行ったり、会員同士のピアコンサルテーション機能を活用できることから、メールマガジン等でこの活動についての広報の継続を行った。

また、トップページトのピックスより広報、交流会の案内と報告を行った。(図1)

なお、大阪公立大学への移行に伴い HP の移設を行ったが、旧 HP 内での会員検索と相談機能の移設は行えなかった。次年度も旧 HP 上で使用できるようにこの機能を残す予定ではあるが、その後の会員同士のピアコンサルテーションの方法については次年度も引き続きの検討課題である。



図1 2022年度CNSネットワークHPによる交流会の報告

(3) 会員登録を呼びかけるチラシ

2022年度大学院看護学研究科博士前期課程修了生を中心にCNS ネットワーク登録を案内するチラシの配付も例年どおり行った。(図2)



図2 2022年度CNSネットワーク会員登録案内チラシ

2) 会員のための交流会の開催

(1) 2022 年度交流会概要

2022年度も、CNS 会員の能力開発に役立てることができ会員同士の交流が促進することを目指した交流会を開催した。(図3)

各CNS構成員が1つの交流会を企画・開催・運営し、Zoomの利点を活かした参加しやすい小規模な交流会を、より回数を多くして参加者のニーズに合わせてるようにバリエーションを増やして開催した。

専門看護師が行う臨地実習指導をテーマにした第一回目のあと、CNSの役割開発、調整、直接ケア、倫理調整についての理解と技法のブラッシュアップに役立てることを狙いとした第2～第5回までの交流会を企画・開催した。参加可能な対象を、本学修了生以外にも広げて実施した。(表2)



図3 2022年度交流会案内チラシ

| | 交流会テーマ | 企画 運営 | 日時 |
|---|---|----------|--------------------------|
| 1 | 専門看護師の臨地実習をいろんな分野で考えてみる | 喜田 | 7月23日(土) 10:00～11:30 |
| 2 | CNSの役割について話し合おう ～新人CNSの取りくみからCNSの役割構築・開発、高度実践とは何かを考える～ | 岡野 | 8月6日(土) 10:00～11:30 |
| 3 | 退院調整について話し合おう ～精神看護の事例を通して～ | 富川 | 9月17日(土) 10:00～12:00 |
| 4 | 病とともに生きる親とその子どもを支える看護について考えよう | 井上 | 10月29日(土) 13:00～14:30 |
| 5 | 倫理調整について考えよう | 富川 | 11月19日(土) 10:00～11:30 |

表2 2022年度交流会企画

(2) 交流会に参加した会員の反応と評価

表3に各交流会のテーマと参加者数、アンケート協力者数と肯定的な評価を回答した人数を示す。表4にはアンケート内の自由記述の概要を示す。

意見交換できた、他分野の CNS の意見を聴けて学べたとする感想が多く、交流の促進につながったと考える。また CNS 活動についても具体的に学べたとする感想が多く、CNS 活動実践能力の向上に役立つ会になったと考える。

毎回 1～2 名の本学修了生以外の CNS も参加しており、さまざまな CNS の意見を聴くことができ、CNS 同士の交流が促進されると、本学修了生の CNS にも好評であった。

2021年度の交流会同様に、CNSの役割1つずつについて学べる勉強会が好評であった。

2022 年度も気軽に参加できて、知識を振り返ることができる交流会の開催に力を入れた活動を行った結果、CNS・プレ CNS の交流を促進し、CNS 活動を支援する場の提供をすることができたのではないかと考える。

3. 2023 年度の活動に向けて

今年度から大阪公立大学として、看護実践研究センターの一部として、会員へのメールマガジンの発刊と交流会企画を中心にした活動を開始した。参加者によると、専門看護師教育と交流の場として役立っているということであるので、今年度と同様の活動を継続していきたい。

表3 交流会テーマ，参加者数とアンケート概要

数字の単位 (人)

| | 交流会テーマ | 参加者数 | アンケート回収数 | 意見交換できた | 良かった | 役立つ |
|---|------------|------|----------|---------|------|-----|
| 1 | 専門看護師の臨地実習 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 2 | CNSの役割構築 | 12 | 8 | 7 | 8 | 8 |
| 3 | 退院調整 | 10 | 8 | 8 | 7 | 8 |
| 4 | 実践(家族看護) | 10 | 8 | 8 | 8 | 8 |
| 5 | 倫理調整 | 13 | 9 | 9 | 9 | 9 |

1. CNSネットワーク交流会において十分な意見交換ができましたか？

| | | 十分にできた | まあまあできた | できた | あまりできなかった | 全くできなかった |
|-----|--------|--------|---------|-----|-----------|----------|
| 第1回 | 人数(/1) | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 第2回 | 人数(/8) | 0 | 4 | 3 | 1 | 0 |
| 第3回 | 人数(/8) | 2 | 5 | 1 | 0 | 0 |
| 第4回 | 人数(/8) | 6 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 第5回 | 人数(/9) | 5 | 3 | 1 | 0 | 0 |

2. 今回のCNSネットワーク交流会に参加して良かったと考えますか？

| | | とても良かった | 良かった | 普通 | 良くなかった | とても良くなかった |
|-----|--------|---------|------|----|--------|-----------|
| 第1回 | 人数(/1) | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 第2回 | 人数(/8) | 3 | 5 | 0 | 0 | 0 |
| 第3回 | 人数(/8) | 4 | 3 | 1 | 0 | 0 |
| 第4回 | 人数(/8) | 6 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 第5回 | 人数(/9) | 8 | 1 | 0 | 0 | 0 |

3. CNSネットワークは今後の自分に役立つと考えますか？

| | | とても役立つ | 役立つ | 普通 | 役立たない | 全く役立たない |
|-----|--------|--------|-----|----|-------|---------|
| 第1回 | 人数(/1) | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 第2回 | 人数(/8) | 3 | 5 | 0 | 0 | 0 |
| 第3回 | 人数(/8) | 4 | 4 | 0 | 0 | 0 |
| 第4回 | 人数(/8) | 6 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 第5回 | 人数(/9) | 8 | 1 | 0 | 0 | 0 |

表4 交流会アンケート感想の自由記述内容

| 回数 | 交流会テーマ | 感想の自由記述内容抜粋 |
|-----|------------|--|
| 1回目 | 専門看護師の臨地実習 | 他分野の実習に関して、すぐに情報が手に入る環境にいながら、ほとんど知らないことに気がついた。井の中の蛙にならないよう、積極的に情報収集していこうと思う。対面開催の良さもあるが、オンラインのほうが物理的にも身体的にも楽です。 |
| 2回目 | CNSの役割構築 | 組織文化を見極めることや自身が今後どのように役割開発していくか、とても参考になりました。年数の近い方たちが中心の会だったので、自分のこれからの活動に取り入れやすいことも多く、また同じような悩みを持ちながら日々実践していることがはげみになりました。 |
| 3回目 | 退院調整 | 大阪公立大学以外で院生をしています。なかなか院外の院生や教授、CNSと話す機会がないのでこういった機会は本当に勉強になりましたし、自分に足りない視点など気づきが多く有意義な時間でした。しかも、こんな有意義な交流会に無料で参加できる事も学生にとっては、有難いことだと思います。 |
| 4回目 | 実践(家族看護) | 事例を通して、家族の持っている力を見極めて、その家族らしい生活を目指すことで、患者が治療に前向きになれることが分かりました。家族の関係性が修復不可能なケースへの対応方法としても具体的に先生方からお話いただき、とても勉強になりました。 |
| 5回目 | 倫理調整 | 倫理検討の4分割法を細かく学ぶことができとても勉強になりました。事例検討の中で、組織の視点で分析することの必要性、法律の視点の必要性を入れることは、問題解決の大きな糸口になるのではないかと考えました。そして、CNSとして組織の改善という点でも機能していかなければならないことを学びました。 |

大阪公立大学大学院看護学研究科 看護実践研究センター規程

令和4年4月1日

規程第116号

(趣旨)

第1条 この規程は、大阪公立大学大学院看護学研究科規程第12条第1項の規定に基づき、地元創成を目指す看護の研究・教育・実践を推進し、地元の看護の発展及び人びとの健康と生活の質向上に寄与するとともに、国際的学術拠点として国際的な学術研究活動を促進するため、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(業務)

第2条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 研究支援に関すること。
- (2) 地域貢献に関すること。
- (3) 人材育成に関すること。
- (4) 国際学術研究に関すること。
- (5) その他センターに関し必要なこと。

(運営)

第3条 センターの円滑な運営を図るため、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2 委員会に関する事項は別に定める。

(組織)

第4条 センターに所長、主任、副主任及び研究員を置く。また、共同研究等を行うために学外研究員を置くことができる。

- 2 所長は、看護学研究科長（以下「研究科長」という。）をもって充てる。
- 3 主任及び副主任は、看護学研究科教授会の構成員の中から、研究科長が任命する。
- 4 研究員は、看護学研究科教員の中から、委員会の推薦に基づき研究科長が任命する。
- 5 学外研究員は、委員会の推薦に基づき研究科長が委嘱する。

(所長)

第5条 所長は、センターの業務を統括する。

- 2 主任は、センターにおける研究・教育に関する業務を行うとともに、所長を補佐し、所

長に事故があるときは、その職務を代行する。

- 3 副主任は、センターにおける研究・教育に関する業務を行うとともに、主任を補佐する。

(任期)

第6条 主任及び副主任の任期は2年とする。ただし、再任は妨げない。

- 2 研究員の任期は1年とする。ただし、再任は妨げない。

- 3 学外研究員の任期は1年とする。ただし、再任は妨げない。

(委任)

第7条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。

大阪公立大学大学院看護学研究科 看護実践研究センター運営委員会規程

令和4年4月1日

規程第23号

(趣旨)

第1条 この規程は、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター規程第3条第1項の規定に基づき、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター運営委員会(以下「委員会」という。)に関し必要な事項を定めるものとする。

(職務)

第2条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) 事業計画に関すること。
- (2) 予算に関すること。
- (3) その他、看護実践研究センターの管理運営に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 看護実践研究センター所長
- (2) 看護実践研究センター主任
- (3) 看護実践研究センター副主任 3名(看護生涯学習支援部門、府民健康支援部門、国際学術研究推進部門の各部門責任者を兼務)
- (4) 研究科教授会が選出した看護学研究科の教員 9名(看護生涯学習支援部門、府民健康支援部門、国際学術研究推進部門の各部門に3名ずつ配置)
- (5) 前各号に掲げる者のほか、委員会が必要と認める者

2 前項の委員は所長が任命する。

(任期)

第4条 前条第1項第4号及び第5号の委員の任期は2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の委員は、再任されることができる。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置く。

- 2 委員長は、看護実践研究センター主任をもって充てる。
- 3 委員長は、委員会の議長となる。
- 4 委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、看護実践研究センター副主任がそ

の職務を代行する。

(会議)

第6条 委員会の会議は、委員長が招集し会議を掌理する。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

第7条 委員長は必要あると認めるときは、委員会に学識経験者等委員以外の者の出席を求め意見を聴くことができる。

(委任)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。

編集後記

2022年4月、大阪府立大学と大阪市立大学が統合し、大阪公立大学が開学しました。大阪府立大学療養学習支援センターは、看護実践研究センターとして新たに生まれ変わり、今年度を初年度として地域貢献や研究支援、人材育成や国際学術研究等に関する事業を行ってまいりました。今後も地域社会における大学の役割を果たすべく、多様な活動を推進してまいります。新大学開学に伴い、ご多忙な中、年報第1巻の発刊にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

看護実践研究センター 年報担当 和木明日香・南村二美代

大阪公立大学大学院看護学研究科
看護実践研究センター年報
第1巻
2023年3月発行

編集 大阪公立大学大学院看護学研究科
看護実践研究センター運営委員会
発行 大阪公立大学大学院看護学研究科
看護実践研究センター

阿倍野キャンパス：大阪市阿倍野区旭町1-5-17
羽曳野キャンパス：羽曳野市はびきの3-7-30

